わたしたちの受け継ぎ

末日聖徒イエス・キリスト教会歴史概観

発行：末日聖徒イエス・キリスト教会

発行：末日聖徒イエス・キリスト教会
ユタ州ソルトレーク・シティー

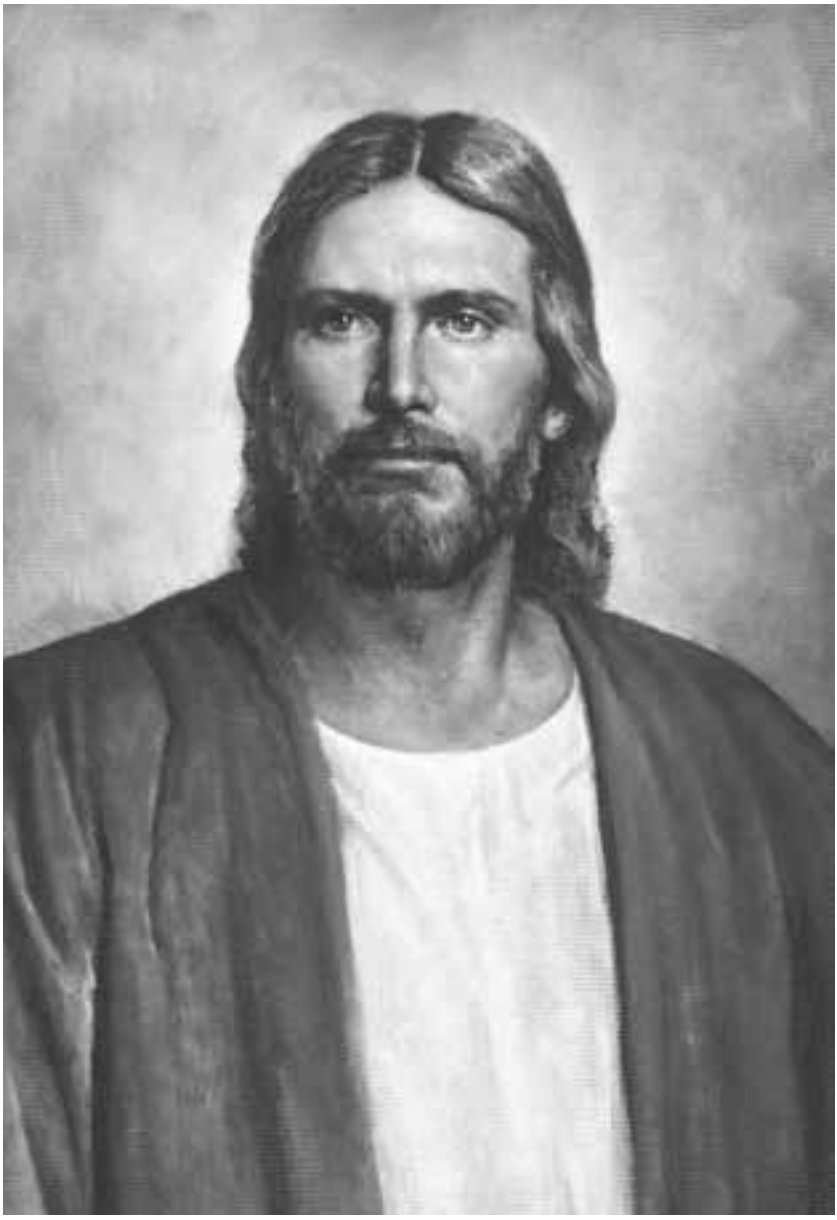
p.46－グレッグ・オルセン画「リバティーの牢獄のジョセフ・スミス」© グレッグ・オルセン
p.62－グレン・ホプキンソン画「パーリーストリートの東端」© グレン・ホプキンソン

© 1996 Intellectual Reserve, Inc.
版権所有

印刷：日本
英語承認：1996年 5 月
翻訳承認：1996年 5 月
原題：*Our Heritage: A Brief History of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints*
Japanese
35448 300

目　次

序 v
第 1 章：最初の示現 1
第 2 章：教会の基礎の確立 5
第 3 章：オハイオ州カートランドでの王国の建設 19
第 4 章：ミズーリ州でのシオンの確立 34
第 5 章：ノーブーでの犠牲と祝福 49
第 6 章：信仰込めて一歩ずつ 63
第 7 章：もろもろの国民のための旗 73
第 8 章：試練と試しの期間 83
第 9 章：発展する教会 94
第10章：世界に広がる教会 107
第11章：今日（こんにち）の教会 117
結　び 127
注 129



この神権時代のすべての預言者が,
救い主イエス・キリストの神聖な使命を証(あかし)してきた。

序

本書の中心を成すメッセージは，末日聖徒イエス・キリスト教会が設立当初から宣言してきたものである。今日（こんにち）の神権時代の最初の預言者であるジョセフ・スミスはこう教えている。

「教会の基本原則は，イエス・キリストが死んで葬られ，3日目によみがえって天に昇られたという使徒と預言者の証（あかし）である。わたしたちの宗教にかかわるほかのすべてのものは，それに付随するものにすぎない。」[1]

ジョセフ・スミスの跡を継いだすべての預言者が，この救い主の神聖な使命に対して自らの証を付け加えてきた。大管長会はこう断言する。

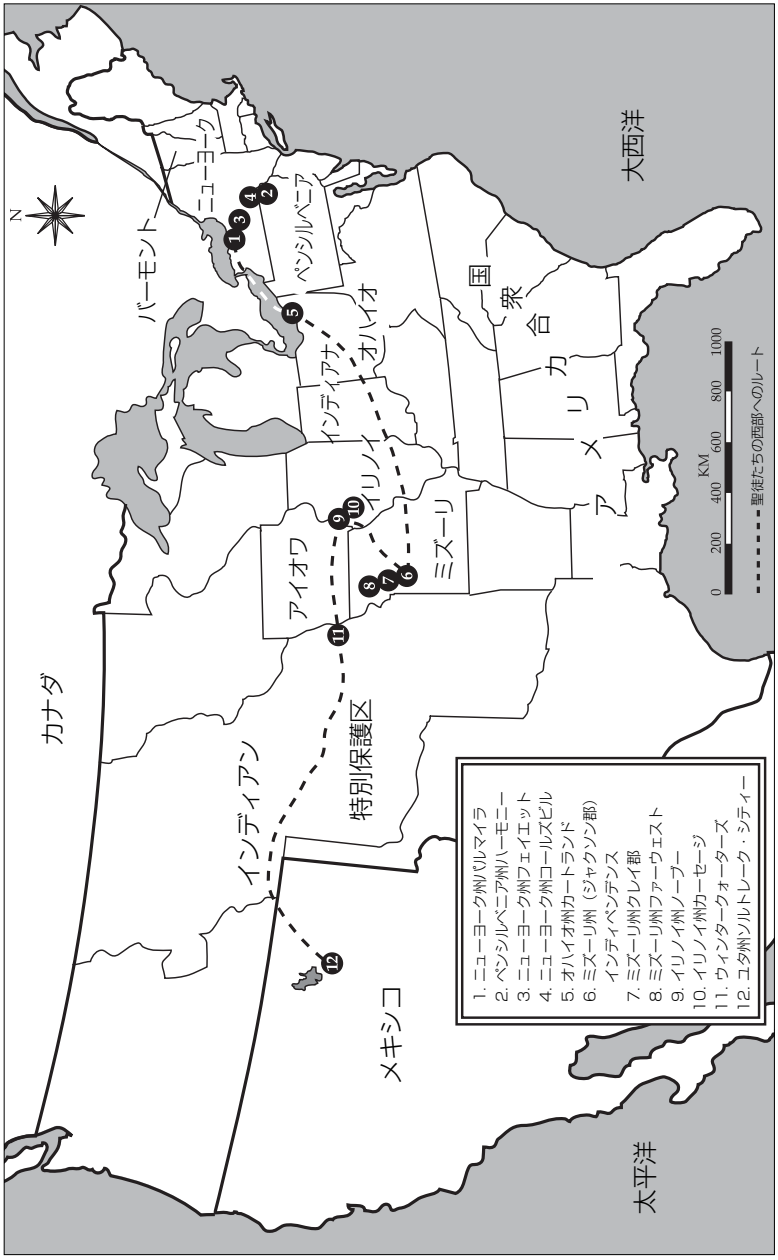
「全世界に対してイエス・キリストについての証を述べるよう召され，聖任された者として，わたしたちは主が約2,000年前の復活祭の朝によみがえられ，今日（こんにち）生きておられることを証します。主は栄光に満ちた不滅の骨肉の体を有しておられます。主は救い主，世の光，命であられます。」[2]

何百万もの忠実な聖徒たちも，イエス・キリストが神の御子であられることを証してきた。聖徒たちはこの知識に啓発され，地上における神の王国である末日聖徒イエス・キリスト教会の建設のために犠牲をささげてきたのである。教会設立の物語は，信仰と奉献と喜びの物語であり，近代の世界に神の真理を教えた預言者たちの物語である。また，イエス・キリストの完全な福音を探し求め，一度それを見いだすや救い主の弟子となるために進んで犠牲を払った，あらゆる職業の男女の物語である。このたくましい聖徒たちは苦痛や困難の中を雄々しく進み，最も暗い時代においてさえ，神の慈しみと神の愛の喜びを証してやまなかった。こうして彼らは，信仰と勇気と従順と犠牲の遺産を残したのである。

こうして受け継いだ信仰は今日まで脈々と続いている。世界中に住む末日聖徒は自国における現代の開拓者であり，新たな問題や機会に満ちたこの時代を，信仰と勇気をもって生きている。歴史のページにはまだ何も記されていない部分がある。後に続く世代に信仰という受け継ぎを残す機会がわたしたち一人一人にも与えられているのである。わたしたちの残す受け継ぎを通

して，後の世代の人々はイエス・キリストの福音に生き，それを人々に伝える喜びを理解することであろう。

わたしたちは，先人の信仰について学べば学ぶほど，ともに手を取り合って救い主について証し，王国の建設に力を尽くしてきた人々のことがよく理解できるようになるのである。



1847年のアメリカ合衆国。この地図は初期の教会歴史の重要な地点と移動のルートを示すものである。

少年ジョセフ・スミスは聖文を読んで，
どの教会が正しいか主に祈ってみようと考えた。

最初の示現

回復の必要性

イエスの使徒の死後，神権の力や多くの福音の真理が地上から取り去られ，大背教と呼ばれる長い霊的な暗黒の時代が始まる。この背教を予見した預言者アモスは，「ききん……それはパンのききんではない，水にかわくのでもない，主の言葉を聞くことのききん」に見舞われる時代が来ることを宣言した（アモス８：11）。この長い大背教の時代，完全な福音の真理を求めた人々は大勢いた。しかし，それを見いだすことはできなかった。多くの教派の聖職者たちが異なったメッセージを説き，自分の教派への加入を呼びかけた。その試みのほとんどは誠実なものであったものの，完全な福音や神の権能を有するものは一つもなかった。

しかし，主はその慈悲により，主の福音と神権の力がいつの日か地上に回復され，二度と取り去られることはないと約束された。そして19世紀の夜明け，その約束が成就し，背教の長い夜が終わりを告げる日が間もなく訪れる。

少年ジョセフ・スミスの勇気

1800年代初期，ジョセフ・スミス・シニアとルーシー・マック・スミスの家族はアメリカ合衆国ニューハンプシャー州レバノンで生活していた。彼らは貧しく，無名であり，過酷な労働で得る収入は，家族を支えるためのわずかなものでしかなかった。５番目の子供であるジョセフ・ジュニアは７歳のときに腸チフスにかかったが，命を取り留めた。当時ニューイングランド地方では，腸チフスで3,000人以上の死者が出ている。ところが，快復の途中で左足の骨髄がひどい炎症を起こし，耐えられないような苦しみが３週間以上も続いた。

地元の医師は切断することに決めたが，ジョセフの母親のたっての願いでほかの医師に見せることになった。それが近くのダートマス大学の医師，ネーサン・スミスである。彼は，比較的新しい，しかし非常に大きな苦痛を伴う方法で骨の一部を削り取ろうとしたと語っている。医師は体を縛る縄を

持参したが，ジョセフは縄がなくても痛みには耐えられると言って，それを断った。また，唯一の鎮痛剤だったブランデーも断り，ただ，手術の間中父親に腕を押さえてもらうことだけを希望した。

こうしてジョセフは大いなる勇気をもって手術に耐え，当時アメリカで最も著名な医師の一人に数えられたスミス博士は，ジョセフの足を切らずに残すことができた。しかし，術後完全に快復して歩行に痛みが伴わなくなるまで，ジョセフは長い苦痛の日々を過ごさなければならなかった。ジョセフの手術後，家族はバーモント州ノリッジに移る。しかし，そこは凶作続きだったので，その後ニューヨーク州パルマイラに移った。

最初の示現

少年ジョセフ・スミスは荒れ地を開拓し，岩を掘り出すなど，いろいろな仕事をして家族を助けている。母親であるルーシーは，少年時代のジョセフは物事を深く考える方で，自分の不滅の霊のことについてよく考えていたと書いている。特に，当地パルマイラの地方で宣教をしていた数々の教会の中でどれが正しいかに関心を寄せていた。その様子をジョセフはこう説明している。

「このひどい騒ぎの間，わたしは心の中で深く考えさせられ，大きな不安を感じないではいられなかった。しかし，わたしの気持ちに深く，またしばしば痛烈に感じるものがあったにもかかわらず，なおわたしはこれらすべての教派から遠ざかっていた。それでも，機会があるごとに，彼らのいろいろな集まりには出席した。そうするうちに，わたしの心はややメソジスト派に傾き，彼らに加わりたいとかなり望むようになった。しかし，様々な教派間の混乱と争いが非常に激しかったので，わたしのように若く，世間のことを知らない者にとって，だれが正しく，だれが間違っているか，確かな結論を出すことは不可能であった。……

これら宗教家たちの論争によって引き起こされた，極度に難しい事情の下で苦しんでいたある日のこと，わたしは，ヤコブの手紙第1章5節を読んでいた。『**あなたがたのうち，知恵に不足している者があれば，その人は，とがめもせずに惜しみなくすべての人に与える神に，願い求めるがよい。そうすれば，与えられるであろう。**』

この聖句が，このとき，かつて人の心に力を与えたいかなる聖句にも勝って，わたしの心に力強く迫って来たのであった。それはわたしの心の隅々に大きな力で入り込んで来るように思われた。もしだれか神からの知恵を必要

とする者がいるとすれば，それは自分であることを悟って，わたしはこの言葉を再三再四思い巡らした。なぜならば，わたしはどうしてよいか分からず，また自分がそのときに持っていた知恵よりも深い知恵を得られなければ，どのように行うべきかまったく分からなかったからである。それというのも，様々な教派の教師たちは同じ聖句を異なって解釈し，その結果，聖書に訴えて疑問を解決することへの信頼をすべて打ち砕いてしまっていたからである。

とうとうわたしは，暗闇（くらやみ）と混乱の中にとどまるか，それともヤコブが指示しているとおりに行うか，すなわち神に願い求めるか，どちらかにしなければならないという結論を出すに至った。」（ジョセフ・スミス－歴史1：8，11－13）

1820年のある美しい春の朝，ジョセフ・スミスは独りで家の近くの森でひざまずき，導きを求めてその心の思いを神に祈った。その後に起こった出来事をジョセフはこう描写している。

「わたしがそうし始めるやいなや，すぐにわたしは何かの力に捕らえられた。その力は完全にわたしを圧倒し，わたしの舌をしびれさせるほどの驚くべき力を振るったので，わたしは物を言うこともできなかった。深い闇（やみ）がわたしの周囲に集まり，一時はあたかも突然の滅びを宣告されたかのように思われた。」（ジョセフ・スミス－歴史1：15）

あらゆる義に敵対する者が，ジョセフが偉大な業の担い手となることを知ってジョセフを滅ぼそうとしたのである。しかしジョセフは力を振り絞って神を呼び求め，すぐに自由の身になることができた。

「この非常な恐怖の瞬間に，わたしは自分の真上に，太陽の輝きにも勝って輝いている光の柱を見た。そして，その光の柱は次第に降りて来て，光はついにわたしに降り注いだ。

それが現れるやいなや，わたしはわが身を縛った敵から救い出されたのに気づいた。そして，その光がわたしの上にとどまったとき，わたしは筆紙に尽くし難い輝きと栄光を持つ二人の御方がわたしの上の空中に立っておられるのを見た。すると，そのうちの御一方がわたしに語りかけ，わたしの名を呼び，別の御方を指して，『**これはわたしの愛する子である。彼に聞きなさい**』と言われた。」（ジョセフ・スミス－歴史1：16－17）

ジョセフは我に返って物が言えるようになると，あらゆる教派の中でどれが正しいのか，またどれに加わるべきか尋ねた。それに対して主は，「それらのどれにも加わってはならない，すべて間違っているからである」と言われ，「彼らの信条はことごとくその目に忌まわしいもの」であると言われた。

また主は，彼らは「神を敬うさまをするけれども神の力を否定している」と告げられた（ジョセフ・スミス－歴史1：19）。主はジョセフにこのほかにも多くのことを語られた。

示現が閉じたとき，ジョセフは天を見ながら横たわっていた。そして少しずつ力を取り戻すと，やがて家に帰った。

1820年の朝の太陽が大地を照らしたとき，ジョセフは，その朝の訪れとともに自分が一人の預言者としてこの世の旅路を歩むことになろうとは，思いもしなかった。ニューヨーク州西部に住む一介の少年であったジョセフが，福音とイエス・キリストの教会を地上に回復するという不思議な驚くべき業を行う者として，神により選ばれたのである。神会の二人の御方にまみえた彼は，今や父なる神とその御子イエス・キリストの真実の姿について，ほかのだれにもできない証（あかし）ができるようになったのである。まさにその朝は，輝ける時代の夜明けであった。光が森を照らし，父なる神とイエス・キリストが14歳の少年を預言者として召されたのである。

教会の基礎の確立

モルモン書の出現

天使モロナイの訪れ

最初の示現から３年が過ぎた1823年９月21日の夜，ジョセフ・スミスは若さゆえの自分の愚かな行いに対して主の赦(ゆる)しを求めて祈り，主に導きを請うた。その祈りにこたえて主は，天の使者を遣わされた。ジョセフはこう書いている。

「その方はわたしの名を呼び，自分は神の前から遣わされた使者であること，その名はモロナイであること，神がわたしのなすべき業を備えておられること，またわたしの名が良くも悪くもすべての国民，部族，国語の民の中で覚えられること，すなわち，良くも悪くもすべての民の中で語られることをわたしに告げられた。

その方はまた，この大陸の先住民の話と彼らの起源を伝える，金版に記された書が隠されていることも告げられた。また，それには救い主がその昔の住民に述べられたままに完全な永遠の福音が載っていることも告げられた。」（ジョセフ・スミス－歴史１：33－34）

モロナイはその古代の記録を書いた最後の預言者で，主に導かれてそれをクモラの丘に隠した。ほかにウリムとトンミムも隠した。それらは，古代の預言者たちが用いたもので，ジョセフがその記録を翻訳するときに使うものであった。

その天使はジョセフにクモラの丘に行くように命じた。クモラの丘はジョセフの家から近い所にあった。またその天使はジョセフに，末日における主の業について大切なことをたくさん教えた。彼はジョセフに，その版を手に入れたら，主が命じられないかぎりだれにもその記録を見せないように警告している。モロナイはその夜，さらに2度にわたってジョセフのもとを訪れ，翌日も姿を見せた。そして毎回大切なメッセージを繰り返すとともに，新たな情報も付け加えていった。

天使の訪れを受けた翌日，ジョセフは命じられたとおりクモラの丘に行っ

ジョセフ・スミスはクモラの丘で天使モロナイから金版を受け取り，
翻訳の業を開始するように告げられた。

た。その経験についてジョセフはこう書いている。

「この丘の頂上から遠くない西側の所にかなりの大きさの石があって，その石の下にあった石の箱の中に版が置かれていた。この石は厚みがあって，上部の中央が丸みを帯びており，へりに行くに従って薄くなっていたので，その中央部は地上に見えていたが，へりはすべて土に覆われていた。

わたしは土を取り除いて，てこを1本手に入れ，それをその石のへりの下に差し込んで，わずかな力でそれを持ち上げた。中をのぞき込むと，あの使者から言われたように，実際にそこに，版と，ウリムとトンミムと，胸当てが見えた。」（ジョセフ・スミス－歴史1：51－52）

そこでまた天使モロナイが現れ，1年たったら同じ時刻にまたクモラの丘で会うことを告げた。この毎年の会見は版を受け取るまで続くことになる。それぞれの会見で，モロナイは主が何をしようとしておられるかについて，また主の王国をどう導くかについて，ジョセフに新たな知識を授けた（ジョセフ・スミス－歴史1：27－54参照）。

翻訳の業

1827年9月22日，4年間の準備を経て，モロナイは預言者ジョセフ・スミスに金版を渡し，翻訳の業を始めるように命じた。このとき，その年早々に結婚していた妻のエマ・ヘイルがジョセフに同行していたが，彼女は丘のふもとで待っていた。そこにジョセフが版を携えて戻って来たのである。彼女は預言者ジョセフのかけがえのない助け手となり，短期間モルモン書の筆記者の一人となった。

地元の暴徒による金版を奪おうとする執拗（しつよう）な企てに遭ったジョセフとエマは，ニューヨーク州マンチェスターの家を離れることを余儀なくされた。そして，マンチェスターの約120マイル（約190キロ）南東にあるペンシルベニア州ハーモニーに住むエマの父，アイザック・ヘイルのもとに身を寄せた。金版の翻訳はそこで始まった。その後間もなくジョセフは，裕福な農夫であり友人であるマーティン・ハリスに会い，マーティンはジョセフの筆記者となった。

やがてマーティンはジョセフに，翻訳済みの116ページの原稿を家に持ち帰って家族に見せ，自分たちのしている仕事の正当性を証明したいと言い出した。ジョセフは主に許可を求めた。しかし，主の答えは「否」であった。それでもマーティンが再度主に祈ってくれるように嘆願したため，ジョセフは不承不承さらに2度主に祈り，ようやく許可を得た。マーティンは特定の

人にしか見せないと約束する。しかし彼は，その約束を破り，116ページの原稿は盗まれてしまった。この原稿の紛失はジョセフの心に大きな打撃を与えた。主の業のために傾けてきた努力のすべてが水泡に帰してしまったと思ったからである。ジョセフはこう書いている。「どうしたらいいのだろう。わたしは罪を犯した。神の怒りを招いたのはわたしだ。主から頂いた最初の答えで満足しなければならなかったのだ。」[1]

ジョセフは心から悔い改めた。そして少しの間，金版とウリムとトンミムが取り上げられたものの，主はジョセフをお赦(ゆる)しになり，翻訳の業が再開された。主は俗世の歴史が記されている失われた部分は翻訳しないように命じられた。そしてそれに代わって，キリストについての偉大な預言やほかの神聖な事柄を含む，同じ年代を扱った預言者ニーファイの版を翻訳するように言われたのである。主は116ページの原稿が失われるのを予知し，ニーファイにこの第2の歴史を書き記すように命じられたのであった（1ニーファイ9章；教義と聖約10：38－45参照。この時期に受けた啓示である教義と聖約3章と10章も参照）。

この時期，ジョセフは若い教師であるオリバー・カウドリの援助を受ける。彼は主に導かれてジョセフのもとを訪れた。オリバーは1829年4月7日に筆記を開始した。その画期的な時期について彼はこう記している。「これらの日々は決して忘れられないものであった。天の霊感によって語られた声，この胸にこの上ない感謝の念を呼び起こした声の下に座していたのである。」（ジョセフ・スミス－歴史1：71注）

オリバーはこうも語っている。「その書物〔モルモン書〕は真実である。……わたし自身が預言者の口から出るままに記したのである。それは永遠の福音を含んだものであり，『彼は永遠の福音をたずさえた御使(みつか)いが，あらゆる国民，国語の民，民族に宣(の)べ伝えるためにやって来たのを見た』とのヨハネの示現を成就するものです。その書物には救いの原則が含まれています。その光によって歩み，その教えに従うならば，神の永遠の王国に救われることでしょう。」[2]

翻訳の作業に没頭していたジョセフとオリバーは，食べ物もお金もなくなっていたことに気づいた。翻訳用の紙まで不足している状態であった。二人の窮状を知ったのが以前預言者を雇ったことのある友人のジョセフ・ナイト・シニアで，二人を援助してくれることになった。ジョセフ・ナイトはその時宜にかなった援助についてこう記している。

「わたしはさばを1たると筆記用の罫線(けいせん)の引かれた紙を買った。……わた

しは小麦を9ないし10ブッシェル（約320－360リットル），じゃがいもを5，6ブッシェル（約180－220リットル）買った。」こうして彼はハーモニーにいる二人のもとを訪れた。そのときの様子をこう回想している。「ジョセフとオリバーは食糧を得るために働き口を探しに出かけたが，見つけられずに戻って来た。二人は食糧を携えて来たわたしを見つけると，自分たちの食糧が底を突いていたので喜んだ。……こうして彼らは翻訳の業を開始したが，食糧は翻訳作業が完了するまで十分な量であった。」[3]

ジョセフ・スミスはこの義にかなった人物について次のように語ったが，それは当然と言えよう。「シオンの息子たちは，最後の一人に至るまで，彼はイスラエルの忠実な人であったと語り継ぐことでしょう。こうして，彼の名は決して忘れられることがないでしょう。」[4]

さて，迫害が厳しさを増してきたため，ジョセフとオリバーはハーモニーを離れ，ニューヨーク州フェイエットのピーター・ホイットマーの農場で翻訳の業を終えた。1829年6月のことである。そうした迫害の中で翻訳の業が完成を見たことは，近代の奇跡と言えよう。ジョセフ・スミスは公式な教育はほとんど受けていなかったにもかかわらず，実際の翻訳の口述に費やした期間は2か月少々，しかも口述後の訂正はごくわずかであった。彼の翻訳は本質的に彼が翻訳したままの状態で今日（こんにち）も存在し，世界中の何百万もの人々の証（あかし）の源となってきている。こうしてジョセフ・スミスは，主の手の中の器として，末日の聖徒への祝福となる古代の預言者の言葉をもたらしたのである。

モルモン書の証人

預言者ジョセフ・スミスがフェイエットに滞在していた間，主はオリバー・カウドリ，デビッド・ホイットマー，マーティン・ハリスを特別な証人とし，金版を見ることを許すとの啓示をお授けになった（2ニーファイ27：12；エテル5：2－4；教義と聖約17章参照）。こうして彼らはジョセフとともに，この古代の記録の起源と真実性について証（あかし）をすることができるようになったのである。

デビッド・ホイットマーはこう説明する。「わたしたちは近くの森に行き，丸太に腰を下ろしてしばらく話をしました。それからひざまずいて祈りました。祈ったのはジョセフです。それからまた丸太に腰を下ろして話をしていたのです。突然天から光が降りて来て，わたしたちの周りを広く照らしました。そして，わたしたちの前には天使が立っていました。」この天使はモロナイである。デビッドはこう続ける。「彼は白い衣を着ていて，わたしの名

を呼んでこう語りました。『主の戒めを守る者は祝福される。』そして，わたしたちの前にテーブルが置かれ，その上にあの記録が置かれました。モルモン書翻訳の基となったニーファイの記録，真鍮（しんちゅう）の版，指示器の球，ラバンの剣，そしてほかの版が並べられました。」[5] 彼らがこれらのものを見ていると，声が聞こえてきてこう言った。「これらの版は神の力によって明らかにされたものである。そして，その力によって翻訳された。あなたがたが見てきた翻訳は正確である。あなたがたが今見聞きしていることを証（あかし）するように命じる。」[6]

この出来事から程なく，ジョセフ・スミスは版を新たに8人の証人に見せた。彼らはニューヨーク州マンチェスターの人目につかない場所でその版にじかに触れている。この二つのグループの証は，モルモン書の冒頭に記録されている。

モルモン書をもって福音を宣（の）べ伝える

モルモン書の翻訳を終えた預言者ジョセフは，パルマイラに住むエグバート・B・グランディンに印刷の依頼をする。5,000部を印刷するのに必要な3,000ドルは，マーティン・ハリスが自分の財産を抵当に入れることで，グランディンとの間で話がついた。

こうして，モルモン書の初版がE・B・グランディンの書店の店頭に並んだのが，1830年3月26日のことである。この新たに印刷されたモルモン書を用いた最初の宣教師の中にサミュエル・スミスがいた。1830年4月，彼はニューヨーク州メンドンの町のトムリンソンという宿屋を訪れ，1冊のモルモン書をフィニアス・ヤングという名の若者に売る。フィニアスはブリガム・ヤングの弟である。

6月，サミュエル・スミスは同じ地をまた訪れ，この度はニューヨーク州ブルームフィールドのジョン・P・グリーン家にモルモン書を渡した。ジョンはブリガム・ヤングの姉であるローダ・ヤングの夫である。このモルモン書を次に手にすることになったのが，ブリガム・ヤングの父親であるジョン・ヤングであった。彼はモルモン書を家に持ち帰り，全部読み通した。そしてこう語っている。「それは最も偉大な書物であり，聖書も含めて，わたしがこれまで見た中で誤りの最も少ないものである。」[7]

ブリガム・ヤングが家族と宣教師の両方からモルモン書の内容を紹介されたのは1830年の春のことであるが，本格的に中身を吟味するまでには多少の時間が必要であった。彼はこう語っている。「わたしはこのことを2年かけ

て熱心に研究し，ようやくモルモン書を受け取ることにしました。わたしはモルモン書が真実であることは知っていました。この目で見て，この指で触れて，あるいはわたしの五感にすべて照らして，真実であることが分かりました。もしそうでなかったら，わたしは今日までモルモン書を信じ続けることはなかったでしょう。……わたしにはすべてを自分の力で証明する時間が必要だったのです。」[8]

ブリガム・ヤングは1832年4月14日にバプテスマを受けた。彼はバプテスマと確認の儀式の直後の気持ちをこう回想している。「救い主の言葉のとおり，わたしはへりくだった幼子のような気持ちになり，わたしの罪が赦されたことを知ったのです。」[9] 彼は後に使徒に召され，やがて第2代大管長となる。

アロン神権とメルキゼデク神権の回復

天使モロナイは，1823年9月にクモラの丘でジョセフ・スミスに初めて姿を現したとき，地上への神権の権能の回復について重要な指示を与えた。それには次のような宣言が含まれている。「〔金版には〕主が聖なる神権を複数の者に授けられると解釈できる部分がある。その者たちは福音を宣べ伝え，水によりバプテスマを施し，その後に按手により聖霊を授ける権能を受けるのである。」[10]

1829年の春，ジョセフを通してこの天使の言葉の一部が成就した。モルモン書を翻訳していたジョセフ・スミスとオリバー・カウドリは，罪の赦しのためのバプテスマという記述に遭遇した。そして5月15日，そのことについて祈りを通して主に知識を求めた。二人がサスケハナ川の岸で祈りをささげていると，二人のもとに天使が降りて来た。彼は自分が新約の時代のバプテスマのヨハネであると言い，ジョセフとオリバーの頭に手を置いてこう述べた。「わたしと同じ僕であるあなたがたに，メシヤの御名によって，わたしはアロンの神権を授ける。これは天使の働きの鍵と，悔い改めの福音の鍵と，罪の赦しのために水に沈めるバプテスマの鍵を持つ。」（教義と聖約13：1）

この儀式の後，ジョセフとオリバーはバプテスマのヨハネに命じられたとおりに互いにバプテスマを施し合い，アロン神権の聖任を行った。ヨハネは彼らに「このアロン神権には聖霊の賜物を授けるための按手をする力はないが，これは将来わたしたちに授けられる」と言った。ヨハネはまた，「自分はメルキゼデクの神権の鍵を持つペテロとヤコブとヨハネの指示の下に働いている」と言い，また「ふさわしいときにメルキゼデクの神権もわたしたちに授けられ〔る〕」と言った（ジョセフ・スミス－歴史1：70，72。1：68－

ペテロ，ヤコブ，ヨハネがジョセフ・スミスとオリバー・カウドリに現れ，
メルキゼデク神権を授けた。

72も参照)。

預言者ジョセフはそのときの経験をこう語っている。「わたしたちはバプテスマを受けて水から上がるとすぐに，天の御父からの大いなる栄光ある祝福を受けた。わたしがオリバー・カウドリにバプテスマを施すやいなや，聖霊が彼に降(くだ)られ，彼は立ち上がって，間もなく起こるはずの多くのことについて預言した。さらにまた，わたしも彼によってバプテスマを受けるとすぐに，預言の霊を受けて立ち上がり，この教会の起こりと，教会に関連のあるその他の多くのことと，この時代の人の子らについて預言した。わたしたちは聖霊に満たされ，わたしたちの救いの神を喜びたたえた。」(ジョセフ・スミス－歴史1：73)

後にペテロ，ヤコブ，ヨハネはジョセフとオリバーのもとを訪れ，彼らにメルキゼデク神権を授けた。また，神の王国の鍵(かぎ)も授けた（教義と聖約27：12－13；128：20参照)。メルキゼデク神権は地上の人間に授けられる権能の中で最高のものである。預言者ジョセフ・スミスはこの権能により，この神権時代においてイエス・キリストの教会を組織し，今日(こんにち)の教会にあるいろいろな神権定員会を定めたのであった。

教会の設立

主はジョセフ・スミスに，1830年4月6日がこの神権時代にイエス・キリスト教会を設立する日であることを啓示された（教義と聖約20：1参照)。設立の知らせは信者や友人たちに送られ，56人ほどの男女がニューヨーク州フェイエットのピーター・ホイットマー・シニアの丸太造りの家に集まった。そして，「神の御心(みこころ)と命令により，わが国の法律にかなって」教会の設立を援助する者として（教義と聖約20：1)，6人が預言者から選ばれた。

預言者ジョセフはこう記録している。「天の御父への厳粛な祈りにより開会したわたしたちは，すでに授けられた戒めに従い，わたしたちを神の王国に関する事柄を教える教師として受け入れるか否か，またすでに受けている戒めに従って教会として組織することに異議がないかどうか，兄弟たちに意見を求めた。これらの幾つかの提議に対して，彼らは全会一致の支持を表明した。」[11]

出席者の同意により，ジョセフはオリバーを教会の長老に聖任し，オリバーは同じくジョセフを長老に聖任した。これらはすべて主の指示によるものであった。そして，出席した教会員のために聖餐(せいさん)が祝福され，配られた。すでにバプテスマを受けていた人々は確認の儀式を受け，聖霊の賜物(たまもの)を授け

られた。預言者はこう書いている。「聖霊がわたしたちに豊かに降り注ぎ，中には預言をする者もいた。わたしたちは皆主を賛美し，心から喜んだ。」[12] この会の中でジョセフは啓示を受けている。預言者の言葉を主御自身から出たものと見なし，それに従うようにとの主の指示である（教義と聖約21：4－6参照）。

1830年のこの集会に見られるいろいろな要素は，今日（こんにち）の教会でも踏襲されている。全会一致の法則，賛美の歌，祈り，聖餐，個人の証（あかし）を述べ合うこと，按手による聖霊の賜物の授与，聖任，個人に直接授けられる啓示，神権役員を通して授けられる啓示である。

ジョセフ・スミスの母であるルーシー・マック・スミスは，預言者の父である夫ジョセフ・スミス・シニアがバプテスマを受けた感動的なシーンを次のように記録している。「夫スミスが水から上がると，岸辺に立っていたジョセフは夫の手を取り，喜びの涙を浮かべながら大きな声でこう言ったのです。『神はほむべきかな。父がバプテスマを受けてイエス・キリストの教会に入る姿をこの目で見られるとは。』」[13] そのときの様子をジョセフ・ナイト・シニアはこう語った。「〔預言者は〕大いに御霊（みたま）に満たされていました。……喜びがいっぱいの様子でした。彼は自らが始めた偉大な業をその目で見て，ぜひ成し遂げようという気持ちになったのでしょう。」[14]

そこには父と息子の強い愛のきずながあった。後に預言者は，父親に対する次のような称賛の言葉を残している。「わたしは父を愛しており，父との思い出を大切にしています。父の気高い行いの数々は，わたしの心から離れたことがありません。その思いやりにあふれた父親としての言葉の数々は，わたしの心に刻み込まれています。」[15]

この預言者と預言者の父との間に示された愛は，父ジョセフ・スミス・シニアとその父であるアサエル・スミスとの間にも見られた。1830年８月，ジョセフ・スミス・シニアは，父母と兄弟姉妹に手渡すため，モルモン書を数冊携えてニューヨーク州の北東，セントローレンス郡を訪れている。アサエル・スミスは1830年10月に死去するまでモルモン書のほとんどを読み終え，孫であるジョセフ・スミス・ジュニアが「家族の中から出現するであろうと長い間考えていた，まさにその預言者である」と宣言した。[16] アサエルのほかの３人の息子たちもやがて教会に加入した。サイラスとジョン，それにアサエル・ジュニアである。こうして預言者は，直系親族全員と父方の親族の多くがバプテスマの水に入るのを目撃する特権を得たのであった。

後に大管長会の一員となったシドニー・リグドンは，教会の始まりはつつ

ましいものであったにもかかわらず，教会を組織した人々の胸には広大なビジョンがあったことを次のように語っている。「わたしはこのキリストの教会の会員全員と，ニューヨーク州ウォータールー近郊の20フィート（6メートル）四方の古い丸太造りの家で顔を合わせましたが，わたしたちは神の王国について，まるで世界を手中に収めているかのように話し合いました。人の数こそ少なかったですが，わたしたちは自信にあふれていました。……わたしたちは神の教会が千倍も大きくなるというビジョンを持っていました。……世の人々が預言者たちの証（あかし）をまったく知らず，神がこれから何をしようとしておられるかについて無知であったときのことです。」[17]

1830年4月6日にニューヨーク州西部で起こったこの出来事は，何百万もの人々の人生に変化をもたらしてきた。小さな丸太造りの家に集った一握りの改宗者から，福音は世界に広がった。今では多くの国々に教会が設立されている。中にはフェイエットで教会が最初に組織されたときのような，つつましい環境の中で集会が行われている所も多々ある。世界各地の聖徒たちは，救い主の次の約束に喜びと慰めを見いだしているのである。「二人または三人がわたしの名によって集まっている所には，見よ，わたしもその中にいる……。」（教義と聖約6：32）

「オハイオへ行くように」――末日のイスラエルの集合

コールズビルでの迫害

教会が設立された同じ月，預言者ジョセフ・スミスはニューヨーク州コールズビルに住む友人，ジョセフ・ナイト・シニアの家族のもとを訪れ，福音を宣（の）べ伝えた。そして6月28日，ナイトの家族や友人の多くがバプテスマの聖約を交わすばかりになっていた。

しかし，コールズビルでは福音の教えに対する反発が強く，兄弟たちがバプテスマ用に築いた川の堤を壊してバプテスマを妨害した。しかし，これはすぐに修復された。ジョセフ・ナイト・ジュニアは，教会の敵が行った嫌がらせの様子を次のように表現している。「〔バプテスマから〕戻ると，近隣の人々がたくさんわたしたちを待ち構えていました。そして，羊を洗ってきたのかと聞きます。……その夜，わたしたちの荷車は引っ繰り返され，その上に木が積み上げられていました。水に沈められた荷車もありました。また，さくに使う木が家のドアの前に積まれ，荷車の鎖が川に投げ込まれていました。ありとあらゆる嫌がらせがなされたのです。」[18]

同じ時期，反対する者たちは預言者ジョセフを逮捕して聖徒たちの平安を

乱し，預言者を窮地に陥れようと企てた。しかし，ジョセフ・ナイト・シニアが弁護士を雇って抗戦したため，告訴はすべて取り下げられた。

教会が重要な進展を遂げるときはいつも，あらゆる義の敵が結集して神の王国の前進を阻もうとする。しかし，献身的な聖徒たちはそれを克服して強くなる。コールズビルの聖徒たちも同様であった。互いに結束を固め，強力で一致した支部へと成長したのである。

インディアンへの宣教師

1830年9月と10月，啓示により4人の若者が，モルモン書の民の子孫であるアメリカインディアンに福音とモルモン書のメッセージを伝えるために召された。オリバー・カウドリ，ピーター・ホイットマー・ジュニア，パーリー・P・プラット，ザイバ・ピーターソンの4人である（教義と聖約28：8；30：5－6；32章参照）。彼らは苦難の中何百マイルも旅をし，ニューヨーク州バッファローの近くのカタローガス族，オハイオ州のワイアンドット族，そして最後にミズーリ州西部に住むデラウェア族に福音を宣（の）べ伝えることができた。しかし，最大の成功は，オハイオ州カートランドならびにその近郊に定住した人々への伝道であった。そこでは127人の改宗者があった。そして宣教師が去った後も聖徒たち自身による伝道が効を奏し，オハイオ州の聖徒の数はすぐに数百人に達した。

オハイオへの集合の呼びかけ

カートランドで新たに改宗した牧師，シドニー・リグドンとその友人でまだ教会員ではないエドワード・パートリッジは，預言者ジョセフと会って教会の教えをさらに詳しく聞こうと思っていた。そして1830年12月，二人は250マイル（約400キロ）以上の道のりをニューヨーク州フェイエットに出向き，ジョセフ・スミスと会った。二人はジョセフに，自分たちならびにカートランドの聖徒たちへの主の御心（みこころ）を知りたいと願った。その答えとして，主は彼らに「オハイオに集まる」ようにとの啓示を授けられた（教義と聖約37：3）。そして，1831年1月2日にホイットマーの農場で開かれた教会の3回目の，そしてニューヨーク州での最後の大会で，主はこの聖徒たちへの指示を繰り返された。

「あなたがたが敵の力から逃れ，染みがなく，罪もない，義にかなった民としてわたしのもとに集められるために，このために，わたしは，オハイオへ行くようにという戒めをあなたがたに与えたのである。わたしはそこであ

なたがたにわたしの律法を与えよう。あなたがたはそこで，高い所から力を授けられるであろう。」（教義と聖約38：31－32）これが今の神権時代になって初めての集合の呼びかけである。

中には財産を捨ててニューヨークからオハイオへの長旅をすることをためらった者たちも少しはいたものの，大多数の聖徒たちはイスラエルを集めようとする羊飼いの声に聞き従った。神権指導者に従い，この呼びかけに応じた弟子たちを率いたのがニューエル・ナイトである。

「大会から家に戻ったわたしは，与えられた戒めに従うべく，コールズビルの人々とともにオハイオに行く準備を始めました。……予測されたことではありましたが，わたしたちは多大な財産を犠牲にしなければなりませんでした。わたしはほとんどの時間，兄弟たちの家を回り，出発の準備を手伝いました。全員一団となって移住したかったからです。」[19]

こうした犠牲を払った聖徒たちの模範はジョセフ・ナイト・シニアであった。オハイオで預言者と合流するために財産を売り払ったのである。『ブルーム・リパブリカン』（*Broom Republican*）誌に掲載された彼の簡潔な広告から，彼の福音に対する決意の程がうかがわれる。「ジョセフ・ナイト所有の農場。コールズビルのコールズビル橋近く，サスケハナ川沿い。約142エーカー（約57万平方メートル）。上物としては住宅が2棟と上等の納屋があり，果樹園も秀逸。**条件はいかようにも相談に応じます**。」[20] こうして約68人のコールズビル支部の会員が1831年の8月中旬，オハイオへと向かった。

主の命令に対して同じように従順であったのが，フェイエット支部からの80人の聖徒と，マンチェスター支部からの50人の聖徒である。彼らは1831年の5月に家を離れた。預言者の母であるルーシー・マック・スミスは，フェイエットの教会員の脱出の世話をする責任を受けていた。ところが，ニューヨーク州のバッファローに着いて汽船に乗り込んだものの，エリー湖の港が氷結し，船が出航できなくなってしまった。この大変な状況の中で，彼女は教会員たちに信仰を示すように求めた。「さて，兄弟姉妹の皆さん，よろしければ皆さんの願いを天にささげましょう。氷が割れてわたしたちが何事もなく出航できるように祈るのです。そうすれば，主が生きておられるように確かに，それは実現するでしょう。」まさにそのとき「霊のとどろきのような」声が上がった。氷が割れて，船が通れるだけの狭い透き間ができたのである。彼らを乗せた船がその狭い透き間を通り抜けるとすぐに，港はまた氷に閉ざされた。このようにして，聖徒たちは無事に航行することができた。この奇跡的な脱出の後，祈り会が行われ，彼らのために奇跡が行われたこと

に対して感謝の祈りがさげられた。[21]

こうして5月中旬までにニューヨーク州の教会の支部のすべてがエリー湖を渡り，オハイオ州のフェアポート港に到着，同胞(はらから)である聖徒たちの出迎えを受けて目的地であるカートランドとトンプソンの町に向かった。これが末日におけるイスラエルの集合の始まりである。こうして聖徒たちは主の選ばれた僕(しもべ)の集まりとして教えを受け，主の律法を授けられ，聖なる神殿を建設することになる。

オハイオ州カートランドでの王国の建設

オハイオへの預言者の到着

1831年２月のある寒い日，預言者ジョセフ・スミスと当時６か月の双子を宿していた妻のエマが，ニューヨーク州から250マイル（約400キロ）の道のりをカートランドにやって来た。彼らはギルバート・アンド・ホイットニーの店にそりで着いた。以下は預言者とニューエル・Ｋ・ホイットニーの対面のエピソードである。

「〔そりに乗った〕男性がそりから降りました。若くてがっしりした体つきです。そして階段を駆け昇ってわたしの同僚が立っている店の中に入って行きました。

『ニューエル・Ｋ・ホイットニー。あなたですね。』彼は叫びました。そして，まるで昔からの知り合いにでも会うかのように手を差し伸べたのです。

『一本やられましたね。』声をかけられた方はそう答えると，商人らしく恭(うやうや)しく手を差し出し，こう言いました。『わたしはあなた様のお名前を存じ上げないので，わたしにしてくださったようにあなたをお名前で呼ぶことができないのですが。』

『わたしは預言者ジョセフです。』彼はほほえみながらそう言った。『あなたはここでわたしのために祈ってくださいました。わたしに何をしてほしいですか。』」[1]

この出来事の少し前，ニューエルと妻エリザベスは導きを求めて熱心に主に祈っていた。そしてその答えとして聖なる御霊(みたま)が降(くだ)って雲が彼らの家を覆い，その雲の中から「主の言葉を受ける備えをせよ。間もなく主の言葉が訪れる」[2] という声が聞こえた。そのすぐ後に，インディアンに福音を宣(の)べ伝えるために召された宣教師がカートランドを訪れ，そして今，預言者の訪れを受けたのである。

ニューエルの孫のオルソン・Ｆ・ホイットニーは，このときの気持ちを次のように後述している。「このジョセフ・スミスという名の傑出した人物は，生まれてこのかたまったく面識のない人物を見分けました。一体どのような

カートランド神殿

力の持ち主なのでしょう。なぜニューエル・K・ホイットニーの方はジョセフが預言者だと気づかなかったのでしょう。それはジョセフ・スミスが聖見者，選ばれた聖見者だったからです。彼は何百マイルも離れた場所でひざまずき，カートランド行きについて祈りながら，ニューエル・K・ホイットニーを実際に見ていたのです。驚くべきことですが，これは真実です。」[3]

預言者の到着により，神の言葉がカートランドの人々にもたらされた。そして教会の基本的な機能がカートランドの地で多く確立されることとなった。教会を管理するための基本組織が啓示され，宣教師が海外に派遣され，初めての神殿が建てられ，多くの重要な啓示が授けられた。聖徒たちは，ひどい迫害と試練を受けることにより，信仰と勇気を示して主に油注がれた預言者に進んで従うか否かを試されたのである。

教会活動の二つの中心地

聖徒たちは呼びかけに応じてオハイオに集合したが，同時にシオンを確立することも望むようになった。1831年6月，預言者ジョセフ・スミスは一つの啓示を受ける。それは，彼とシドニー・リグドン，それにほかの28人の長老がミズーリに伝道に行き，次の大会をそこで開くようにとの指示であった（教義と聖約52章参照）。ミズーリは当時のアメリカ合衆国の西の外れであり，オハイオからは1,000マイル（約1,600キロ）の距離にあった。主はジョセフに啓示を授け，聖徒たちがミズーリ州ジャクソン郡で受け継ぎを得，シオンを確立することを告げられた。

そこでジョセフとほかの宣教師，そして少し後にはニューヨーク州コールズビルの会員全体が，1831年夏にジャクソン郡に旅をし，そこに新開地を築き始めた。こうして預言者やほかの指導者がカートランドに戻ってからも多くの教会員がミズーリに残り，そこに定住したのであった。

1831年から1838年にかけて，教会には人口の中心が二つあった。ジョセフ・スミスと十二使徒評議会，それに大勢の聖徒たちはオハイオ州カートランドの地域に住んでいたが，ほかの多くの教会員は，神権指導者の管理の下，ミズーリ州に住んでいた。重要な行事は両方の地で同時に開催され，教会の役員は必要に応じて二つの地を移動した。まずこの7年間のカートランドでの出来事について紹介し，次いで同じ時期にミズーリで起きた出来事について話を進めることにする。

オハイオへの集合による聖徒たちの犠牲

オハイオに集合した聖徒の多くは大きな犠牲を払っている。ある者は家族から縁を切られ，ある者は旧友とのつながりを断たなければならなかった。ブリガム・ヤングは，預言者の集合の呼びかけに応じてどのような犠牲を払ったかを次のように描いている。

「〔1833年9月〕わたしたちはカートランドに着きましたが，聖徒たちと一緒に集合した人でわたしよりも貧しい人がいたとしたら，その人は何も持っていない人だったでしょう。……わたしには世話をしなければならない二人の子供がいました。それで全部です。わたしは妻を亡くしました。『ブリガム兄弟，靴はないのですか。』はい，1足もありません。借りた長靴1足だけです。冬服は1着もありません。家で3，4年前に作ったコートだけです。『ズボンは？』ありません。『どうしたんですか。ズボンなしで来たんですか。』いいえ。借りました。別のズボンが見つかるまで借りることにしています。わたしは旅をしながら福音を宣(の)べ伝えてきました。そして，持っていたお金を全部使いました。福音を伝え始めたときも少ししかお金はありませんでした。……そのようにして福音を説きながら旅をしてきて，今は何も残っていません。それでもジョセフが来るように言ったので，何とか頑張ってやって来ました。」[4]

ほかにも大勢の忠実な聖徒たちがカートランドに来た。そして，すでに移って来ていた教会員が彼らを迎え，貧しいながらも持ち物を分かち合った。そうした強い信仰の人々が，教会の驚くべき成長と発展の基礎を築くことになるのである。

カートランド地域で授けられた啓示

預言者ジョセフはカートランド地域に住んでいた間にたくさんの啓示を受けた。その中の65の啓示が教義と聖約に収められている。それらは，福祉，しるしを求めること，道徳の標準，食事に関する原則，什分(じゅうぶん)の一，神権の権能，預言者の役割，3つの栄光の階級，伝道活動，再臨，奉献の律法，そのほか多くのテーマに関するものであった。

聖書のジョセフ・スミス訳

1830年6月，ジョセフ・スミスは聖書の欽定訳（英文）に対して霊感による訂正を加えるという，神から託された業を開始した。この業は聖書のジョセフ・スミス訳として知られるものである。1830年6月から1833年7月まで，

預言者は聖書に無数の改訂を加えていった。それは聖書の語句を正し，教義を明らかにし，歴史と教義に関連する資料を回復するという作業であった。

ジョセフはこの作業を通じてたくさんの啓示を受けている。その多くは，聖書の聖句について考えていて浮かんできた疑問への答えとして与えられたものである。その一つは，1832年２月16日，ジョセフとシドニー・リグドンがヨハネによる福音書第５章29節を翻訳した後に授けられた。二人はこの聖句について思いを巡らしていたが，「主は〔彼ら〕の理解の目に御手（みて）を触れてくださり，〔彼ら〕の理解の目が開かれた。そして，主の栄光が周りを照らした。」（教義と聖76：19）彼らは，偉大な示現の一つに数えられる教義と聖約第76章の啓示を受けた。二人は御父と御子を見，神の子らの行く末について学び，栄光の３つの王国にどのような人々が行くかについて，永遠の真理を学んだのであった。

啓示の出版

1831年11月にオハイオ州ハイラムで開かれた特別な大会で，教会員は預言者に授けられた約70の啓示が収められている『戒めの書』（*Book of Commandments*）を出版することに同意した。また主はこの大会の最中にジョセフ・スミスに，『戒めの書』のはしがきと付録となる啓示を授けられた。（これらの啓示は後に教義と聖約の第１章と第133章となった。）

『戒めの書』の印刷の責任を与えられたのがウィリアム・W・フェルプスである。彼はミズーリ州ジャクソン郡に印刷所を所有していた。（『戒めの書』の詳細については37－38ページを参照のこと。）この『戒めの書』の啓示はほかの啓示とともに，後に教義と聖約として印刷され，1835年にカートランドで出版された。また，預言者によるわずかな改訂が加えられたモルモン書もカートランドで印刷された。

教会設立のわずか数か月前，主は預言者の妻であるエマに教会における音楽の大切さを啓示され，聖なる賛美歌の編さんを始めるように言われた（教義と聖約25：11参照）。エマが編さんした賛美歌集はカートランドで出版され，聖徒たちが次の約束を受ける道を開いたのであった。「わたしは心の歌を喜ぶからである。まことに，義人の歌はわたしへの祈りである。それに対する答えとして，彼らの頭（こうべ）に祝福が注がれるであろう。」（教義と聖約25：12）

預言者の塾

1832年12月から1833年１月にかけて，預言者ジョセフは教義と聖約第88章となる啓示を受けた。この啓示の中で特筆すべきは，「預言者の塾」（教義と聖約88：127）を組織して兄弟たちに福音の教義や原則，教会の諸事を教えるようにとの指示が与えられたことである。

また，1833年の冬に預言者の塾の会合が頻繁に開かれていたころ，ジョセフとエマは兄弟たちにたばこの習慣があることを心配していた。集会中にたばこの煙が漂い，かみたばこで床が汚れるからである。ジョセフはこのことについて主に尋ね，知恵の言葉として知られる啓示を受けた。この啓示は主から授けられたわたしたちの体と霊に関する戒めで，この戒めに従う人には「知恵と，知識の大いなる宝，すなわち隠された宝さえ」授けられることを約束するものであった（教義と聖約89：19）。また，知恵の言葉には当時の医学や科学では知られておらず，後になって証明された健康に関する教えも含まれる。例えば，たばこやアルコールを摂取しないようにとの勧告がそうである。

奉献の律法

1831年，主は奉献の律法がどのようなものであるかを啓示として明らかにされた。奉献の律法とは，義にかなって従う貧しい末日聖徒が祝福を受けることのできる物心両面にわたる制度である。この律法の下，教会員は監督にすべての財産を奉献することを求められた。財産を受け取った監督は，管理の職の分を教会員に戻すのである。家族は管理の職として与えられた分をよく管理するように努める。年末になって余剰分があるときはそれを監督に返し，必要な人を助けるために用いる。主から教会の最初の監督に召されたのが，エドワード・パートリッジであった。

奉献の律法は教会員を霊的に強め，貪欲（とんよく）や貧困をなくした相対的な経済上の平等をもたらす原則であり，慣行であった。聖徒たちの中にはこの律法に従って生活することにより他人にも自分にも祝福をもたらした人々もいたが，利己心を克服することができないために律法を守れない人々もいた。このため，奉献の律法はやがて教会から取り去られることになる。そして1838年，代わって主は什分（じゅうぶん）の一の律法を啓示され（教義と聖約119章参照），これが現在も教会の財政に関する律法として続いている。

神権者を強める

神権の職が啓示される

教会員の数が増加するにつれて，預言者は神権の職についての啓示を続けて受けるようになった。預言者は主の指示により，自らを長とし，シドニー・リグドンを第一副管長，フレデリック・G・ウィリアムズを第二副管長とする大管長会を組織した。また十二使徒定員会と七十人第一定員会も組織している。さらに，監督や副監督，大祭司，祝福師，高等評議員，七十人，長老も召して聖任した。また預言者は，教会最初のステークも設立した。

バプテスマを受けたばかりで経験のない教会員は，奉仕の召しに圧倒されてしまうことが多い。例えば，ニューエル・K・ホイットニーは1831年12月に教会で2番目の監督に召されたが，それは，エドワード・パートリッジがミズーリの監督になったことによりカートランドの監督が必要になったためであった。ニューエルは，主からの啓示によって召されたことを預言者から告げられたにもかかわらず，その職をやり遂げるだけの能力がないと感じていた。そこで預言者は彼にこう語っている。「自分で主に尋ねなさい。」そこでニューエルがひざまずき，へりくだって主に願い求めると，天から「あなたはわたしによって強くされる」[5] という声が聞こえてきた。そこでニューエルは召しを受け入れ，18年間監督として奉仕したのである。

シオンの陣営での指導者訓練

教会は，試練をくぐり抜けた，経験豊かで信仰深く，どのような状況でも主と預言者に忠実な神権指導者を必要としていた。そのようなとき，困難な状況の下で従順さについて試しを受け，預言者ジョセフから直接指導を受ける機会が与えられた。それがシオンの陣営の行軍である。

シオンの陣営は，宗教上の理由で過酷な迫害を受けていたミズーリの聖徒たちを助けるために組織されたものである。当時ミズーリでは多くの聖徒たちが家を追われていた（詳細については36－41ページ参照）。1834年2月24日，主はジョセフ・スミスに，兄弟たちのグループを組織してカートランドからミズーリまで行軍し，聖徒たちのために住む場所を取り戻すように言われた（教義と聖約103章参照）。主は，この行軍には常に主がともにおられ，「すべての勝利と栄光」は彼らの「熱心さと，忠実さと，信仰の祈り」によってもたらされることを約束された（教義と聖約103：36）。最初の十二使徒定員会と七十人定員会のメンバーのほとんどは，この経験を通して将来の召しに備えたのであった。

シオンの陣営が正式に組織されたのは1834年5月6日で，オハイオ州ニューポーテージでのことであった。この陣営には最終的に207人の男性と11人の女性，11人の子供が加わった。預言者はそれらの人々を10人と50人のグループに分け，それぞれに隊長を選ばせた。隊員の一人であったジョセフ・ホルブルックは，陣営が「イスラエルの古代の秩序に従って」[6] 組織されたと語っている。陣営は45日間，ミズーリ川クレイ郡までの1,000マイル（約1,600キロ）もの道のりを一致して進んだ。過酷な状況の下，先を急ぎながらの行軍であった。十分な食糧を得ることはとても困難で，隊員は固いパンのかけらや悪臭のするバター，とうもろこしの粉，臭い蜂蜜（はちみつ），生の豚肉，腐ったハム，うじのわいたベーコンやチーズを食べなければならなかった。後に使徒となったジョージ・A・スミスは，四六時中空腹に襲われていたことを次のように書いている。「疲れと空腹と眠気がひどく，夢を見ながら歩いていました。美しい川の流れのほとりに快適な木陰があって，泉のそばのクロスをかけたテーブルには，ふっくらとしたパンと瓶に入った牛乳が置いてあるのです。」[7]

陣営で強調されたのは，霊性と戒めを守ることであった。日曜日には集会を開き，聖餐（せいさん）を受けた。そして預言者はしばしば王国の教義を教えた。こう語っている。「神はわたしたちとともにおられ，主の天使はわたしたちの先達をしてくれています。わたしたちのこの小さな隊の信仰は決して揺るぎません。天使はわたしたちとともにいます。わたしたちはそれをこの目で見て知っています。」[8]

しかし，行軍の厳しさは次第に参加者の心をなえさせていく。そしてこの精錬の過程によって，不満を抱く者たちの姿が浮き彫りにされていった。従順の精神に欠け，苦難を預言者のせいにしたがる人々である。5月17日，預言者は反抗心のある人々に「懲らしめを受けることのないよう，主の前にへりくだり，一つとなるように」[9] 勧告している。

陣営は6月18日にミズーリ州クレイ郡に到着したが，ミズーリ州知事ダニエル・ダンクリンの約束は守られなかった。ダンクリンはシオンの陣営を援助して，追放された教会員を元に戻すと言っていたのである。こうしてシオンの陣営は軍事上の目的を遂げることができなかったのだが，このことが隊員にとって最後の試しとなった。失意と怒りのために辺りをはばからずに反抗する者も出てきた。その結果，預言者ジョセフは主が大変な災難を送られることを警告した。そして間もなく，コレラが陣営に広まった。そしてジョセフ・スミスを含む陣営の3分の1が倒れ，14人が命を失っている。7月2日，

ジョセフはもう一度陣営に警告を与えた。主の前にへりくだり，主の戒めを守ることを聖約するように。そしてそのように行うならば疫病はたちどころに去ると述べたのである。陣営は挙手をもって聖約を交わし，やがて疫病は去って行った。

７月初旬，陣営の隊員は預言者から栄誉の解任を受けた。この行軍により明らかになったのは，だれが主の側に立つ者であり，だれが指導者の地位に就くにふさわしいかである。預言者は後にこの行軍の成果について次のように説明している。「神は皆さんに戦いを行ってほしくなかったのです。また神は，地上の国々で福音の門戸を開く十二使徒と彼らの指示に従って定められた道をたどる七十人によって王国を組織するに当たり，その命をささげ，アブラハムのように偉大な犠牲を払う人々を必要とされたのです。」[10]

陣営の一人で後に第４代大管長となったウィルフォード・ウッドラフはこう語っている。「わたしたちはほかの方法では味わうことのできない経験をしました。預言者の顔を見ながら，1,000マイル（約1,600キロ）もともに行軍し，神の御霊（みたま）が彼とともにあり，彼に下ったイエス・キリストの啓示が成就する様子をこの目で見る特権にあずかったのです。」[11]

この陣営の解任から５か月後の1835年２月，十二使徒定員会と七十人定員会が組織された。この二つの定員会の82席のうち，シオンの陣営の行軍でその信仰を証明した人が実に79の席を占めたのであった。

カートランドでは，ジョセフが続けて将来の指導者の訓練を行った。４人の後継の大管長，すなわちブリガム・ヤング，ジョン・テーラー，ウィルフォード・ウッドラフ，ロレンゾ・スノーはカートランドの時代にバプテスマを受け，1901年まで教会を導いた。また1951年まで教会を管理したジョセフ・Ｆ・スミス，ヒーバー・Ｊ・グラント，ジョージ・アルバート・スミスは，信仰堅固なカートランド時代の開拓者の子孫である。

伝道活動の進展

聖徒たちがカートランドに住んでいたころ，たくさんの人々が宣教師として家を遠く離れて福音を宣（の）べ伝える務めに召された。そして，そのほとんどが多大な犠牲を伴うものであった。宣教師が派遣されたのはアメリカの諸州，カナダの一部，それに大西洋を越えたイギリスである。この伝道活動を通して多くの人々が福音の真理に対する証（あかし）を受けた。そして雄々しい教会員となり，若い教会に大きな力をもたらすこととなったのである。

カートランドで記録された多くの啓示の中には，全世界の人々に福音を宣（の）

べ伝えるようにとの教会員への戒めがある。主はこう宣言された。「あなたがたはわたしの御霊（みたま）の力をもって出て行き，二人ずつ組んでわたしの名によってわたしの福音を宣べ伝え，ラッパの音のように声を上げ，神の天使のようにわたしの言葉を宣べなければならない。」（教義と聖約42：6）翌年，主はこう戒められた。「警告を受けた人は皆，その隣人に警告しなければならない。」（教義と聖約88：81）

初期のオハイオの改宗者の伝道

オハイオでの改宗者であるゼラ・パルシファーは，回復のメッセージを熱心に宣（の）べ伝えた好例である。彼は1832年に教会に加入，それから程なく「長老の職に聖任され，国の内外で伝道の業に多大な成功を収めた」[12] と自ら記録している。彼はもう一人の宣教師であるエライジャ・チュニーとともにニューヨーク州リッチモンドという小さな町に行き，地元の学校で福音を説き始めた。リッチモンドでパルシファー長老からバプテスマを受けた人々の中に，教会史上最も傑出した宣教師と言われ，第4代大管長となったウィルフォード・ウッドラフがいた。彼は当時農夫であった。この二人の宣教師は1か月のうちに多くの人々を改宗し，リッチモンドに教会の支部を組織した。

隣人に警告をとの呼びかけに対して，様々な職業の人々が宣教師となった。また多くが既婚者で，家族を養う責任があった。彼らは作物の収穫の直前に，また冬のいてつく中，そして社会的な成功を顧みず，はたまた経済的破綻（はたん）の中を伝道に出た。多くの宣教師は伝道地に入る時点から赤貧状態にあった。預言者自身も1831年から1838年までの間，アメリカ諸州やカナダで短期間の伝道を繰り返し，1万5,000マイル（約2万4,000キロ）以上も旅をしている。

預言者のいとこであるジョージ・A・スミスは合衆国東部へ伝道に召されたが，必要な衣服や本も買えないほど貧しい状態だった。そこで預言者ジョセフと兄のハイラムが彼にグレーの布地を贈り，エリザベス・ブラウンがその布地で上着とベストとズボンを作った。また，ブリガム・ヤングが靴をプレゼントし，父親はポケット版の聖書を渡し，預言者はモルモン書を1冊進呈した。

エラスタス・スノーとジョン・E・ページの両長老は1836年春に伝道に召されたが，二人とも貧しい状態であった。スノー長老はペンシルベニア西部への伝道に出かけるときの様子をこう記している。「わたしは徒歩でカートランドを出た。持っていたのは教会の書籍数点と靴下1足の入ったスーツケースとポケットに5セント玉一つ。これがわたしの全財産だった。」ペー

苦難の時期にアメリカインディアンに福音を伝えるように
召されたこの4人の宣教師は，教会初期の歴史を通して
忠実な宣教師たちがささげた犠牲の模範である。

ジ長老は着て行く服がないという理由で伝道の召しを断った。上着もなかったのである。それに対して預言者は，自分の上着を脱いでページ長老に渡した。そして，伝道に出るように，そうすれば主が豊かに祝福してくださると述べた。[13] この伝道でページ長老は祝福されて大勢の人々に福音を説き，何百人もの人々が教会に加わった。

十二使徒定員会の伝道

1835年，十二使徒定員会に，合衆国東部とカナダへの伝道の召しが下った。十二使徒定員会全員が時を同じくして伝道の業に召されたのは，教会歴史上このときだけである。帰還後ビーバー・C・キンボールは，神の力を感じ，病人を癒(いや)したり悪魔を追い出したりできたことを証(あかし)している。

イギリスへの伝道

カートランド時代の後半，教会は危機に見舞われる。指導者を含む教会員の中から背教する者が出始めたのである。試練や迫害に耐えられなくなったのと，預言者ジョセフをはじめとする教会の指導者に欠点を見始めたためであった。主はジョセフ・スミスに，教会の救いのために何かをしなければならないことを啓示された。その「何か」とは，イギリスの人々を改宗して教会に加入させることであった。1837年6月4日，日曜日，預言者はカートラ

ンド神殿の中でヒーバー・C・キンボール長老と会い，こう述べている。「ヒーバー兄弟，主の御霊がわたしにささやきました。『わたしの僕ヒーバーをイギリスに行かせ，わたしの福音を宣べ伝えさせ，その国の救いの扉を開かせなさい』と。」[14]

ヒーバー・C・キンボールが伝道の任命を受けていたときに，オーソン・ハイドが部屋に入って来た。そして任命の言葉を聞いたオーソンは心を動かされ，悔い改めた。オーソン自身が預言者の欠点を指摘する者たちの中にいたからである。オーソンはその場で伝道に出ることを申し出，彼もまたイギリスに行くように召された。

ヒーバー・C・キンボールの外国伝道への熱意は大変なもので，船がイギリスのリバプールに着くと，まだ係留する前に船から飛び降り，自分が回復されたメッセージを宣べ伝えるために外国を訪れた最初の宣教師であることを宣言した。そして7月23日には宣教師たちの集会に人々があふれるばかりに集まり，7月30日には最初のバプテスマが予定された。イギリスでの最初のバプテスマの栄誉に輝いたのはジョージ・D・ワットで，何人かの候補者の中，プレストンのリブル川までの徒競走に勝ったジョージがバプテスマ第1号となったのである。

こうして8か月の間に改宗者は数百人に上り，多くの支部が組織された。この偉大な刈り入れの業を振り返ってヒーバー・C・キンボールは，預言者や副管長たちが「わたしの頭に手を置き，……神がかの国においてわたしを強くし，主のもとに人々を獲得できるようになること，また天使がともにいてわたしを支え，決して失敗することのないようにしてくれること，そしてわたしが大きな祝福を受けて何千もの人々に救いがどこから来るかを証明できるようになることを述べてくれた」[15] と語っている。

こうして初期の宣教師たちが個々の犠牲を物ともせずに宣教師としての召しを受け入れたことにより，何千ものイギリス人の改宗者が回復された福音の祝福を受けられるようになった。彼らはシオンに集合し，後の苦難の時代，教会を支える大きな力となったのである。

カートランド神殿

聖徒たちの犠牲

聖徒たちが神殿を建てるようにとの主の戒めを初めて耳にしたのは，1832年12月27日のことである（教義と聖約88：119参照）。そして1833年から1836年にかけて，カートランドの教会の最優先事項として神殿の建設が採り上げ

られるようになった。これは教会員にとって大きな問題であった。労力にも財源にも事欠いていたからである。エライザ・R・スノーはこう書いている。「当時……聖徒たちは数も少なく，ほとんどが貧しい状態でした。ですから，神殿の建設を神御自身が語られたという確信がなければ，しかもそれが神の名の下に建てられるよう命じられ，主がその形状のみならず寸法までも啓示されたのでなければ，当時の状況の下では神殿建設の試みはどう考えてみても非常識と言わざるを得なかったことでしょう。」[16]

預言者ジョセフ・スミスと聖徒たちは，神が必要な助けを与えてくださるとの信仰の下，犠牲をささげ始めた。ジョン・タナーは神殿建設のために資産を提供するよう主が用意してくださった人であった。1834年12月にニューヨーク州ボルトンで改宗したばかりのジョンは，「夜，夢もしくは示現を受けて，自分が必要とされているので西部の教会に行かなければならないと感じた。……

カートランドに到着して分かったのは，彼がすぐに教会に向かわなければならないと感じたちょうどそのとき，預言者ジョセフが何人かの兄弟たちとともに祈り会を開き，神殿建設を予定している農地の抵当権を消滅させるのを援助してくれる兄弟を送ってくださるように願い求めていたということであった。

カートランド到着の翌日……ジョンは上述の農地が間もなく抵当流れ処分となることを知り，預言者に2,000ドルの資金を用立てた。ジョンは預言者から利子を含めた借用証を受け取り，農地は2,000ドルで買い戻された。」[17]

神殿建設に向けたカートランドの聖徒たちの驚くべき努力は，時間と才能と財産の犠牲と奉献の模範である。彼らは神殿建設のために3年間働き続けた。男性は建築の技術と労力を提供し，女性は糸を紡いで働く人々の衣服を作った。また後には神殿の部屋を分ける幕も作っている。建築の作業は暴徒の襲撃の脅威にさらされるにつれて困難さを増し，昼間働いた人々は夜は警備に回らなければならない状態であった。しかし，聖徒たちが時間と財産をあふれるばかりに犠牲としてささげたことにより，神殿は1836年の春についに完成を見た。

神殿の奉献

神殿が完成すると，主はカートランドの聖徒たちに力強い霊的な祝福を授けられた。それにはいろいろな示現や天使の働きも含まれていた。ジョセフ・スミスはこの時代を「わたしたちにはヨベルの年であり，喜びの時で

あった」[18] と述べている。ダニエル・タイラーはこう証(あかし)した。「すべての人が天国とはいかなるものかを感じられたと思います。……福千年が始まったのではないかと感じました。」[19]

この御霊(みたま)が最高潮に達したのが神殿の奉献であった。1836年3月27日，約1,000人が喜びに包まれて神殿に集まり，奉献の賛美歌がささげられた。その中には奉献式のためにウィリアム・W・フェルプスが書いた「主のみたまは火のごと燃え」も含まれていた。聖餐(せいさん)が配られ，シドニー・リグドン，ジョセフ・スミス，そのほかの人々による説教が行われた。

奉献の祈りを読んだのはジョセフ・スミスである。その内容は啓示としてジョセフに授けられたものであり，現在教義と聖約第109章に収められている。その中でジョセフは，主が五旬節(ごじゅんせつ)の日のときのように聖徒たちを祝福してくださるよう嘆願している。「激しい大風のごとく，あなたの宮があなたの栄光で満たされますように。」（教義と聖約109：37）多くの人々は，預言者がその日の晩に神殿で神権定員会の会員と会ったときにその祈りが成就したと記録している。

エライザ・R・スノーはこう記した。「奉献の式は繰り返し行うことができるかもしれません。しかし，あの記念すべき日の天からの顕現をだれも言葉で表すことはできないでしょう。ある人には天使が現れ，そしてその場にいたすべての人が主の臨在を感じました。一人一人の心がえも言われぬ喜びと栄光に満たされたのです。」[20] 奉献の祈りの後，集った全員が立ち上がり，両手を挙げて「ホサナ」と叫んだ。

それから1週間後の1836年4月3日，末日聖徒の歴史上重要な出来事が起こる。その日神殿で救い主がジョセフ・スミスとオリバー・カウドリに御姿(みすがた)を現され，「見よ，わたしはこの家を受け入れた。そして，わたしの名はここにあるであろう。わたしは憐(あわ)れみをもってこの家でわたしの民にわたし自身を現すであろう」と言われたのである（教義と聖約110：7）。そして，ほかの偉大にして栄光あふれる示現が続く。モーセ，エライアス，エリヤが現れ，さらなる神権の鍵(かぎ)を回復した。モーセはイスラエルの集合の鍵を回復し，エライアスはジョセフとオリバーにアブラハムの神権時代の鍵を授け，エリヤは結び固めの鍵を回復した（教義と聖約110：11－16参照）。これらすべての鍵は，最後の神権時代における主の王国の発展のために欠くことのできないものであった。

カートランドの時代，神殿で授けられる完全な神権の祝福はまだ授けられていない。それらの祝福は数年後，ノーブー神殿建設の最中に預言者ジョセ

フを通して教会に啓示されるのである。

カートランドからの脱出

神殿の建設は多大な祝福をもたらした。しかし1837年と1838年，忠実な聖徒たちは背教と迫害による問題に直面しなければならなかった。このことにより，カートランドでの教会の歴史は急速に終わりを迎える。

当時アメリカ合衆国は経済不況に見舞われており，その影響は教会にも影を落とす結果となった。教会員の中には多額の投機や借金に走り，財政的な破綻（はたん）による暗黒の時代を霊的に生き残れない人々が出てきた。その一因となったのがカートランド安全協会の倒産である。この銀行組織はカートランドの教会員によって設立されたものであるが，中には倒産の責任をジョセフ・スミスに負わせようという誤った考えを持つ者もあった。

また，地元住民や，破門されるか背教するかして教会を嫌悪するようになった会員により，迫害が組織化し，暴徒の攻撃も激しさを増していった。

こうして聖徒たちや指導者への暴力行為が激しくなったため，カートランドにとどまることが危なくなってきた。身の危険を感じた預言者は1838年1月にカートランドを脱出，ミズーリ州ファーウェストに逃れた。1838年にはほとんどの聖徒たちが家を追われている。彼らは信仰と奉献と犠牲の金字塔である，神のために建てた神殿を残して来なければならなかった。しかし彼らはその人生の中に，主から油注がれた指導者への従順と主の業の中での犠牲という尽きることのない受け継ぎを残したのであった。

ミズーリ州でのシオンの確立

ミズーリ州での初期

聖徒たちがオハイオ州カートランドで神の王国の建設に努力を傾けていたちょうど同じころ，ミズーリ州ジャクソン郡の教会員の多くは非常な苦難に見舞われていた。

後にシオンとして知られるようになるミズーリの地に定住した最初のグループは，ニューヨーク州コールズビル出身の聖徒たちであった。彼らは呼びかけに応じて進んで家を離れ，カートランドに集まった（17ページ参照）。しかし，彼らが到着した1831年５月中旬には，彼らのために取ってあるはずの土地がもうなくなっていた。そこで預言者ジョセフ・スミスは彼らのために主に祈り，自分自身とシドニー・リグドン，それにほかの28人の長老がミズーリの地に伝道の旅に出るようにとの啓示を受けたのであった。こうして主はコールズビルの聖徒たちにも「ミズーリの地へ」行くように指示されたのである（教義と聖約54：8）。

コールズビル支部の支部長であったニューエル・ナイトは直ちに民を集めた。エミリー・コバーンはこう語っている。「わたしたちはほんとうのところ巡礼者の群れのようでした。もっと良い所を求める旅が始まったのです。」[1] 彼らはオハイオ州ウェルズビルで汽船に乗り，オハイオ川，ミシシッピ川，ミズーリ川を経てミズーリ州ジャクソン郡に着いた。汽船の船長はこう語ったという。「彼らは西部への移住者として乗船した中でいちばん静かで落ち着いた人たちでしたね。言葉も丁寧ですし，ギャンブルに興じることも酒を飲むこともありませんでした。」[2]

預言者とほかの教会指導者たちは，陸路を急いだ。コールズビルの聖徒たちより先に着いて，彼らを迎えるためであった。預言者の一行がミズーリ州インディペンデンスに到着したのは1831年７月14日のことである。そしてその地を一通り見た後で，預言者は導きを求めて主に祈った。預言者はこう語っている。「〔主は〕わたしに御姿（みすがた）を現し，わたしとほかの者たちに，集合の業を開始し，シオンと呼ばれるはずの聖なる町を建設するように計画され

た場所を示してくださいました。」[3]

この啓示は，聖徒たちの集合の地として主がミズーリを意図しておられることを具体的に示すものであった。「今インディペンデンスと呼ばれている場所は中心の場所であり，神殿の建てられる地点は西方の，郡庁舎から遠くない地所にある。」（教義と聖約57：3）こうして聖徒たちは，西方の土地のすべてを，インディアン居留地との境界線の所まで購入することになる（教義と聖約57：1－5参照）。

ジョセフ・スミスとパートリッジ監督は，コールズビル支部のためにインディペンデンスの西方12マイルに位置するカウの町の土地を購入した。そして1831年8月2日，支部の聖徒たちの到着を受けて式典が行われたが，それは象徴に富んだものであった。イスラエルの12部族を表す12人の男性が，切り取ったばかりのかしの棒を持ち，オリバー・カウドリが置いた石の上にそのかしの棒を置いた。それがシオンの基礎を据えることの象徴であった。こうして，つつましいながらシオン建設の業は始まった。聖徒たちはまず，教会と学校の兼用の建物を建てた。[4]

翌日，インディペンデンスの郡庁舎の西2分の1マイルにある高台に大勢の兄弟たちが集まった。そして預言者ジョセフ・スミスが将来建てられる神殿の隅石を置き，主の名によって奉献した。シオンの中心は神殿となるはずだったからである。[5]

こうして預言者はカートランドに帰り，ジャクソン郡に残った聖徒たちはエドワード・パートリッジ監督から土地を譲り受けた。聖徒たちは非常に貧しくて，小屋を建てるまでの間，雨露を防ぐテントさえ持っていなかった。また，農作業をするための道具も皆無で，200マイル（約320キロ）東のセントルイスまで何台かの荷馬車を仕立て，買いに行かなければならなかった。しかし，聖徒たちは道具を手に入れるやいなや，土地を開墾し，種をまき始めた。エミリー・コバーンはそのときの感動をこう伝えている。「4頭か5頭立ての牛が豊かな土地を耕していく様子はとても奇妙なものでした。さくを巡らしたりしながら，辺りの様子が急速に変わっていきました。お金や時間や労力を上回る速さで，家族のための小屋が建てられていきました。」[6]

開拓者特有のこうした不便な状況にもかかわらず，コールズビルの聖徒たちは明るく前向きだった。彼らとともに移住したパーリー・P・プラットはこう語っている。「わたしたちは祈りや集会の中で，幸せな気持ちを何度も味わいました。御霊（みたま）が豊かに注がれ，8歳，10歳，12歳の子供たちでさえ，集会や家庭での礼拝の中で話をし，祈り，預言をしたのです。この荒れ野の

中の小さな教会には，平安と一致と愛と思いやりの精神がみなぎっていました。この思い出はわたしの心の中に永遠に生き続けることでしょう。」[7]

聖徒たちは1832年4月，預言者とシドニー・リグドンの2度目の訪問により祝福を受けることになる。この二人の訪れは，彼らがオハイオ州ハイラムのジョン・ジョンソン農場でつらい出来事を体験した直後のことであった。彼らはジョン・ジョンソン農場で聖書の翻訳をしていたが，教会の敵対者が夜中に暴徒と化して彼らを襲い，ジョセフ・スミスを家から連れ出した。そして首を絞めて服をはぎ取り，体にコールタールを塗り，鳥の羽毛を付けたのである。シドニー・リグドンは凍ったでこぼこの道を足を持って引きずられたため，頭に深い裂傷を負ってしまった。

そうした肉体的な仕打ちとは対照的に，ミズーリに着いた彼らは，友人に囲まれ，安全であった。ジョセフはこう述べている。「わたしたちは歓迎を受けました。それは同じ信仰，同じバプテスマの下に一致し，同じ主に支えられた兄弟姉妹だけが知っているものでした。特にコールズビル支部の人々は，古代の聖徒たちがパウロに示したと同じ喜びをわたしたちに示してくれました。神の民と喜びを共にすることができるのはすばらしいことです。」[8]

ジャクソン郡での迫害

パートリッジ監督は主の命令により，オハイオやほかの州から移住して来るたくさんの聖徒たちのために，ジャクソン郡に何百エーカーもの土地を購入した。そして指導者たちは教会員のために，インディペンデンス，コールズビル，ホイットマー，ビッグブルー，プレーリーの各支部を開設した。そして1833年後半には10の支部が設立されている。教会設立3周年記念のための1833年4月のビッグブルーリバーでの大会には，1,000人を超える聖徒たちが集合している。ニューエル・ナイトは，この大会はシオンにおけるこの種の集まりの先駆けを成すものであり，聖徒たちの間には喜びの精神がみなぎっていたと語っている。しかし，ニューエルはこうも述べている。「聖徒が喜ぶとき，悪魔は怒ります。そして悪魔の子らも手下どもも怒りを募らせるのです。」[10]

4月が終わりを迎える前に，迫害の気運が形となって現れ始めた。初期の段階で地元の市民は，末日聖徒が大量に流入して来ることに不快感を示していた。やがて数的に過半数を超え，地元の政治を左右するほどの勢力になることを恐れたのである。聖徒たちはもともと北部諸州の出身であり，黒人に対する奴隷制度には反対の立場を取っていた。ところが，ミズーリではそれ

が合法であった。また聖徒たちのモルモン書を聖典と信じる姿勢，ジャクソン郡が究極的には彼らのシオンになるとの考え，それに預言者によって導かれているとの確信は，地元の人々に動揺を与えるものであった。また，インディアンと接触したとの非難も，末日聖徒に対して懐疑心を抱かせた。

そして，しばしば「密約」と呼ばれる回状が敵対者により流され，「モルモンのたたり」を追い払うことに進んで協力する人々の署名が求められた。こうした敵対感情は1833年7月20日に頂点に達し，謀議のためにインディペンデンスの郡庁舎に集まった暴徒は約400人に及んだ。そして，教会の指導者に対して要求書を突きつけた。ジャクソン郡から立ち去ること，『イブニング・アンド・モーニングスター』（*The Evening and the Morning Star*）紙の印刷をやめること，もうこれ以上末日聖徒をジャクソン郡に移住させないことを求めるものであった。教会の指導者がこれらの不当な要求に応じないと知るや，暴徒はウィリアム・W・フェルプスの居宅を兼ねていた新聞社を攻撃して印刷機を盗み，建物を壊した。

『戒めの書』（*Book of Commandments*）に対する破壊活動

その印刷所で取り組んでいた最も重要な事業が『戒めの書』の印刷であった。預言者ジョセフ・スミスが受けた啓示を編さんした最初のものである。攻撃して来た暴徒は，まだ製本していないページを道にばらまいた。これを見た幼い末日聖徒であるメアリー・エリザベス・ロリンズと妹キャロラインは生命の危険を感じ，懸命に逃げた。メアリー・エリザベスはそのときの模様をこう回想している。

「〔暴徒たち〕は大きな紙を取り出してこう言いました。『モルモンの戒律があったぞ。』わたしと妹は囲いの角の所にいて，様子を見ていました。そして戒律という言葉を聞いたとき，何枚か手に入れようと思いました。でも，妹が，わたしも行きたいけど，見つかったらきっと殺されると言うのです。」しかし二人は，暴徒が印刷所の中の一方の端で暴れている間，走って行って印刷したばかりの貴重な戒めを両腕にいっぱい抱えて逃げた。それを見た暴徒は止まるように命令した。メアリー・エリザベスはこう書いている。「わたしたちは一目散に逃げました。二人の暴徒が追いかけて来ます。囲いに透き間があるのを見つけたわたしたちは，そこから外のとうもろこし畑に逃げました。そして抱えていた印刷物を地面に置き，二人で覆いかぶさりました。とうもろこしは5フィートから6フィート（約150－180センチ）の高さで，しかも透き間なく茂っていたので，暴徒たちは必死で捜しましたが，結局

わたしたちを見つけることはできませんでした。」

暴徒が去った後で，彼女たちは古い丸太小屋に行った。「そこにはフェルプス姉妹と子供たちがいて，運んで来た木の枝を積み上げてベッドを置けるようにしているところでした。フェルプス姉妹がわたしに何を持っているのか尋ねるので，いきさつを話すと，彼女はそれを受け取って小さな本を何冊か作り，そのうちの1冊をわたしに送ってくれました。わたしはそれをとても大切にしています。」[11]

パートリッジ監督への迫害

暴徒は今度はエドワード・パートリッジ監督とチャールズ・アレンを捕らえてインディペンデンスの広場に連れて行き，モルモン書を捨ててジャクソン郡から出て行くように命じた。パートリッジ監督はこう語っている。「わたしはこう言いました。聖徒たちはいつの時代にも迫害されてきた。わたしは人を傷つけるようなことは何もしていない。もしわたしを虐待するなら，それは無実の人間を虐待することになる。わたしはキリストのためにその苦しみを喜んで受けよう。しかし郡を去れとの命令には応じない。」

拒絶の言葉を口にすると，二人は衣服をはぎ取られた。そして体にコールタールを塗られ，羽毛を付けられた。パートリッジ監督はこう述べている。「わたしがあまりにも素直に虐待に耐えたので，群衆はあっけに取られた様子でした。彼らは何も言わずにわたしを解放しました。多くの者が心を動かされたらしく，真剣な顔つきでした。わたしはと言えば，御霊（みたま）と神の愛に満たされていたので，迫害をする者にもほかの者にも何の憎しみも持ちませんでした。」[12]

ビッグブルーの戦い

7月23日，暴徒は再び攻撃して来た。そこで教会指導者は自分たちが捕虜になることにより教会員に害を加えないことを求めたが，暴徒は教会全体に危害を加えると脅迫し，末日聖徒全員がジャクソン郡を去ることに同意するよう教会指導者に強要した。これらの暴徒の行為は不当であり，合衆国憲法やミズーリ州法にも違反することなので，教会指導者はミズーリ州知事のダニエル・ダンクリンに援助を求めた。ダンクリンは教会員に市民としての権利があることを話し，法律の専門家の援助を受けるように指示した。こうして教会員の代理人としてアレクサンダー・W・ドニファンらが雇用されたが，これが暴徒の感情を逆なですることとなった。

最初末日聖徒は住民との直接の接触を避けていたが，教会員への虐待や家屋の破壊が続き，ついにビッグブルーリバーでの戦いに発展した。暴徒の中の二人が死に，聖徒の側ではアンドリュー・バーバーが命を落とした。フィロ・ディブルは腹部を3度撃たれたものの，ニューエル・ナイトの癒(いや)しにより奇跡的に命を取り留めている。ディブルはこう語っている。

「ニューエル・ナイト兄弟が会いに来て，わたしのベッドの横に座りました。……わたしは彼の手がわたしの頭に触れる前から，御霊(みたま)がわたしの頭の頂点にとどまるのを感じました。それですぐに癒(いや)されると感じたのです。……わたしはすぐに起きて3クォート（約3リットル）以上の血を体から出しました。血の中には，弾丸が撃ち込まれたときに体の中に食い込んだ衣服の切れ端も入っていました。それからわたしは自分で包帯をして外に出ました。……そのとき以来1滴の出血もありませんし，傷が痛むこともありません。ただ，出血によって体力が落ちただけでした。」[13]

この戦いはダンクリン知事が仲裁に入り，トーマス・ピッチャー大佐に命じて双方に武器を捨てさせることとなった。ところが，暴徒の方の肩を持ったピッチャー大佐は，聖徒たちから取り上げた武器を暴徒に渡してしまった。こうして聖徒たちは無抵抗の状態で攻撃を受け，家を壊された。男たちは森に逃げ込み，逃げ遅れた者は袋だたきに遭った。そして，ついに教会指導者は，持ち物を携えてジャクソン郡を出るよう聖徒たちに命じた。

クレイ郡へ逃れる

1833年も終わりに近づいたころ，聖徒たちの大半はミズーリ川を北に渡ってクレイ郡に入り，そこにしばしの安住の地を求めた。パーリー・P・プラットはこう書いている。

「川岸には渡し船の両側に向かって，男，女，子供，品物，荷車，箱，食糧などの列ができ，次々に乗船して行った。そして再び夜のとばりが降り，ポプラの生い茂るその川べりは野営場の様相を呈していた。あちこちに何百人もが散らばり，土砂降りの雨の中をある者はテントの中に入り，ある者はたき火の周りに集まっていた。夫は妻の行方を尋ね，妻は夫を捜し，親は子供を，子供は親を捜し歩いた。家族全員で家財道具や食糧を持ち出せたという幸運な者もいれば，ある者は友人の消息も分からず，財産も失ってしまった。この光景を目にしたならば，世界中のあらゆる人々の心は哀れみの思いで満たされていたことであろう。あの盲目の虐待者，盲目で無知な住民を除いては。」[14]

こうして，ジャクソン郡にシオンを築き，神に神殿を奉じるという機会は，一時的に聖徒たちから奪い去られてしまった。約1,200人の教会員は今やクレイ郡の川べりで，厳しい冬の寒さを生き延びるためにできることは何でもしなければならなかった。荷車やテントで住み家を作る者，丘のふもとに横穴を掘る者，また空き家になった小屋に住みつく者もいた。ニューエル・ナイトはインディアンのテント小屋で冬を過ごした。

聖徒たちがクレイ郡で最初に建てた建物の一つに，礼拝のための小さな丸太造りの教会がある。「彼らは悪らつな敵の手から救い出してくださったことについて，全能の神に感謝することを忘れなかった。また，これからも彼らを守ってくださることを主に求めたのである。そして，彼らを追放した人々の心が和らぎ，さらには自分たちがこれから生活を支えていくことができるようにと祈ったのであった。」[15]

シオンの陣営の迫害

第3章で説明したように，主はジョセフ・スミスに命じて男たちを募り，ジャクソン郡の土地から追われた聖徒たちを救出するためにカートランドからミズーリまで行軍するように言われた。シオンの陣営が1834年6月の終わりにミズーリ州クレイ郡の東部に到着すると，300人を超えるミズーリ州民が暴徒と化してシオンの陣営を撃退しようと集まった。陣営は預言者ジョセフの指示により，リトルフィッシング川とビッグフィッシング川の合流点に陣を張った。

暴徒たちは大砲まで持ち出して攻撃して来たが，主は聖徒たちとともに戦ってくださった。頭上を雲が覆い始めたのである。預言者はそのときの様子をこう説明している。「あられ混じりの雨が降り始めました。……ひどい嵐（あらし）です。風と雨とあられと雷がたけり狂ったように彼らを打ち，彼らの士気をくじきました。そして，『ジョー・スミスと彼の軍を皆殺しにする』という企てが水泡に帰してしまったのです。……彼らは荷車の下や木のうろ穴にもぐり込み，小さな小屋は人でいっぱいになりました。そして嵐がやむまでだれも出て来ませんでした。火薬も水にぬれてしまったのです。」このたたきつけるような雨は一晩中続いた。「『むなしい望み』は破れ，彼らはインディペンデンスの本隊のもとに撤退しました。このことからわたしたちは，エホバが戦われるときは敵は何も手出しができないことが分かります。……それはあたかも，敵の破壊の手から僕（しもべ）を守るために，戦いの神から復讐（ふくしゅう）の命令が下ったかのようでした。」[16]

暴徒の軍が聖徒たちに対決の姿勢を示し，ダンクリン知事も聖徒たちを援助するとの約束を守らないことが明らかになった段階で，預言者は指示を求めて主に祈った。それに対して主は，今は聖徒たちにとってシオンを贖(あがな)うに適した状況ではないことを指摘された。聖徒たちはシオン建設のために個人の生活を建て直さなければならなかったのである。多くの者は主が求めておられる事柄に対してまだ従順ではなかった。「日の栄えの王国の律法の諸原則によらなければ，シオンを築き上げることはできない。そうでなければ，わたしはシオンをわたしのもとに迎えることはできない。そして，わたしの民は，たとえ苦しみを受けることによらなければならないとしても，従順を学ぶまで，必ず懲らしめを受けなければならない。」（教義と聖約105：5－6）

また主は，シオンの陣営は軍事上の目的を追求すべきでないとも言われた。「それゆえ，わたしの民が戒めに背いたので，わたしが必要としているのは，わたしの長老たちがしばしの間シオンの贖いを待つことである。それは，彼ら自身が備えられるためであり，またわたしの民がもっと十分に教えを受け，経験を得，彼らの義務とわたしがその手に求めることに関してもっと十分に知るためである。」（教義と聖約105：9－10）こうしてシオンの陣営の兄弟たちは名誉の解任を受け，預言者はカートランドに戻った。

ファーウェストの教会本部

ミズーリ州にいた聖徒たちはほとんどそのままクレイ郡にい続けたが，1836年，住民側から，クレイ郡への滞在はジャクソン郡に戻るまでの間であると聖徒たちが約束していたことを指摘された。ジャクソン郡に戻ることが不可能となった今，彼らは約束を守ってクレイ郡を立ち去るように求められたのである。法的にはそうした要求には従う必要はないのだが，聖徒たちは再び紛争が起きるのを懸念して移住をすることとなった。そして，教会の理解者であるアレクサンダー・W・ドニファン州議会議員の努力で1836年12月，コールドウェル郡とデイビーズ郡が新たにレイ郡から設けられた。そして聖徒たちはクレイ郡の北約60マイル（約96キロ）のコールドウェル郡の一地点にファーウェストという新しい町を建設することを許された。そして，郡の主要な役職は末日聖徒が占めることとなったので，多くの人々は聖徒たちへの迫害は終わりを告げたと考えた。

オハイオ州カートランドからの困難な旅路を経て，預言者ジョセフ・スミスは1838年３月にミズーリ州ファーウェストに到着，教会本部を設立した。そして５月には北のデイビーズ郡に行き，グランド川を訪れる傍ら「アダム

がその民を訪れるために来る場所」[17] としてアダム・オンダイ・アーマンの谷を預言をもって特定した（教義と聖約116：1）。こうして，アダム・オンダイ・アーマンはデイビーズ郡の聖徒たちの主要な定住地となった。1838年7月4日にはファーウェストの地に神殿の隅石が奉献され，聖徒たちはついに敵の手の及ぼない安息の地を得たと感じたのであった。

クルックトリバーでの戦い

しかし，迫害はすぐに始まった。1838年8月6日，デイビーズ郡のガラティンの投票所に100人の暴徒が集結し，聖徒たちの投票を妨害した。これが紛争に発展し，数人の負傷者を出すに至った。こうしてコールドウェル郡とデイビーズ郡での暴徒による騒乱が激しさを増し，リルバーン・W・ボッグズ知事は平和維持のために州軍を出動させた。

州軍の将校の一人であったサミュエル・W・ボガード隊長は，暴徒と非常に親密な関係にあった。彼は紛争を仕掛けるために3人の末日聖徒を連れ去り，レイ郡の北西にあるクルックトリバーの陣営に監禁した。そのため，末日聖徒の救出軍が出動し，1838年10月25日，激しい戦闘が行われた。このとき末日聖徒の軍を率いたのが十二使徒の一人であるデビッド・W・パッテンで，彼はこの戦いで負傷し，命を落とした。デビッドの妻フィービー・アン・パッテン，ジョセフ・スミス，ハイラム・スミス，ヒーバー・C・キンボールがファーウェストから駆けつけ，臨終に立ち会っている。

ヒーバー・C・キンボールはデビッド・パッテンについてこう述べている。「彼にとってとても貴重であった福音の原則が，旅立ちに当たって彼に守りと慰めを与えてくれました。それによって彼の死からはとげと恐怖が取り除かれたのです。」パッテンは臨終の床で，信仰を堅固に保てずに背教の道を歩んだ聖徒たちについてこう叫んだ。「ああ，わたしの今の気持ちを理解してくれたらよいものを。わたしは信仰を守り通したと胸を張って言える。」次に彼は妻であるフィービー・アンにこう言った。「どんなことをするときにも決して信仰を否定しないように。」彼は死ぬ間際にこう祈っている。「父よ，わたしはイエス・キリストの御名（みな）によりあなたに願い求めます。わたしの霊を解き放って，あなたのもとに受け止めてください。」そして，そばにいた人々にこう嘆願した。「兄弟の皆さん，皆さんは信仰の下にわたしを支えてくださいました。でも，どうぞわたしを放して行かせてください。お願いします。」キンボール兄弟はこう語っている。「わたしたちは彼の言葉どおり，彼を神に託しました。間もなく彼は息を引き取り，苦しむことなく

イエスにあって眠りに就いたのです。」[18]

サミュエル・ボガード隊長の率いる隊は，州軍というよりも暴徒であった。しかしながら，このクルックトリバーでの戦いで州軍に死者が出たこと，またそのほかいろいろな報告が寄せられたことにより，リルバーン・W・ボッグズ知事はかの悪名高き「撲滅令」を出した。1838年10月27日付けのこの命令には次のようなことが書かれている。「モルモンは敵として扱われなければならない。そして，公共の秩序のために，必要であれば撲滅もしくは州外に追放されねばならない。彼らの不法行為には筆舌に尽くせないものがある。」[19] こうして，知事の命令を遂行するために，州軍の一人の将校が任命された。

ハウンズミルの虐殺

撲滅令が出されて3日後の1838年10月30日，200人ほどの男たちがコールドウェル郡ショール・クリークのハウンズミルにある聖徒たちの共同体に突然攻撃を仕掛けてきた。彼らは，助かりたい者は鍛冶屋（かじや）の店に入れと言ってだまし，人々が中に入ってから店を取り囲み，店になだれ込んで銃を乱射した。彼らの攻撃は，中にいた者を皆殺しにするまで続いた。また逃げようとした者も撃たれ，結局少年も含めた17人の男性が殺され，15人が負傷した。

この虐殺の後，アマンダ・スミスは鍛冶屋の店に行き，夫ウォーレンと息子サディアスの死を確認した。しかし，この大量殺人の中での大きな喜びは，もう一人の息子アルマが重傷を負ったにもかかわらず生きていたということであった。彼はマスケット銃で腰を吹き飛ばされていた。アマンダはほとんどの男たちが死傷した中で，主に助けを求めてこう祈った。

「ああ，天のお父様，わたしは何をしたらよいのでしょう。あなたはかわいそうなわたしの傷ついた息子を御覧になっています。また，わたしに何の経験もないことを御存じです。天のお父様，何をしたらよいかお教えください。」彼女は「主の声によって導かれたように思った」と言っています。その声は灰汁（あく）を作り，傷口を洗うように告げた。次に彼女はにれの木で軟らかな湿布剤を作り，それを傷に塗った。そして次の日，彼女は瓶に入れたバルサムを傷口に注いだ。アマンダは息子にこう言ったという。「『アルマ，主があなたの腰を作ってくださったの。分かるでしょう。』

『はい，お母さん。』

『主は腰のあった場所に何か作ってくださるのよ。信じられる？』

『主はそんなことできるの。』息子は無邪気にそう尋ねました。

『そうよ。主はわたしに示現で示してくださったの。』

わたしは息子を腹這いに寝かせました。そしてこう言いました。『この姿勢で動かないでいるのよ。そうすれば主があなたに新しい腰を作ってくださるからね。』

アルマは5週間，腹這いのままで寝ていました。そしてすっかり快復し，吹き飛ばされた関節に代わって軟骨ができてきました。」[20]

アマンダたちは愛する者たちの埋葬というつらい仕事をしなければならなかった。力仕事のできる男性は少ししかいなかったからである。その中に，ブリガム・ヤングの弟のジョセフ・ヤングがいた。暴徒が戻って来ることを恐れた彼らには，従来の墓を掘っている時間がなかった。そこで遺体を水の出なくなった井戸に投げ込み，そこを共同墓地にしたのである。ジョセフ・ヤングは幼いサディアスの遺体を運ぶのを手伝ったが，そのときの様子は次のようなものであった。「彼はその男の子をこの恐ろしい墓に投げ込むことはできませんでした。」ミズーリへの旅の間「おかしな男の子」であるサディアスと一緒に遊び，しかも優しい心の持ち主であったジョセフ・ヤングには，遺体を井戸に投げ込むことなどできなかったのである。そこでアマンダがサディアスをシーツにくるみ，翌日，彼女ともう一人の息子ウィラードが遺体を井戸に葬った。そして，その恐ろしい光景を覆うかのように，土とわらが投げ入れられた。[21]

アダム・オンダイ・アーマンでは，ミズーリ住民に射殺されそうになった20歳のベンジャミン・F・ジョンソンが，奇跡的に救われた。ベンジャミンは捕らえられて，野外のキャンプファイヤーの前で極寒の中8日間軟禁されていた。彼が丸太の上に座っていると，荒くれ男がライフルを持ってやって来てこう言った。「モルモンをやめちまいな。さもないと撃ち殺すぜ。」ベンジャミンがはっきりと断ると，その男はベンジャミンに銃を向け，引き金を引いた。ところが，銃は不発だった。すると男はのろいの言葉を口にし，「20年銃を扱ってるが，こんなことは初めてだ」と言って安全装置を確かめると，もう一度弾丸を込めてねらいを定め，引き金を引いた。しかし，また不発だった。彼はもう一度同じことを繰り返したが，結果は同じだった。そばに立っていた男が「銃の掃除をしろよ。そしたらこんな男はいちころさ」と言った。そこで男は4度目を試みた。今度は新しい弾薬を詰めた。それに対してベンジャミンはこう言った。「今度やったら暴発しておまえが死ぬぞ。」すると住民の一人の声が聞こえた。「その男を撃つのはよした方がいい。」[22]

預言者，監獄に拘留される

ハウンズミルでの虐殺の直後，預言者ジョセフ・スミスと他の指導者たちが州軍に捕らえられた。そして軍法会議が開かれ，預言者と彼に従う人々が翌朝，ファーウェストの町の広場で銃殺されることに決まった。しかし，この銃殺刑を拒否したのが，州軍のアレクサンダー・W・ドニファン将軍である。彼はその判決を「冷血な殺人」と呼び，州軍の指揮を執っていた将軍に対して，なおもジョセフたちを殺害しようとすれば「おまえをこの世の法廷に訴えよう。神の力を借りて」[23] と述べた。

預言者たちはまずインディペンデンスに連行され，次いでレイ郡のリッチモンドに移送され，裁判を受けるために拘留された。その中にパーリー・P・プラットがいた。

ある晩のこと，看守たちが預言者たちを侮辱するような話を始めた。末日聖徒への強姦（ごうかん）や殺人，強奪の話である。パーリーは預言者が自分の横でその話を聞いていることを知っていた。すると突然，預言者は立ち上がって看守たちをとてつもない力で叱責（しっせき）した。パーリーはこう記している。

「『**黙れ**。地獄の底から這（は）い出てきた悪魔め。イエス・キリストの御名（みな）によっておまえたちを叱責し，口をつぐむように命じる。もう一刻たりともそのような言葉を聞いてはおられない。そのような話をやめよ。さもなければ，**即刻**，おまえたちかわたしのどちらかが死ぬことになる。』

ジョセフはそこで話をやめました。すっくと立ったさまは威厳に満ちていました。鎖につながれ，武器もありません。でも彼は冷静で落ち着き払い，天使のような威厳をたたえていました。そして，恐れてしりごみする看守たちを見下ろしていたのです。彼らは銃を床に投げ出し，ひざを抱えて部屋の隅にうずくまり，赦（ゆる）しを請いました。そして交代の時間まで黙ったままでした。」

パーリーはこう続けている。「わたしは王や廷臣たち，王座や王冠，王国に命運を決するために集まる皇帝たちを心に描いていました。しかしミズーリのだれも知らない田舎の村の監獄の中で深夜わたしが目にしたのは，鎖につながれて立つ，こうごうしさと威厳とが一つに溶け合った人の姿でした。」[24]

法廷での審問を終えた後，ジョセフ・スミスとハイラム・スミス，シドニー・リグドン，ライマン・ワイト，ボールドウィン・マクレー，アレクサンダー・マクレーはクレイ郡のリバティーにある監獄に護送された。到着したのは1838年12月１日である。預言者はそのときの模様をこう語っている。「わたしたちは昼夜を問わない厳重な監視の下に置かれました。壁も扉も二

リバティーの監獄に監禁されていた預言者ジョセフ・スミスは，
苦難にあえぐ聖徒たちのために主に願い求め，
教義と聖約第121，122，123章に記録されている指示と慰めを受けた。

重です。良心の自由も許されないような状況でした。食物もわずかです。……わたしたちは，わらを敷いた床に寝かされました。体を温めてくれる毛布もありません。……時折訪れる判事がわたしたちは無実なので解放されるべきだとまじめな顔で言ってはくれるのですが，暴徒を恐れるあまり，わたしたちのために法律を執行しようとはしませんでした。」[25]

イリノイへの脱出

預言者が拘留されている間，8,000人以上の聖徒が撲滅令から逃れるためにミズーリ川を東へ渡り，イリノイへ入った。彼らは冬の厳寒の中，家を後にしなければならなかった。当時十二使徒定員会会長であったブリガム・ヤングがその指揮を執り，可能な限りの援助を行ったにもかかわらず，彼らの苦難は大変なものだった。この脱出に加わったたくさんの家族の中にジョン・

ハマー家がいた。ジョンはそのときの様子をこう振り返っている。

「当時の苦しみや悲惨な光景は忘れられません。……わたしたちの家族には荷車が1台と目の見えない馬1頭しかありませんでした。その1頭の馬で荷車を引かなければなりません。そこでわたしたちは，持っていた荷車を，馬を2頭持っていた兄弟の小さくて軽い荷車と交換しました。その方がお互いに好都合だったからです。わたしたちはその小さい荷車に衣類や寝具，コーンミール，それにかき集めた乏しい食糧を積んで，いてつく冬の道を徒歩で進みました。食事をするのも眠るのも青天井の道端。でも，夜の凍りつくような寒さや突き刺すような風も，わたしたちが逃げて来たあの人間の姿をした悪魔に比べれば決して残酷でも卑しくもありませんでした。……わたしたちの家族もほかの多くの家族もほとんど素足で，凍傷を防ぐために，また凍った地面で傷がつかないように，布で足を覆った人もいました。しかし，それはあまり役に立たず，わたしたちの通った凍った道には，血の跡が点々と付いていました。わたしの家族で靴を持っていたのは母と姉だけですが，当時は好意的だったイリノイ側の川岸に着くまでにはすり減って使えなくなっていました。」[26]

聖徒たちがミズーリ州から追放されていたとき，預言者は何もできないまま拘留された状態であった。彼の嘆きがどれほどのものであったかは，教義と聖約第121章に記録された主への嘆願の祈りから推し測ることができる。

「おお，神よ，あなたはどこにおられるのですか。あなたの隠れ場を覆う大幕はどこにあるのですか。

あなたの御手（みて）はいつまでとどめられ，あなたの目，まことにあなたの清い目はいつまで永遠の天からあなたの民とあなたの僕（しもべ）たちへの不当な扱いを眺め，またあなたの耳はいつまで彼らの叫び声で貫かれるのですか。」（教義と聖約121：1－2）

それに対して主は，次のような慰めの言葉を授けてくださった。「息子よ，あなたの心に平安があるように。あなたの逆境とあなたの苦難は，つかの間にすぎない。

その後，あなたがそれをよく堪え忍ぶならば，神はあなたを高い所に上げるであろう。あなたはすべての敵に打ち勝つであろう。

あなたの友人たちはまことにあなたの傍らに立っている。そして，彼らは温かい心と親しみのある手をもって，再びあなたを歓呼して迎えるであろう。」（教義と聖約121：7－9）

この主の言葉は1839年4月に文字どおり成就した。6か月に及ぶ不法拘留

の後，彼らはミズーリ州デイビーズ郡ガラティンへ，次いでブーン郡コロンビアへ移送されることになった。ところが保安官ウィリアム・モーガンは「ブーン郡には決して入れないように」との指示を受けた。これは上級職のだれかが，確たる証拠がない状態で裁判に持ち込むことにより面目を失うことを避けて，ジョセフたちを放免するよう指示をしたのである。ジョセフたちは馬を2頭買うことを許され，警備の手も離れた。ハイラム・スミスはこう言っている。「わたしたちはイリノイ州に向かいました。そして9日か10日後に無事アダムズ郡クインシーに着き，家族と再会しました。貧しい状態でしたが，皆元気でした。」[27] 彼らはそこで「温かい心と友情の手」に迎えられたのであった。

ウィルフォード・ウッドラフは預言者との再会の様子を次のように記している。「わたしは再びジョセフ兄弟と握手を交わす特権を得ました。……彼は大いに喜んでわたしたちにあいさつしました。……彼はいつもどおり素直で，明るく，親しげでした。わたしたちも大いに喜びました。福音のために苦難を味わった人でなければ，あのような再会がもたらす喜びは理解できないでしょう。」[28] こうして，神は預言者と教会を奇跡的に守られた。そして近代のイスラエルは新天地に再び集合する。彼らの行く手には新たな機会と聖約が待ち受けていた。

ノーブーでの犠牲と祝福

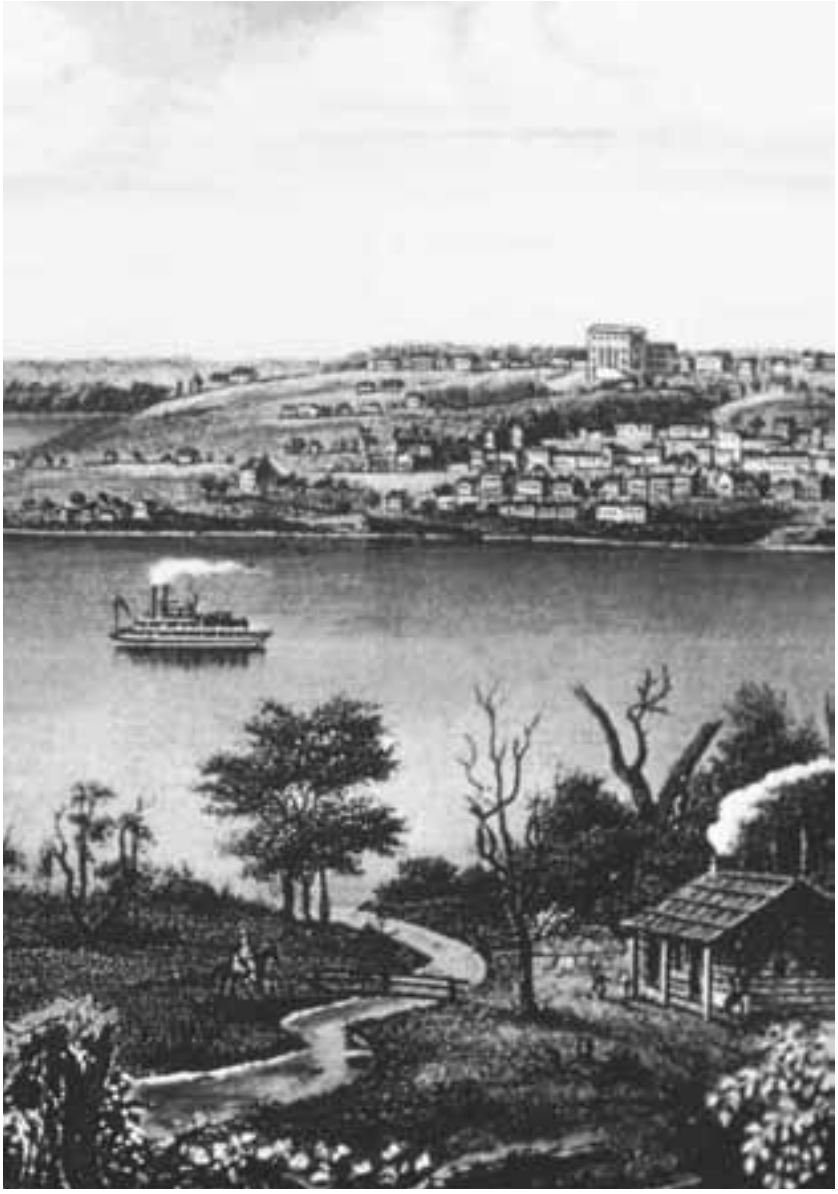
イリノイに移った末日聖徒は，クインシーの町の寛大な市民の温かい歓迎を受けた。そしてジョセフがリバティーの監獄での拘留を解かれて帰還すると，ミズーリ川を35マイル（約56キロ）北方に上った地点に移動した。そこで彼らは大きな湿地帯を水抜きして乾燥させ，ミズーリ川の湾曲部にノーブーという町を築いた。やがてこの町は，聖徒たちが合衆国各地やカナダ，イギリスから集まって来るにつれて，商業都市として活況を呈するようになった。こうして4年もたたないうちに，ノーブーはイリノイ州最大の町の一つに数えられるまでに発展した。

教会員は比較的平安な状態で生活し，預言者が人々の間を歩き回って奉仕の働きができるほどであった。また預言者により何百人もの宣教師が召され，福音を宣（の）べ伝える業に携わった。そして神殿が建てられ，神殿のエンダウメントが授けられ，ワードが初めて設けられ，ステークが設立された。また扶助協会が組織され，アブラハム書の刊行も行われた。そしてたくさんの啓示も授けられた。こうして6年以上の間，聖徒たちは比類ない一致と信仰と幸福を享受し，ノーブーは勤勉と真理の輝きを放つ町となった。

ノーブーの宣教師の犠牲

聖徒たちが家を建て，作物の種をまき始めたころ，多くの者がマラリヤ熱に冒された。悪寒と発熱を伴う感染症である。十二使徒のほとんどとジョセフ・スミス自身もこの病に冒されている。1839年7月22日，預言者は神の力を受けて病床から身を起こした。そして神権の力を用いてまず自分自身と家族を癒（いや）し，次いで家の前で野営をしている人々に元気になるように命じた。こうして大勢が癒された。預言者はテントからテント，家から家へと巡り，すべての人を祝福した。この日は教会歴史の中でも最も偉大な信仰と癒しの日であった。

預言者はこの時期，十二使徒定員会を伝道のためにイギリスに派遣している。また，十二使徒定員会の一員であるオーソン・ハイドはエルサレムに送



聖徒たちはミシシッピ河畔に美しいノーブーの町を建設した。
ノーブー神殿は町を見下ろす所に建っていた。

られ，ユダヤ人ならびにほかのアブラハムの子孫の集合の地としてパレスチナを奉献した。宣教師は合衆国全域とカナダ東部に送られ，アジソン・プラットらは太平洋諸島への召しを受けている。

宣教師として召された兄弟たちは，召しにこたえるのに家や家族を後に残さなければならなかったため，多大な犠牲を払うこととなった。また十二使徒の多くは，マラリヤ熱に冒された状態でイギリスへの伝道の準備をした。症状の重かったウィルフォード・ウッドラフは，食糧も生活必需品もほとんどないままで妻のフィービーを後に残して旅立っている。最年少の使徒であったジョージ・A・スミスはあまりにも病気がひどく，荷車に担ぎ込まれて出発した。それを見ていた一人の男が「墓泥棒をしてきたのか」と尋ねるほどだった。ノーブーを出るときに健康だったのは，妻と子供を伴って伝道に出かけたパーリー・P・プラットと，彼の弟のオーソン・プラット，そしてジョン・テーラーだけであった。しかしテーラー長老も後に発病し，ニューヨーク市に行くまでの間生死をさまようほどであった。

ブリガム・ヤングの病状もひどいもので，助けがなければ少しも歩けない状態だった。同僚のヒーバー・C・キンボールも同様であった。また彼らの妻や子供たちも病の床に伏していた。馬車が家から程近い丘の頂上に差しかかったとき，二人の使徒は馬車の中で横になっていたが，ヒーバーの提案で何とか体を起こし，帽子を頭上に差し上げて振り，「イスラエル万歳」と3度叫んだ。すると彼らの妻であるメアリー・アンとバイレートは力を得て立ち上がり，ドアの枠につかまりながらこう叫んだ。「さようなら。神の祝福がありますように。」二人の使徒は妻たちが病気で寝ているのではなく立っていたのを見て，喜びと満足のうちに馬車のベッドに戻ったのであった。

伝道の召しを受けた兄弟たちを支えるために犠牲を払いながら，残された家族は陰で信仰を示した。アジソン・プラットがサンドイッチ諸島への伝道に召されたときの様子を，妻のルイザ・バーンズ・プラットはこう説明している。「4人の子供に教育を受けさせ，着る物を用意しなければなりませんでしたが，残されたお金はまったくありませんでした。……初めは気持ちがくじかれる思いでしたが，主を信頼し，病気に勇敢に立ち向かい，夫が伝道に召されるにふさわしかったことを喜ぼうと思いました。」

ルイザと子供たちは，桟橋（さんばし）まで見送りに行った。帰宅してからの様子をルイザはこう語っている。「わたしたちは悲しみでいっぱいになりました。それから程なく雷の音がし始めました。向かいに住んでいる家族の家は雨漏りがしますし，あまり丈夫ではありません。それで家族全員がわたしたちの家

に避難して来ました。来てくれてほんとうに感謝しました。わたしたちに慰めの言葉をかけ，一緒に賛美歌を歌ってくれました。また兄弟はわたしたちとともに祈り，嵐(あらし)が終わるまでいてくれました。」[1]

アジソンが出発してからすぐ，下の娘が天然痘に感染した。天然痘は感染力が非常に強いので，神権者もプラット家にはなかなか来られない。そこでルイザは信仰を込めて主に祈り，「熱を叱責(しっせき)した」。すると11個あった発疹(はっしん)が娘の体から消え，再発することはなかった。そして数日後には熱も下がった。ルイザはこう書いている。「わたしは天然痘に詳しい人に娘を見せました。彼はわたしが信仰で病気を打ち負かしてしまったのですねと言った。」[2]

そうした犠牲の下に伝道に出た宣教師は，たくさんのものを教会にもたらした。また，改宗した人々も驚くべき信仰と勇気を示している。メアリー・アン・ウェストンはイギリスでウィリアム・ジェンキンズの家族の家に下宿しながら洋裁を学んでいた。そしてジェンキンズ兄弟が改宗したので，ウィルフォード・ウッドラフが家族に会いにやって来た。そのとき，在宅していたのはメアリー・アンだけであった。ウィルフォードは暖炉のそばに座り，「弱き人を恐れ，受けた御霊(みたま)を拒むのか」と歌った。メアリー・アンは彼が歌うのを見ていたが，そのときのことをこう回想している。「彼はとても隠やかで幸せそうでした。わたしは彼が良い人で，彼の説く福音が真実だと感じました。」[3]

教会員とも交わりを深めたメアリー・アンは間もなく改宗し，バプテスマを受けた。回復された福音のメッセージに耳を傾けたのは，家族の中で彼女一人であった。彼女は教会員の男性と結婚したが，彼は教会の集会を妨害しようとした暴徒に打たれた傷がもとで4か月後に死亡し，彼女はたった一人でほかの末日聖徒とともに，家や友人，信じようとしない両親を後に残し，ノーブーに向かった。そして，それが家族との最後の別れとなった。

しかし，彼女の勇気と決意は，後に大勢の人々の生活に祝福をもたらすこととなった。彼女は妻に先立たれたピーター・モーガンと結婚し，ユタ州北部のキャッシュバレーに定住した。彼女はそこで大勢の子供を育てた。子供たちは皆忠実で，教会と彼女の名を誇りにしている。

標準聖典

ノーブー時代，後に高価な真珠に収められることになる幾つかの文書が出版された。モーセの著作の抜粋，アブラハムの書，マタイの証(あかし)の抜粋，ジョセフ・スミスの歴史の抜粋，それに信仰箇条である。これらは主の指示によ

りジョセフ・スミスが書いたり翻訳したりしたものである。

こうして聖徒たちは教会の標準聖典を所有するようになった。聖書，モルモン書，教義と聖約そして高価な真珠である。これら標準聖典は神の子供たちにとって計り知れない価値をもたらすものである。福音の基本的な真理を教え，誠実に求める人々に父なる神と御子イエス・キリストについての知識をもたらすものだからである。また，現代の聖典には，主が預言者を通して授けられた啓示が聖文として追加されている。

ノーブー神殿

ノーブー設立わずか15か月後，大管長会は啓示に従い，「神の神聖な御心（みこころ）に添う祈りの家，秩序の家，神への礼拝の家を建て，その儀式にあずかる」[4]時が来たことを発表した。家族の必要を満たすのもままならなかったにもかかわらず，末日聖徒は指導者の呼びかけに応じ，神殿建設のために時間と財産をささげた。1,000人以上の人々が10日おきに労働奉仕をしている。まだ少女であったルイザ・デッカーは母親が食器とベッドキルトを売って神殿のために献金したことを印象深く覚えている。[5] ほかの末日聖徒は，馬や馬車，牛，豚，穀物を神殿建設のためにささげた。ノーブーの女性たちは小銭を神殿基金としてささげるように求められた。

キャロライン・バトラーは献金するための小銭がまったくなかったが，何かをささげたいと強く思っていた。ある日，馬車で町へ行く途中，水牛が死んでいた。彼女はそれを見て，とっさに神殿へのささげ物を思いついた。彼女は子供たちと一緒に水牛のたてがみを抜き，家に持ち帰った。そして洗ってくしでよくとかし，紡いで粗い毛糸にすると，それで8組の手袋を編んだのである。冬の寒い中で石を切る人たちに使ってもらうためだった。[6]

ハイラム・スミスの妻であるメアリー・フィールディング・スミスがイギリスの末日聖徒の女性たちにあてて手紙を書いたところ，彼女たちは1年で5万枚の1ペニー硬貨を集め，重さ434ポンド（約197キロ）に上る硬貨がノーブーに送られた。農夫は荷車や荷車を引く牛馬を，またある者は土地を売って建築委員会に献金した。時計や銃もささげられた。イリノイ州ノーウェイの聖徒たちは100頭の羊をノーブーの神殿委員会に送っている。

ブリガム・ヤングはこう回想する。「わたしたちはノーブー神殿建設のために身を粉にして働きましたが，当時は働いてくれる人々に出すパンやその他の食糧にも事欠く時代でした。」しかしブリガム・ヤングは神殿基金を担当していた人々に，小麦粉をすべて配給するように勧めた。主が助けてくだ

さるとの確信があったのである。少しして，シシリーからの改宗者であるジョセフ・トロントがノーブーにやって来た。そして2,500ポンド（約227キロ）分の金（きん）を幹部の兄弟たちにささげたのである。[7] トロント兄弟が半生かけてためたその金は小麦粉やその他の必需品の購入に充てられた。

聖徒たちがノーブーに到着して間もなく，主は預言者ジョセフ・スミスを通じて，福音を聞くことなく世を去った人々にもバプテスマが施せることを啓示された（教義と聖約124：29－39参照）。多くの聖徒たちは，死者が地上で福音を受け入れた人々と同じ祝福を受けられるとの約束に大いなる慰めを得た。

また預言者は，今日（こんにち）神殿のエンダウメントと呼ばれる教えと聖約と祝福に関する重要な啓示も受けている。この神聖な儀式は，聖徒が「昇栄してエロヒムとエホバの前にともに住む」備えとしての「完全な祝福を確かに得させる」[8] ものである。エンダウメントを受けた後，夫婦は神権の力によりこの世から永遠にわたって結び固められた。この世での自分に与えられた時間が短いことを悟ったジョセフ・スミスは，神殿がまだ建設中であったにもかかわらず，彼の赤れんがの店の２階で，選ばれた忠実な支持者にエンダウメントを授け始めた。

預言者ジョセフ・スミスが殉教し，少しの間ノーブーを離れなければならなかったにもかかわらず，聖徒たちの神殿完成への決意は高まるばかりであった。そして，未完成の神殿の屋根裏部屋がエンダウメントの儀式を行う場所として奉献された。聖徒たちはこの神聖な儀式を受けることに並々ならぬ意欲を示し，ブリガム・ヤングやヒーバー・Ｃ・キンボールなど十二使徒たちは昼夜を問わず神殿にこもり，睡眠は４時間しか取らなかった。マーシー・フィールディング・トンプソンは神殿衣の洗濯とアイロンかけ，ならびに料理の担当だったが，彼女もまた神殿に泊まり込み，翌日の儀式の準備のために徹夜をすることもしばしばあった。ほかの教会員も同じように献身的に働いた。

なぜ聖徒たちは，すぐに明け渡さなければならない神殿の完成をこのように急いだのだろうか。ノーブーを去るまでにエンダウメントを受けた末日聖徒の数は約6,000人である。彼らはやがてやって来る西部への移住に思いをはせながら，神殿の儀式を通して信仰を高め，家族が永遠に結び固められるとの知識を得ることにより心の安らぎを得たのである。

扶助協会

ノーブー神殿の建設中，町で最も裕福な人物の一人であるハイラム・キンボールの妻，サラ・グレインジャー・キンボールがマーガレット・A・クックという針子を雇った。主の業のために貢献したいと思ったサラは布地を寄付し，それで神殿で働く人のシャツを作ろうと考えたのである。マーガレットがそれに同意して働くことになった。やがてサラの隣人も何人かこのシャツ作りに加わり，キンボール家の居間に集まった全員で正式に組織を作ることになった。この新しい組織の規約を書くように依頼されたのが，エライザ・R・スノーである。

エライザが完成した規約を預言者ジョセフ・スミスに見せると，ジョセフは今まで見たことのないすばらしい規約だと言った。しかし彼は，女性が貢献できることについて，もっと視野を広めるべきだと感じ，姉妹たちと新たな集会を開いてノーブー女性扶助協会を設立した。そして，預言者の妻であるエマ・スミスが初代の会長となった。

ジョセフは姉妹たちにこう語っている。「この組織は，神が確立された秩序，すなわち指導者として召された者を通して教えを受けるためにあります。わたしは今，神の御名(みな)により，皆さんに扶助協会を確立する責任を与えます。この組織は喜びを得るでしょう。今より後，知識と英知が流れ出ることでしょう。今日(きょう)はこの協会の躍進の日々の始まりです。」[9]

扶助協会が設立されるやいなや，扶助協会の委員会はノーブー中の貧しい人々を訪問し，必要なものを援助し，援助のための基金を集めて回った。現金による献金や，食糧や寝具類の売り上げは，貧しい子供たちの教育費に充当された。また，亜麻，羊毛，毛糸，屋根板，石けん，ろうそく，錫(すず)の細工品，宝石，バスケット，キルト，毛布，たまねぎ，りんご，小麦粉，パン，クラッカー，肉などが納められ，困っている人々の援助のために用いられている。

扶助協会の姉妹たちは，貧しい人々を助けるだけでなく礼拝も共にした。エライザ・R・スノーは扶助協会のある集会での様子をこう書いている。「集まったすべての人が立って話をし，主の御霊(みたま)が清い流れのように一人一人の心を洗った。」[10] 姉妹たちは互いのために祈り，信仰を深め合い，自分たちの生活や財産をシオンの大義を確立するためにささげたのである。

殉　教

ノーブーでの数年間は聖徒たちにとって喜びの日々ではあったが，やがて再び迫害が始まり，ジョセフ・スミスとハイラム・スミスの殺害によってそれは頂点に達した。これは決して忘れることのできない，暗く悲しい時である。ルイザ・バーンズ・プラットは，殉教について耳にしたときの気持ちをこう記している。「静かな満月の夜でした。死の夜にふさわしく，すべてがその夜を厳粛なものにしているようでした。兄弟たちを呼び集める指導者の方々の声が遠くから聞こえてきます。それは弔いの鐘の音のように心に響いてくるのでした。姉妹たちは肩を寄せ合いながら，涙を流したり祈ったりしています。殺人者たちに重い罰をと望む者もいれば，その出来事に神の御手を認める者もいました。」[11]

ルイザ・バーンズ・プラットのように，多くの末日聖徒は1844年6月27日の出来事を涙と落胆の時として振り返っている。殉教は教会の初期の歴史の中でも最も悲しむべき出来事であった。しかし，それはまったく予期せぬ出来事ではなかった。

1829年の初めから少なくとも19回，ジョセフ・スミスは自分がこの世を平穏無事に去ることはないと語っている。[12] ジョセフはいつの日か敵に命を奪われることを分かっていたが，日時は知らなかった。1844年の春が過ぎて夏に入るころ，教会内外の敵がジョセフを亡き者にしようと暗躍していた。近郊の新聞の編集者でハンコック郡の反モルモン政党指導者であるトーマス・シャープなどは，預言者ジョセフの殺害を公に呼びかけている。住民グループや背教者，住民指導者が共謀して，預言者を殺すことにより教会そのものを滅ぼそうとしていたのである。

イリノイ州知事のトーマス・フォードはジョセフ・スミスに書簡を送り，非モルモンの陪審員により市議会議員を騒乱罪の容疑で裁判にかけるよう主張し，その方法以外に住民を満足させることはできないと述べた。知事は議員の身柄は完全に守ることを約束したが，預言者は知事がその約束を守るとはまったく信じていなかった。しかし，ほかに取るべき方法がないことを知った預言者は，まったくの無実であることを知りつつも兄のハイラム，ジョン・テーラーらとともに逮捕に応じた。

20マイル（約32キロ）離れたカーセージでの公判の席に向かうためにノーブーを去る備えをしていたジョセフには，これが家族や友人との最後の別れであることが分かっていた。こう預言している。「わたしはほふり場に引かれて行く小羊のように行く。しかし，わたしは夏の朝のように心穏やかである。」[13]

カーセージの監獄の殉教の場面。床の中央に倒れているハイラム・スミスは即死だった。左下にいるジョン・テーラーは重傷を負った。ジョセフ・スミスは窓に向かって走ったところを撃たれて死んだ。暖炉のそばのウィラード・リチャーズは無傷だった。

預言者が出発すると，3年以上もの間ジョセフの農場で働いていたB・ロジャーズと二人の使用人が野原を抜けて牧場の囲いのさくに腰を下ろし，友人であり預言者であったジョセフが通るのを待っていた。ジョセフは彼らの傍らで馬を止め，一緒にいた州兵にこう言った。「皆さん，これがわたしの農場で，ここにいるのが農場で働いてくれている人たちです。この人たちはわたしを好いてくれています。わたしもこの人たちが好きです。」使用人一人一人と握手した預言者は再び馬にまたがり，死の旅路へと歩みを進めて行ったのであった。[14]

ウェールズからの改宗者ダン・ジョーンズは，カーセージの監獄でジョセフと合流した。殉教の前日の1844年6月26日，ジョセフは銃声を聞いてベッドから下り，ジョーンズの近くに身を伏せた。そしてジョーンズにこうささやいた。「あなたは死ぬのが怖いですか。」「わたしは主の業に携わっていますから，死は恐怖ではありません。」ジョーンズはそう答えた。すると，預

言者はこう預言した。「あなたは死ぬ前にウェールズに行き，召された伝道の業を全うするでしょう。」[15] ダン・ジョーンズが後にウェールズで立派に伝道の業を行ったために，今日（こんにち）ウェールズでは何千もの人々が教会から祝福を受けている。

1844年6月27日，午後5時を少し回ったころ，顔にペンキを塗った約200人の暴徒がカーセージの監獄に突入した。そして銃を放ち，ジョセフと兄のハイラムを殺害し，ジョン・テーラーに重傷を負わせた。しかし，ウィラード・リチャーズだけは無傷だった。「モルモンが来るぞ」との声で暴徒は逃げ，カーセージの住民のほとんども姿を消した。ウィラード・リチャーズはジョン・テーラーの傷の手当てをし，二人で殺害された指導者の死を悼んだ。ハイラムの遺体は監獄の中だったが，窓から落ちたジョセフの遺体は，外の井戸の傍らに横たわっていた。

殉教の場に最初に駆けつけた一人が預言者の弟サミュエルである。彼はほかの人々とともにウィラード・リチャーズを助け，遺体をノーブーに運ぶ準備をした。

そのころイリノイ州ワルソーでは，教会員のジェームズ・カウリー家族が夕食の仕度をしていたが，町の方で騒々しい物音がするので14歳のマサイアスが人だかりのする方に行ってみた。すると，その騒ぎの中心人物がマサイアスを見つけ，母親のところに帰れと命令した。教会員でない少年たちが追いかけて来て，がらくたを投げつけてきたので，マサイアスは隣家の裏庭を横切って家に逃げ帰った。

騒ぎが静まったのを見計らってマサイアスが川に水をくみに行くと，暴徒の仲間が彼を見つけ，酔っ払った仕立て屋に金を握らせてマサイアスを川に投げ込ませようとした。マサイアスが水をくむのに立ち止まると，仕立て屋がマサイアスのえり首をつかんでこう言った。「貴様……モルモン小僧め，おぼれさせてやる。」

マサイアスはそのときの様子をこう語っている。「なぜわたしをおぼれさせるのか，何か悪いことをしたのかとわたしは尋ねました。すると彼は『いや，おぼれさせはしない……おまえはいい子だ。帰っていいぞ』と言うのです。」その夜，暴徒たちはカウリー家に3度火をつけようとしたが，失敗に終わった。信仰と祈りにより，カウリー家は守られたのである。[16] マサイアス・カウリーは成長して忠実な教会員として生涯を送った。そして彼の息子マサイアスと孫のマシューは後に十二使徒定員会会員として奉仕している。

イリノイ州のトーマス・フォード知事は，殉教についてこう書いている。

「スミス兄弟の殺害は，多くの者が考えたようなモルモンの終焉や離散どころか，逆にかつてないほどの結束を彼らに与え，自らの信仰に対する新たな確信をもたらすこととなった。」[17] フォードはこうも書いている。「パウロのように才能に恵まれた者，その雄弁により何千もの人々を魅了することのできるすばらしい雄弁家が……〔モルモン教会に〕新たな生命を吹き込み，殉教したジョセフの名を人々の心に響かせることに成功するであろう。」フォードはこのことが起こるのを恐れていた。自分の名前がピラトやヘロデのように「子々孫々まで悪く言われる」[18] ことを恐れたのである。しかし，このフォードの恐れは現実のものとなった。

傷の癒えたジョン・テーラー大管長は後に，殺された指導者のために追悼の言葉を書いた。それが現在の教義と聖約第135章となっている。こうある。「主の預言者であり聖見者であるジョセフ・スミスは，ただイエスは別として，この世に生を受けた他のいかなる人よりも，この世の人々の救いのために多くのことを成し遂げた。……彼は神とその民の目に偉大な者として生き，偉大な者として死んだ。そして，昔の，主の油注がれた者のほとんどがそうであったように，彼は，自らの血をもって自分の使命と業を証明したのである。彼の兄ハイラムも同様であった。彼らは生前に分かたれることはなく，また死後も離れることはなかった。……彼らは栄光のために生き，栄光のために死んだ。そして，栄光が彼らの永遠の報いである。」（教義と聖約135：3，6）

大管長会の継承

預言者ジョセフとハイラム・スミスがカーセージの監獄で殺害されたとき，十二使徒定員会その他の教会指導者の多くは伝道の旅に出ており，ノーブーを留守にしていた。したがって，ジョセフとハイラムの死を知ったのは数日後のことである。知らせを聞いたブリガム・ヤングは，民を導くために必要な神権の鍵が教会にあることを知っていた。これらの鍵は，十二使徒定員会に授けられていたからである。しかし，ジョセフ・スミスに代わって主の預言者，聖見者，啓示者になるのはだれか，すべての教会員が理解していたわけでなかった。

第一副管長だったシドニー・リグドンがペンシルベニア州ピッツバーグから戻ったのは，1844年8月3日のことだった。シドニーはジョセフが殉教する1年くらい前から預言者の勧告とは異なった道を歩むようになり，教会から離れていた。彼はすでにノーブーに戻っていた十二使徒定員会の会員3人と会うのを断り，代わりに日曜日の礼拝集会に集まった人々に向かって話を

した。その内容は，彼が示現を見たこと，そしてジョセフ・スミスの跡を継ぐ者はだれもおらず，教会の後見人が召されるべきであること，そしてその後見人は自分であるというものであった。彼の主張を支持する聖徒はほとんどいなかった。

十二使徒定員会会長のブリガム・ヤングがノーブーに戻ったのは，1844年8月6日になってからのことだった。ヤングは，だれが教会を導くかについては，「神がどう言われるか」だけを知りたいと語った。[19] そこで1844年8月8日木曜日に，十二使徒会は集会を開いた。午前の会ではシドニー・リグドンが1時間以上話をしたが，支持はほとんど得られなかった。

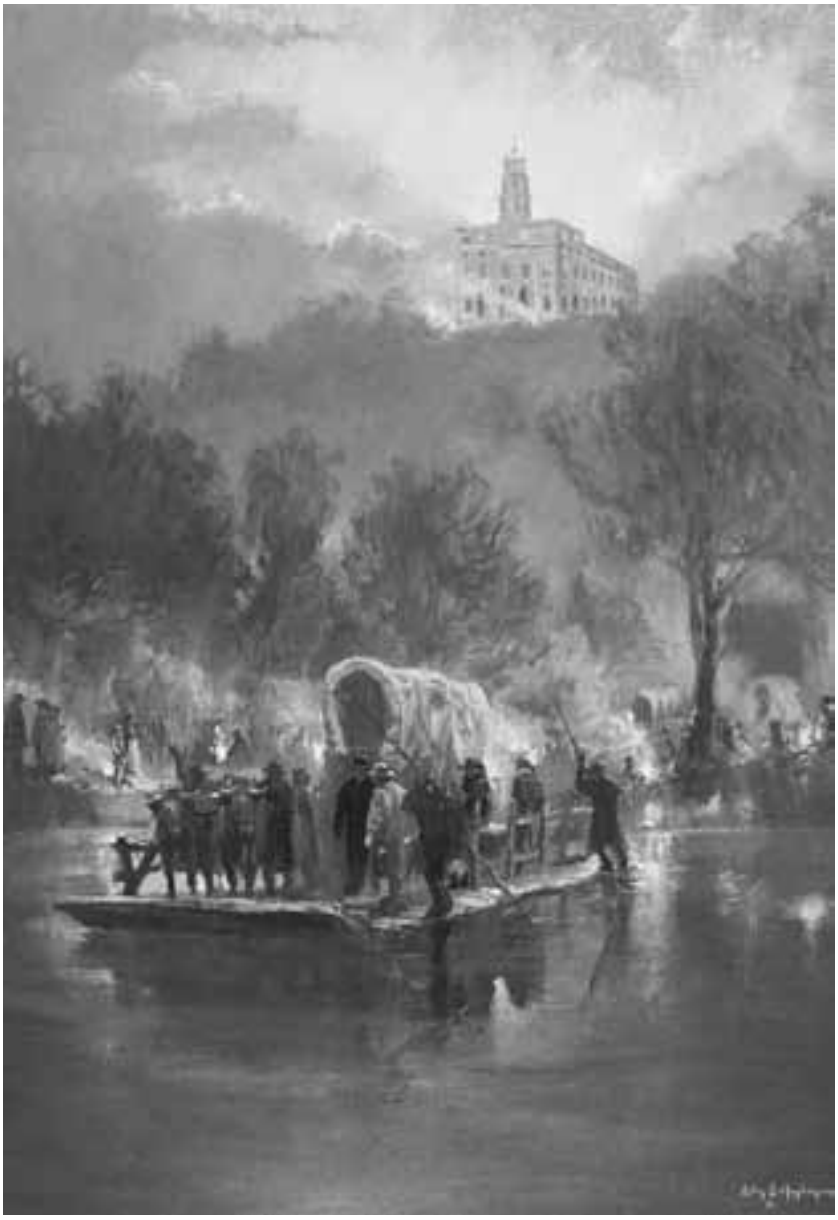
次にブリガム・ヤングが短く，聖徒たちの心を慰める話をした。そのときの様子をジョージ・Q・キャノンはこう回想している。「あれはジョセフ自身の声でした。人々の目には，まるでジョセフ自身が皆の前に立っているように映ったと思います。」[20] ウィリアム・C・ステインズはブリガム・ヤングが預言者ジョセフのような声で話したと証する。「わたしは彼〔ジョセフ〕だと思いました。声を聞いた数千人の人たちもそう思ったことでしょう。」[21] ウィルフォード・ウッドラフもこの驚くべき出来事をこう振り返る。「もしもこの目でブリガムを見ていなかったら，『あれはジョセフ・スミスではなかった』と言われても，とうてい信じられなかったであろう。この二人と面識のある人であれば，皆このことを証できるはずである。」[22] この奇跡的な現れは大勢の人々に目撃され，ジョセフ・スミスの跡を継ぐ教会の指導者として，主がブリガム・ヤングを選ばれたことが明らかになったのである。

午後の会ではブリガム・ヤングが再び話をし，ジョセフ・スミスが使徒たちを，全世界の神の王国の鍵を持つ者として聖任していたことを証した。そして彼は，十二使徒会に従わない者は栄えないこと，神の王国の建設に当たっては使徒だけが勝利を収めることを預言したのである。

ブリガム・ヤングは自分の話の後でシドニー・リグドンに話の機会を与えたが，シドニーは辞退した。そこで，ウィリアム・W・フェルプスとパーリー・P・プラットの話の後でブリガム・ヤングがもう一度話をした。ブリガムはノーブー神殿を完成して，荒れ野に旅立つ前にエンダウメントを受けるように命じ，聖文の大切さについて話した。また，ジョセフ・スミスへの愛と預言者の家族への思いを述べた。その後聖徒たちは，全会一致で十二使徒会を教会指導者として支持したのである。

教会の大管長としての権利を主張した者はほかにも少数いたが，ほとんどの末日聖徒にとって継承にかかわる危機は去った。先任使徒であり十二使徒

定員会の会長であるブリガム・ヤングは民を導く者として神により選ばれた者となり，民は一致して彼を支持したのである。



聖徒たちは暴徒のために愛するノーブーの町を離れなければならなかった。

信仰込めて一歩ずつ

ノーブーを去る準備

教会の指導者は，すでに1834年の時点で聖徒たちを西部のロッキー山中に移住させ，平安な生活を送らせようと考えていた。そのため毎年，偵察隊を出したり地図を見たりしながら，適切な場所を物色していたのである。したがって1845年には，西部に関する当時の最新情報を手にしていた。

ノーブーでの迫害が激しくなるにつれて，聖徒たちの移住は現実味を帯びてくる。1845年の段階では，その準備が盛んに行われていた。この脱出のために，100人，50人，10人の長が聖徒たちを導くために召された。そして100人のグループには最低一つの荷車製作所が設けられ，車大工や大工，建具職人が夜遅くまで働いて荷車作りをした。またグループのメンバーは遠く東部まで鉄を買いに出かけ，旅に必要な各種材料や新しいシオンを開拓するための農機具を作った。家族は食糧や日用品を集め，容器に乾燥果物や米，小麦粉，薬品などを詰めた。こうして同じ目的のために協力して働いた結果，短時間で予想以上の準備ができた。

冬期移住の試練

ノーブー脱出の開始は，もともと1846年４月となっていた。しかし，州軍が聖徒たちの西部移住を阻止するという話があったため，十二使徒をはじめとする市民指導者が1846年２月２日に急きょ会議を開き，すぐに移住を開始することを決定した。そして，２月４日には第一陣が出発したのである。こうしてブリガム・ヤングの指揮の下，第一陣の聖徒たちは意気揚々と旅を始めた。しかし，この第一陣は大きな試練に見舞われることになる。定住キャンプ地で休みを得るまで，そうとう長い距離を移動しなければならなかったが，厳しい寒さと例年にない春の長雨に悩まされたのである。

迫害から逃れるため，何千人もの聖徒たちがまず川幅の広いミシシッピ川を渡り，アイオワに入らなければならなかった。旅の初期の段階から恐ろしい出来事が起こった。牛が足でけって穴を開けたために船が浸水し，乗って

いたたくさんの聖徒たちが川に投げ出されたのである。目撃した人の話では，聖徒たちは羽毛ベッドや棒切れ，「そのほかつかまれるものなら何にでもつかまっていました。そして冷たい水にもてあそばれるかのように波間に見え隠れしていました。……荷車の上に登る人もいました。荷車は沈まないので少しは楽なようでした。また乗っていた牛は船が出た方の岸に泳ぎ着きました。」[1] 最終的には全員が別の船に救助され，対岸に渡ることができた。

最初の渡船から2週間後，川はしばらくの間氷結した。氷は滑りやすいものの，荷車や牛が乗っても割れず，楽に川を渡れるようになった。しかし，徒歩で旅をする聖徒たちに，寒気は大きな苦しみをもたらした。対岸の野営地であるシュガー・クリークでは吹雪が続き，8インチ（約20センチ）の積雪があった。しかも，雪が解けると道はぬかるんだ。テントや荷車，にわか作りのシェルターで指導者の命令を待つ2,000人の聖徒たちを，厳しい自然は上からも下からも周囲からも束になって悲惨な状況に追い込んでいったのである。

西部への旅の中で最も困難だったのは，初期のこのアイオワを通過する時点であったと思われる。ホセア・スタウトはこう記録している。「夜は寝具で仮のテントを作った。妻は起き上がれず，小さな息子は高熱で意識がもうろうとしていた。」[2] ほかの多くの聖徒たちも同様の苦しみを味わっている。

すべては善し

信仰と勇気と決意があったからこそ，聖徒たちは寒さと飢えと愛する者の死を乗り越えて旅を続けることができたのである。ウィリアム・クレイトンはノーブーを出発する最初のグループの一員に選ばれたが，1か月後に出産をひかえた妻ディアンサをその両親のもとに残して出発しなければならなかった。ぬかるみに足を取られ，厳寒の中で野営をしながら，クレイトンはディアンサのことを思って神経をすり減らす毎日を送っていた。2か月たっても出産の知らせは来ない。しかし，ついに「丸々と太った男の子が産まれた」というううれしい知らせが届いた。クレイトンはこの知らせを聞くやいなや，座って一つの曲を書いた。その曲はクレイトンにとって特別な意味を持つ曲となったが，それだけでなく，世代を越えて教会員を奮い立たせる感謝の賛美歌となったのである。この曲こそ「恐れず来たれ，聖徒」で，その有名な歌詞には，逆境のさなかでこれを歌ったクレイトン自身やほかの何千人もの聖徒たちの信仰が込められている。「すべては善し，すべては善し。」[3] 後に続く大勢の聖徒たちも含めて，聖徒たちは，神の王国のためにささげた犠牲と従順の報いとして，喜びと平安を見いだしたのである。

ウィンタークォーターズ

ノーブーからアイオワ西部までの310マイル（約496キロ）を旅するのに，聖徒たちは131日かかっている。聖徒たちはこのアイオワ西部の地で，1846年から1847年にかけての冬を越し，ロッキー山中への旅の備えをすることになる。それまでの旅で聖徒たちはたくさんのことを学んだ。それがその後の大平原の旅に生かされ，彼らは111日で旅を終えている。

聖徒たちの居住地はミズーリ川の両岸に長く広がり，その中心は西岸のネブラスカ側のウィンタークォーターズだった。ウィンタークォーターズは一躍3,500人の教会員の住む町となり，聖徒たちは丸太小屋や，柳の枝と土で作った壕（ごう）に住んだ。また，ミズーリ川のアイオワ側であるケインズビルにも2,500人が住んだ。しかし，ミズーリ川両岸でのこの生活はそれまでの旅と同様過酷なものであった。夏はマラリヤ熱，冬になって新鮮な食物が手に入らなくなると，コレラや壊血病，歯痛，夜盲症，そしてひどい下痢が聖徒を悩まし，何百人もの死者が出た。

しかし，それでも日々の生活は続いていく。女性たちは掃除や洗濯，アイロンかけ，キルト作り，手紙書き，乏しいながらも食事の準備，家族の世話に追われていたとメアリー・リチャーズは言う。メアリーの夫サミュエルは当時スコットランドに伝道に出ていた。彼女はウィンタークォーターズでの人々の往来を明るいタッチで記録している。その中には教義的な話し合いやダンス，教会の集会，パーティー，辺境の地で人々の信仰が再び盛んになる様子などが含まれている。

男性は協力して働き，旅の計画や聖徒たちの定住地などについて頻繁に会合を持った。また，家畜を集めて野営地周辺の草を食べさせるときなども協力して行った。彼らは一緒に畑を耕し，周辺の監視をし，製粉所の建設や運営を行い，荷車の整備をした。しかしそれは，疲労と病気の中での苦しい作業となることもしばしばであった。中には自分を顧みないまったくの愛の働きもあった。畑を耕して種をまき，次の聖徒たちが収穫できるようにして旅立つこともよく見られたからである。

ブリガム・ヤングの息子ジョンは，ウィンタークォーターズを「モルモンのバレーフォージ」と呼んだ〔訳注――バレーフォージとは，アメリカ独立戦争でジョージ・ワシントンが陣を張り，兵士が冬の寒さをしのいだ場所〕。ジョンは埋葬地の近くに住んでいて，「悲しい顔をした葬儀の列が何度も家の前を通り過ぎるのを」目撃した。彼は家族の食事がいかに粗末で毎日同じものであったかを回想する。それはトウモロコシのパンと塩ベーコンとわず

かなミルクのようなもので，口に入れると吐きけを催し，食事を取るのは薬を飲むのと似て飲み込むのが大変だったという。[4] この試練の時期を乗り越えられたのは，聖徒たちの信仰と献身による以外の何ものでもなかった。

モルモン大隊

聖徒たちがアイオワにいたころ，アメリカ合衆国陸軍の徴兵担当者が教会指導者に対して，1846年に勃発（ぼっぱつ）したメキシコ戦争に派遣するための分隊を出すように要請してきた。モルモン大隊と呼ばれることになるこの人々は，合衆国南部を行軍してカリフォルニアに行き，給与と衣服と食糧を受けることになっていた。ブリガム・ヤングは入隊を奨励した。ノーブーの貧者を呼び寄せる資金ができるし，各人の家族の助けになると考えたからである。また，このことで政府に協力をすれば教会員が国家に対して忠誠を示すことになり，今後の国有地やインディアン居留地への一時的な居住を正当化できると思われた。こうして，541人の男性が指導者の勧告を受け入れ，モルモン大隊に加わった。また，33人の女性と42人の子供も同行している。

戦争に行く大隊の兵士たちの苦しみは，困難な時期に妻子を残していく悲しみによりますます大きなものとなった。ウィリアム・ハイドはこう回想する。

「この困難な時期に家族を残して行くことは，わたしにとっては想像もつかないことです。皆，生まれ故郷から遠く離れ，荷車以外身を寄せる場所もなく果てしなく広がる大平原の中に置かれているのです。焼けつくような太陽が容赦なく照りつけ，12月にもなれば冷たい風が，同じ荒れ果てた平原を歩く彼らを襲うのです。

わたしの家族は妻と子供が二人でしたが，わたしは彼らを年老いた父母に託して彼らのもとを離れました。大隊の仲間のほとんどは家族を後に残して参戦しました。……再会がいつなのかは神だけが御存じです。でも，わたしたちは不平を言う気持ちにはなれませんでした。」[5]

大隊は南西に向かって2,030マイル（約3,300キロ）行軍し，カリフォルニアに着いたが，食糧も水も薬品もなく，また休憩もあまり取らない急ぎの旅であったため，隊員は非常に苦しい思いをした。彼らはサンディエゴ，サンルイレイ，ロサンゼルスで占領軍として奉仕し，服務期間の満了とともに除隊し，家族のもとに帰ることを許された。彼らを管理した人々は，彼らの努力と合衆国政府への忠誠に敬服した。

除隊後，隊員の多くはカリフォルニアに残ってしばらくの間働いた。多くは北方に移動し，アメリカンリバーでジョン・サッターの製材所に雇われた。

ちょうど1848年に金が発見され，有名なカリフォルニアのゴールドラッシュに突入したころである。しかし，末日聖徒の兄弟たちはカリフォルニアにとどまって金もうけをしようとは考えなかった。彼らの心は，大平原を越えてロッキー山中に向かい，西へ西へと苦労して進んでいる兄弟姉妹たちへの思いでいっぱいだったのである。大隊に参加した一人，ジェームズ・S・ブラウンはこう説明している。

「わたしは地球上であれほど豊かな地をこれまで見たことがありません。でも，後悔はしていません。わたしには金よりももっと高い目標がいつもあったからです。……中にはわたしたちのことを，自分の利益に盲目な連中だと言う人がいることでしょう。でもあれから40年たって振り返っても，何の後悔もありません。確かにそこには富がありました。とどまるように促すものはたくさんありました。人々は言いました。『岩の上に金，丘の上に金，小川にも金。金はどこにでもある。すぐに大金持ちになれるよ。』それはわたしたちにも分かっていました。でも，道義心が頭をもたげてきます。わたしたちの名誉がかかっているのです。わたしたちは互いに聖約を交わしていました。そこには一つの信条がありました。わたしたちにとって第一とすべきものは神と神の王国だったのです。友人や親族はまだ荒野にいます。そうです。未開の不毛の地です。彼らの状態をだれが知っているでしょうか。わたしたちには分かりませんでした。ですから，楽しみや富を求める前にまず義務を果たさなければなりません。この気持ちに促されて，わたしたちは出発しました。」[6] この兄弟たちは，神の王国には，この世のいかなる物質的なものよりも大きな価値があることをはっきりと理解していた。そして，それを理解したうえで進むべき道を選んだのである。

ブルックリン号の聖徒たち

多くの聖徒たちはノーブーから大平原をロッキー山中に移動したが，合衆国東部からの一団は海を渡るルートを取った。1846年2月4日，男性70人，女性68人，子供100人がブルックリン号という船に乗り組み，ニューヨーク港からカリフォルニアの海岸に向けて出発した。1万7,000マイル（約2万7,200キロ）の航海である。航海の途中で二人の子供が産まれ，アトランティック（大西洋）とパシフィック（太平洋）と名付けられた。一方で，12人が死んだ。

6か月の航海は困難を極めた。聖徒たちは熱帯の暑さの中を狭い船の中で過ごさなければならず，食糧や水の質もよくなかった。彼らはホーン岬を回ったところでファン・フェルナンデス島に停泊し，5日間の休息を取った。

キャロライン・オーガスタ・パーキンズは当時をこう振り返る。「陸地の風景と大地をもう一度踏みしめた感触は，船上での生活からの解放感を与えてくれるものでした。わたしたちはその気持ちを心にかみしめながら楽しい時を過ごしました。」彼らは真水で体を洗い，洗濯をし，ジャガイモや果物を集め，ウナギやほかの魚をとり，島の中を歩きながらロビンソン・クルーソーが住んでいたような洞窟（どうくつ）を探検したりした。[7]

こうして1846年7月31日，ひどい嵐（あらし）や劣悪な食糧，そして長期に及ぶ航海に耐えた彼らは，ついにサンフランシスコに到着した。一部の者はそこにとどまり，ニューホープと呼ばれる開拓地を作ったが，ほかの者たちは山を東に越えて，大盆地にいる聖徒たちのもとへ向かった。

集合は続く

アメリカ全土から，多くの国々から，忠実な改宗者たちは家や故郷を離れ，馬に乗ったり歩いたり，いろいろな手段でロッキー山中への長い旅路に就いた。聖徒たちと合流するためである。

1847年1月，ブリガム・ヤングは霊感に満ちた「イスラエルの陣営に関する主の言葉と御心（みこころ）」を出している（教義と聖約136：1）。これは，西部に向かう開拓者の憲章となった。聖徒たちは隊として組織され，夫を亡くした女性や父親のいない子供たちは隊で面倒を見ることになった。また，対人関係において悪意やむさぼり，争いは避けるように言われていた。民は明るくあるべきであり，感謝の心を音楽やダンス，祈りで表すようにとされた。主はブリガム・ヤングを通して聖徒たちにこう語っておられる。「あなたの道を行き，わたしがあなたがたに告げたように行きなさい。敵を恐れてはならない。」（教義と聖約136：17）

最初の開拓隊がウィンタークォーターズを発つ準備をしていたとき，パーリー・P・プラットがイギリスでの伝道から戻り，ジョン・テーラーがイギリスの聖徒たちからの贈り物を持って後から来ることを報告した。するとその翌日，ジョン・テーラーが什分（じゅうぶん）の一としてイギリスの聖徒たちから受け取ったお金を携えて戻って来た。それは彼らの愛と信仰の証（あかし）であり，これから旅をする人々のために役立ててほしいというものであった。また彼は開拓者のルートを決めたり周囲の状況を把握したりするうえで貴重な器具も持参している。こうして1847年4月15日，ブリガム・ヤング率いる最初の開拓隊が出発した。そしてそれから20年以上もの間，6万2,000人の聖徒たちが荷車や手車で大平原を横断し，シオンに集合したのである。

開拓者たちを待ち受けていたのは，すばらしい光景でもあり，苦難でもあった。ジョセフ・メイナーはソルトレーク盆地に着くまでの「苦難」を書き残している。しかし彼は，それまで見たことのないものを目撃した。バッファローの大群や丘の上のヒマラヤ杉の大木である。[8] また，辺り一面に咲き乱れるヒマワリを見た人々もいた。

聖徒たちはまた，霊的な経験を語り合った。それは日々の過酷な行程に疲れた体を軽くしてくれるものだった。長い一日の旅路の後で，聖徒たちはたき火を囲んで料理をし，男も女もその日の出来事を語り合った。福音の原則について話したり，歌やダンスに興じたり，一緒に祈ったりする毎日であった。

西部への遅々とした歩みの中で，死が度々聖徒たちを襲った。1850年6月23日の段階でクランドール家は15人家族だった。ところがその週の終わりまでに7人が恐ろしいコレラに感染して死に，それから数日後にはさらに5人が死んだ。そして6月30日，クランドール姉妹は出産し，生まれたばかりの子供とともにこの世を去った。

このように，ソルトレーク盆地への旅路で数々の苦難を味わったにもかかわらず，聖徒たちの間には協力の精神と明るさがみなぎっていた。主への信仰と固い決意で結束していた彼らは，苦難の中にも喜びを見いだしていたのである。

まさにこの地である

1847年7月21日，最初の開拓隊のオーソン・プラットとエラスタス・スノーが先陣を切ってソルトレーク盆地に入った。二人が見たのは，人がかき分けて歩くほどの高さの草と耕作に適した土地，それに盆地を縦横に流れる幾つかの小川であった。それから3日後，山熱に冒されたブリガム・ヤングが荷車に乗って，ソルトレーク盆地を見渡せる盆地の入り口の所までやって来た。そして，目の前に広がる光景を見た彼は，「これで十分だ。まさにこの地である」との預言的な宣言をするのである。

後から山々を越えて来た聖徒たちも，自分たちの約束の地を目にした。西部の太陽に輝く塩の湖を擁するこの盆地は，預言と示現の象徴であり，彼らと後に続く何千何万の人々にとって夢の地となった。そこは彼らが安らぎを得る場所であり，ロッキー山中で強力な民となる地であった。

それから数年後，イギリスからの改宗者であるジーン・リオ・グリフィス・ベーカーは初めてソルトレーク・シティーを見たときのことをこう記している。「町は縦横に区画されていた。こちらではブロックと呼ぶ。各ブ

ロックは10エーカー（約4.05ヘクタール）の広さがあり，それが8つの区画に区分され，各区画に1軒ずつ家が建てられていた。その光景に接したときのわたしの気持ちを分析することはできないが，一つ心にあふれてきたのは，長くてつらい旅路の間わたしや家族を守っていただいたことへの感謝と喜びだった。」[9]

手車隊

1850年代に入ると，教会の指導者は経費を削減するための手段として手車隊を編成することを決定した。財政的な援助をできるだけ大勢の人々に行き渡らせるためである。手車隊に加わった人々は，わずか100ポンド（約45キロ）の小麦粉と少量の食糧や所持品を手車に積み込み，それを引いて大平原を横断した。1856年から1860年までの間にこのような形でユタに向かったのは，10隊であった。そのうち8隊は無事ソルトレーク盆地に着いたが，マーティン隊とウィリー隊は早めに訪れた冬に阻まれ，隊の中の多くの聖徒たちが命を落とした。

これらの隊の一員であったネリー・プーセルは大平原で10歳の誕生日を迎えた。両親とも旅の途中で亡くなっていた。隊が山道に差しかかるころには寒さも厳しく，食糧も底を突き，飢えに弱り果てた聖徒たちには旅を続けるのはとても無理な状態だった。ネリーと姉の二人も倒れてしまった。そして，もうだめだと思ったとき，隊長が荷車で駆けつけ，ネリーを荷車の中に入れ，姉のマギーには荷車にしっかりつかまって歩くように言った。マギーは幸運だった。強制的に足を動かしていたために凍傷にかからずに済んだのである。

やがてソルトレーク・シティーに着いて，ネリーが大平原を旅する間ずっと履いていた靴と長靴下を脱がせると，凍傷のため皮膚も一緒にむけ落ちた。痛ましいことだが，この勇敢な少女ネリーはひざから下を両足とも切断され，残りの人生をひざで歩いて過ごさなければならなくなってしまった。しかし後に彼女は結婚して6人の子供を産み，家事を行い，子孫を立派に育て上げた。[10] 逆境をものともしない彼女の意志の強さと，彼女を世話した人々の思いやりとは，初期の教会員の信仰と，喜んで犠牲を払おうとする心を描いて余りあるものがある。彼らの模範は後に続く聖徒たちにとって信仰の大いなる遺産となった。

マーティン手車隊に加わって大平原を越えた一人の男性が，その後長い間ユタで生活していた。ある日のこと，一緒にいた人たちが教会の指導者を痛烈に批判し始めた。手車隊のような食糧と装備で聖徒たちに大平原を横断さ

ソルトレーク盆地からの聖徒たちは，時ならぬ冬の訪れで立ち往生していた
マーティン手車隊を救うために，命がけで行動した。

せたのは誤りだったと言うのである。その老人は何も言わずに聞いていたが，やがて我慢ができなくなり，立ち上がると涙ながらにこう語った。

「わたしはその隊にいました。妻もです。……わたしたちは皆さんがとても想像できないようなとてもつらい目に遭いました。寒さと飢えのためにたくさんの人が死んでいきました。でも，生き残った人たちの口から非難めいたことを一言でも聞いたことがありますか。……**わたしたちには神が生きておられるとの絶対的な知識がありました。あの極限の状態で神という御方と知り合いになれたのですから**。

手車を引きながら，病気と飢えで体が弱ってしまったわたしは，足を前に踏み出すことがなかなかできませんでした。前を見ると砂地の丘のような所があります。わたしは自分にこう言いました。あそこまでしか行けない。あそこまで行ったらもうやめよう。とてもあの坂は越えられない。……そしてその砂地の所まで行きました。すると手車がわたしを押すのです。だれが押してくれているのだろうと何度も後ろを振り返りましたが，だれもいません。わたしには分かりました。神の天使がいたのです。

わたしは手車隊に加わったことを不幸だと思ったでしょうか。いいえ。そのときも，それから今までの年月の中で，一時たりともそう思ったことはありません。**わたしたちが神の臨在を賜るために払った犠牲は，特権として払ったものです。わたしはマーティン手車隊に加わった特権を感謝しています**。」[11]

わたしたちの賛美歌の中には，勇気をもって福音を受け入れ，文明の及ばない場所へ旅した初期の教会員についての歌がある。

国を造りたる　人々のあと
彼らが日毎（ひごと）の　働き見ゆる
基を固めて　国の果てまで
働き進めた　開拓者たち

彼らの模範は，自国でさらなる信仰と勇気をもって生きるにはどうすればよいかを教えてくれる。

彼らは奉仕と　愛に守られ
勇気はつきせぬ　かがり火となり
重荷を担いて　心明るく
希望を持ちたる　開拓者たち[12]

もろもろの国民のための旗

大平原を越えて最初の隊を無事ユタに送り込むことのできたブリガム・ヤングは，荒れ野に神の王国を確立するという事業に取りかかる。そして，彼のビジョンとリーダーシップにより，かつては何もなかった荒れ野が繁栄を誇る文明世界となり，聖徒たちの安らぎの場となった。彼の指示の言葉は分かりやすく，聖徒たちは自分たちの新たな憩いの場がどのような所となるかについて心に思い描くことができた。そして神の王国の建設に向けて進んで行くことができたのである。

最初の隊が到着して２日後，ブリガム・ヤングと十二使徒の何人かは，ノーブーを出る前に示現で見た山の中腹の円い丘に登った。彼らはそこで大きく広がるソルトレーク盆地を眺めながら，世界中の人々がこの地に招かれ，聖徒たちが繁栄と平安を享受することを預言した。彼らはその丘を「エンサインピーク（旗の頂）」と名付けた。「主は国々のために旗をあげて，イスラエルの追いやられた者を集め」られる（イザヤ11：12）というイザヤの約束の聖句から引用したものである。[1]

1847年７月28日，ブリガム・ヤングは初めての公法を出した。神殿のための中心となる場所の選定と神殿の設計と建築の指令である。彼は選ばれた場所に杖（つえ）を置き，こう述べた。「わたしたちはここに神のために神殿を建てます。」この宣言は聖徒たちにとって大きな慰めであったに違いない。ノーブーを去るときに，神殿の礼拝をあきらめるほかなかったからである。

８月，教会の指導者と最初の隊のメンバーのほとんどは，翌年，家族を連れてソルトレーク盆地へ移動するために，ウィンタークォーターズへ戻った。彼らがソルトレーク盆地に戻った直後，ブリガム・ヤングと十二使徒会は大管長会を再組織すべきであると感じ，十二使徒会の会長であったブリガム・ヤングが大管長として支持された。彼はヒーバー・Ｃ・キンボールとウィラード・リチャーズを副管長に選び，聖徒たちは全会一致でこれらの新しい指導者を支持した。

ソルトレーク盆地での最初の年

1847年の夏が終わるまでにはさらに二つの隊がソルトレーク盆地に到着し，約2,000人の教会員でソルトレークステークが組織された。この年，季節遅れの種まきが行われたが，収穫は少なく，翌年の春には大勢の人々が飢えで苦しむことになった。当時まだ少年であったジョン・R・ヤングはこう書いている。

「草が生え始めるころ，わたしたちの飢えはかなり苦しいものとなっていた。何か月もの間パンを口にすることはなく，食べ物といえば牛肉，牛乳，アカザ（雑草の一種。豚がえさとして食べる），セゴユリの根，アザミだった。わたしの仕事は家畜の番だったが，外で家畜を見ている間，よくアザミが茂っている所に行き，乳牛のようにおなかがふくれるまでアザミを食べたものである。飢えが極限に達したころ，鳥がよくつっついていた牛の皮を父が木の枝から下ろしてきて，それでスープを作ってくれたが，とてもおいしかった。」[2] 開拓者たちは互いに助け合い，何でも分かち合って，この困難な状況を切り抜けることができた。

1848年6月ごろになると，5,000ないし6,000エーカー（約2万250－2万4,300ヘクタール）の土地に作付けができ，ソルトレーク盆地は緑に覆われて豊かな土地に変わっていった。しかし，聖徒たちにとって悩みの種は，黒雲のように大挙して飛んで来て作物を食い荒らすクリケット（注訳――いなごのような田畑を食い荒らす新種の黒い大型の昆虫。当時大量発生した。こおろぎに似ているところから，「ロッキー山のこおろぎ」と呼ばれたりする。「モルモンクリケット」とも呼ばれた。）の大群であった。聖徒たちは棒やほうきでこのクリケットをたたいたり焼き殺そうとしたりしたが，何の効果もなかった。無数のクリケットが引きも切らず飛んで来たのである。そこで祝福師でありソルトレークステークの会長であったジョン・スミスが聖徒たちに，断食と祈りを呼びかけた。するとどこからともなくかもめの大群が飛んで来て，クリケット目がけて急降下し始めた。そのときの経験をスーザン・ノーブル・グラントはこう語っている。「驚きました。かもめは恐ろしいほどの食欲で，跳ね回るクリケットを次から次へと食べていったのです。」[3] 聖徒たちはこの光景を驚きと喜びをもって眺めた。こうして彼らの命は救われたのである。

聖徒たちは数々の困難な状況にあったにもかかわらず，精力的にまた信仰をもって働いた。その結果，程なく大きな発展を遂げることになる。1849年9月にカリフォルニアに向かう途中でソルトレーク・シティーを通過したあ

聖徒たちは信仰と勤勉さによりソルトレーク盆地に町を築いていった。
この彫版印刷は1853年のソルトレーク盆地を描いたものである。

る旅行者は，次のような称賛の言葉を残している。「わたしは彼らのような秩序正しい，熱心な，また勤勉な人々にお目にかかったことがない。かくも短期間にこの不毛の地でよくこれだけのことができたものだと感心する。この町には4,000人から5,000人は住んでいるだろうが，何もしないでぶらぶらしている者や浮浪者には一人として会っていない。作物は順調に実り，見るものすべてが活気と活力にみなぎっている。同規模の町でこれほどの所はほかにはない。」[4]

探　検

1848年晩夏，ブリガム・ヤングはウィンタークォーターズからソルトレーク盆地に再び旅をした。到着後，彼は周辺地域でどのような天然資源が入手できるかを知る必要があると感じた。周辺に住むインディアンからも多くの情報が得られたものの，ヤング大管長は探検隊を派遣し，入手できる薬草や天然資源を調べさせた。

また，移住地を特定するための探検隊も派遣された。その結果，鉱床や木材を取るための森林，水資源，草地，そして移住に適した土地も発見することができた。ここで預言者は，土地への投機熱が高まることを警戒し，聖徒

たちに割り当てられた土地を分割して売ることを禁止した。割り当てられた土地は一人一人が管理の職として与えられたものであり，賢明にまた勤勉に管理しなければならず，決して金もうけのために使ってはならないのである。

1849年秋，ヤング大管長の指示の下に永代移住基金が設立された。目的は，貧しいために聖徒たちのもとに合流できない人々の旅行資金を援助することにあった。大勢の聖徒たちは大きな犠牲を払ってこの基金に献金し，その結果，何千人もの教会員がソルトレーク盆地にたどり着くことができた。到着後，彼らは援助を受けた金額を返還することになっていた。次の人々を援助するためである。この協同事業により，聖徒たちは貧しい人々に祝福をもたらすことができたのである。

召しにこたえた宣教師たち

勤労と生活の基盤造りに人々が奔走する中で，ブリガム・ヤング大管長の心は教会の重要な課題に向いていた。1849年10月6日の総大会で，彼は十二使徒会の数人ならびに新たに召された宣教師を海外の伝道へと召した。彼らは家族や新しい家，まだ片付いていない仕事がありながらもこの召しを受け入れた。エラスタス・スノーをはじめ何人かの長老はスカンジナビアでの伝道を始めるために派遣され，ロレンゾ・スノーとジョセフ・トロントはイタリアに向けて旅立った。アジソン・バーンズ・プラットと妻のルイザはアジソンの前の任地である南太平洋のソシエテ諸島に戻り，ジョン・テーラーはフランスとドイツに召された。東へ向かう宣教師たちは途中で，ロッキー山中の新しいシオンに向けて西に旅する聖徒たちと行き違うこととなった。

宣教師たちはこの伝道で奇跡を目にし，バプテスマにより大勢の人々を教会に導き入れた。後に大管長となるロレンゾ・スノーはイタリアで伝道していたとき，死の境をさまよう3歳の男の子に会った。彼はその子を癒(いや)せばその地域の人々の心が開くと感じ，その夜，長い間熱烈に主に祈り，導きを求めた。そして翌日，彼と同僚はその子のために断食をし，祈った。午後，彼らはその子に神権の祝福の儀式を行い，心の中で助けを祈り求めた。するとその子は一晩何事もなかったかのように眠り続け，奇跡的に救われた。この癒しの話はイタリアのピエモンテの人々の間に広まった。こうして人々の家の扉が宣教師に対して開かれ，その地域での最初のバプテスマが行われた。[5]

1852年8月にソルトレーク・シティーで行われた特別大会で106人の長老が召され，全世界に向かって伝道の旅に出ることになった。この106人ならびに後に召される宣教師は，南アメリカや中国，インド，スペイン，オース

トラリア，ハワイ，南太平洋諸島で福音を宣(の)べ伝えることになる。しかし，彼らの働きは種をまいたにとどまり，大勢の人々の教会への加入は後の伝道活動を待つこととなった。

エドワード・スティーブンソン長老はスペインのジブラルタル伝道部に召された。そこは彼の生まれ故郷であった。彼はそこで地元の人々に回復された福音を大胆に宣べ伝えたが，そのために逮捕され，しばらくの間拘留された。ところが拘留中も看守たちに福音を説き，そのうちの一人をほとんど改宗させるまでに至った。当局はこの事実を知ると，長老を釈放した。その後，彼は二人にバプテスマを施し，1854年１月には10人の教会員により支部が設立された。7月にはそのうち６人がイギリス軍の一部としてアジアに派遣されたにもかかわらず，支部は18人の教会員を擁し，七十人が１人，長老が１人，祭司が１人，教師が１人いて，支部が続けて発展するための指導者がそろっていた。[6]

フランス領ポリネシアでは1852年に地元の政府が宣教師を国外退去させたが，改宗した聖徒たちは1892年に伝道が再開されるまで教会を守り続けた。特にティホニ，マイヘア両長老は投獄されるなど数々の苦しみに遭いながらも信仰を否定することなく雄々しく耐え，聖徒たちが福音に対して活発かつ忠実であるように働きかけを続けた。[7]

合衆国以外で教会に加わった人々にとって，当時はシオンへの集合の時代であった。つまり船でアメリカに渡る時代だったのである。チャールズ・ウッドと妻のエリザベスは何年間か働いて旅行資金を作った後，1860年に南アメリカから船に乗った。エリザベスは裕福な家のメイドとして，チャールズはれんが職人として働き，資金を蓄えたのであった。エリザベスは息子を出産して24時間後，ベッドに寝たままで乗船，特別に船長用のベッドをあてがわれた。彼女は航海中２度生死をさまようほどの苦しみを味わったが，ユタ州フィルモアに定住の地を見いだした。

宣教師たちは奉仕する国々の聖徒たちにとって非常に身近な存在となった。ジョセフ・F・スミスはハワイでの伝道の終わり近くの1857年，高熱に見舞われ，3か月間伝道の業に従事することができなかった。そのときに彼の世話をしたのが忠実なハワイ人の聖徒マ・マフヒイである。彼女はジョセフをわが子のように看病し，二人の間には強い愛のきずながはぐくまれた。それから何年かして大管長としてホノルルを訪れたとき，ジョセフ・F・スミスは到着後すぐに手にささげ物の見事なバナナを抱えた盲目の老婦人が導かれて来るのを目にした。彼女は「ヨセパ，ヨセパ（ジョセフ，ジョセフ）」

と呼んでいた。ジョセフは彼女のところに駆け寄って彼女を抱き締め，「ママ，ママ，わたしのママ」と言いながら頭をなでて何度もキスをした。[8]

入植の召し

ユタやアイダホ南部，そして後にアリゾナ，ワイオミング，ネバダ，カリフォルニアの各地の町は，総大会での召しを受けた個人や家族によって開拓されている。これはブリガム・ヤング大管長の指示によるもので，開拓された町には何千人もの入植者が移住し，開墾が行われた。

ブリガム・ヤングの存命中，ソルトレーク盆地のすべてと周辺の多くの地域が開拓された。そして，ブリガム・ヤングが亡くなった1877年には350の町が建設されており，1900年にはその数が500となった。初期の中央幹部であるブリガム・ヘンリー・ロバーツは，モルモンの開拓の成功は，ヤング大管長からの召しを遂行するに当たり「民が示した指導者への忠誠と，私利私欲を捨てた献身的な犠牲」に根ざしたものであると述べている。[9] 入植者たちは物質的な安楽や友人との交わり，そして時には自らの命をも犠牲にして，主の預言者に従ったのであった。

ブリガム・ヤング大管長は総大会で，遠く離れた場所に移住するように召された兄弟たちとその家族の名前を読み上げた。この入植者たちは自分たちの召しを伝道と見なし，解任されるまで召された地にとどまると理解していた。彼らは召された地に自費で移住し，必要なものもすべて自ら携えて行った。彼らの成功は，手に入れられるものをいかに利用するかにかかっていた。そこで彼らは召された地を調査した後に開墾を行い，水車小屋を作り，水を引くための灌漑（かんがい）設備を作り，牧場に囲いを巡らし，道路を作った。また穀物や野菜を植え付け，教会や学校を建設し，インディアンとは友好を保つよう努力した。そして，病気や出産，死，結婚のときは互いに助け合った。

1862年，チャールズ・ローウェル・ウォーカーはユタ南部への移住の召しを受けた。召しを受けた人々との集会に集った彼はこう記録している。「ここでわたしは，それから後しばしの間決して忘れることのなかった一つの原則を学んだ。つまり，天でも地でも，従順は偉大な原則であるということである。これまでの7年間，わたしはここで暑い日も寒い日も懸命に働き，飢えや逆境に耐え，ついに家を手に入れ，実をつけ始めたたくさんの美しい果樹に恵まれるようになった。わたしは今それを残し，行って天の御父の御心（みこころ）を行わなければならない。天の御父は御父を愛し畏（おそ）れる者のあらゆる恵みを支配しておられる。わたしは，御父の前に受け入れられるために必要なこと

ブリガム・ヤング大管長からの召しにより，大勢の聖徒たちが建てたばかりの家を離れ，
新しい町の開拓へと向かった。

を成し遂げる強さを神に祈り求める。」[10]

十二使徒定員会の一員であったチャールズ・C・リッチも入植の召しを受けた。ブリガム・ヤング大管長が彼とほかの数人の兄弟たちに，家族を伴ってソルトレーク・シティーの北約150マイル（約240キロ）のベアレーク盆地に移住するよう命じたのである。その土地は高所にあり，冬は寒さが厳しく雪も深かった。リッチ兄弟はヨーロッパでの伝道を終えて帰還したばかりで，家族を伴って再び過酷な環境に身を投じることにあまり乗り気ではなかった。しかし彼は召しを受け入れ，1864年6月にベアレーク盆地に到着した。ところがその年の冬はことのほか寒さが厳しく，春を迎えるまでに何人かの兄弟たちがその地を去ることを決意するほどであった。リッチ兄弟もベアレーク盆地での厳寒の生活は安易なものではないことを自覚したが，次のように語っている。

「これまで幾多の困難がありました。それは認めます。……わたしたちはその中で助け合ってきました。でも，どこかほかへ行くと言うのであれば，それは皆さんの権利です。その権利をわたしは奪いたくはありません。……でも，独りになったとしてもわたしはここに残らなければなりません。ヤング大管長がわたしをここに召したからです。わたしは彼が解任するまで，ここを去るように言うまで，ここにとどまろうと思います。」リッチ兄弟と家族はその地にとどまり，彼はそれからの数十年間，急速な発展を遂げたその町の指導者として活躍したのである。[11] ほかの何千人の人々と同様，彼も主の王国の建設のために主の指導者に喜んで従ったのであった。

インディアンとの関係

開拓者たちは開拓の手を広げていくうちに，インディアンと接触するようになった。ほかの西部への移住者の場合と異なり，ブリガム・ヤングは原住民の兄弟姉妹であるインディアンに食物を与え，教会に導き入れるように教えた。こうして，インディアンへの伝道活動がアイダホ準州のサーモンリバー地区のフォート・レムハイとユタ準州のコロラド北部にあるエルクマウンテンで行われた。またヤング大管長は，扶助協会を組織し，インディアンの兄弟姉妹のために衣服を縫わせ，食糧供給のための基金獲得活動を行った。

教会員ではないが聖徒たちの偉大な友人の一人であるトーマス・L・ケインの妻，エリザベス・ケインは，ユタを旅していたときに末日聖徒の疲れた様子の女性の家に泊まった。エリザベスはこの女性についてあまり気に留めなかったのだが，彼女のインディアンへの接し方を見たとき，自分の目を

疑った。彼女は食事ができたことを自分だけでなく，待っていたインディアンにも彼らの言葉で知らせたのである。エリザベスが何と言ったのか尋ねると，その家の息子がこう答えた。「この方々が最初に来ました。料理はこの方々の分しかありません。でもあなたがたの料理は今作っているところですから，できたら呼びますよ。」エリザベスにはとても信じられなかった。そして，彼女がほんとうにインディアンに食物を与えているのか尋ねた。すると息子が言った。「母はあなたにごちそうするのと同じように彼らにもごちそうします。それもテーブルで。」確かに彼女は彼らをテーブルに着かせ，彼らが食事をしている間給仕をしたのである。[12]

神権組織と補助組織の確立

ブリガム・ヤング大管長は晩年，ある重要な神権の任務について明らかにし，それを確立した。十二使徒に命じて，すべてのステークにおいて大会を開催させたのである。その結果，ユタ全体で7つのステークと140のワードが新たに設立された。そしてステーク会長会，高等評議会，監督会，定員会会長会の職務が明確に定義され，これらの職務を遂行するために何百人もの男性が召された。ブリガム・ヤングは教会員に対して，生活を整え，什分（じゅうぶん）の一や断食献金，その他のささげ物を納めるように勧告している。

1867年，預言者ブリガム・ヤングはジョージ・Q・キャノンを中央日曜学校会長に任命し，それから数年のうちに日曜学校は教会の常設組織となった。また1869年，ヤング大管長は娘たちに質素な生活をするように指示し，1870年には倹約協会を組織することにより，これを教会のすべての若い女性に適用した。若い女性の組織の始まりである。1877年，ヤング大管長はユタ州オグデンに赴き，初めてのステーク扶助協会を設立した。

ブリガム・ヤング大管長の死去と遺産

ヤング大管長は指導者として非常に現実的で力にあふれた人物だった。彼は教会の入植地を巡り，聖徒たちに指示と励ましを与えた。そして，指導と模範を通して，教会員に教会の召しを果たすように教えた。

ヤング大管長は，ニューヨークのある新聞編集者の質問に答えて，自らの人生を振り返り，こう書いている。

「わたしの過去26年の働きを簡単にまとめるとこうなります。約10万人の末日聖徒をこの地方に入植させたこと，200以上の市町村を建設したこと，……この共同社会を発展させるために学校，工場，製粉所，そのほかの施設

を作ったことです。……

わたしは全生涯を全能者である神に仕えることにささげてきました。」[13]

1876年9月，ブリガム・ヤング大管長は救い主について力強い証（あかし）を述べている。「わたしはイエスがキリストであられ，世の救い主，贖（あがな）い主であられることを証します。わたしは主の御言葉（みことば）に従うことにより主の約束を実現してきました。主についてわたしが得ている知識は，この世の知恵から学びとることはできませんし，この世の知恵によって奪われることもありません。」[14]

1877年8月，ヤング大管長は重病に倒れ，医師の治療にもかかわらず，1週間を経ずにこの世を去った。76歳であった。彼が教会を導いた期間は33年に及ぶ。今日わたしたちがヤング大管長について抱くイメージは，近代のイスラエルを約束の地に導いた精力的な預言者である。彼の説教は日常生活のあらゆる場面にかかわるものであり，宗教は毎日の経験の一部であることを明確にするものであった。ヤング大管長は開拓について豊かな知識を持ち，人の心を大切にする指導を行った。その結果，一見不可能に思えることを達成するように民を励まし，荒れ野に王国を造るという天の祝福をもたらすことができたのである。

試練と試しの期間

ジョン・テーラー大管長

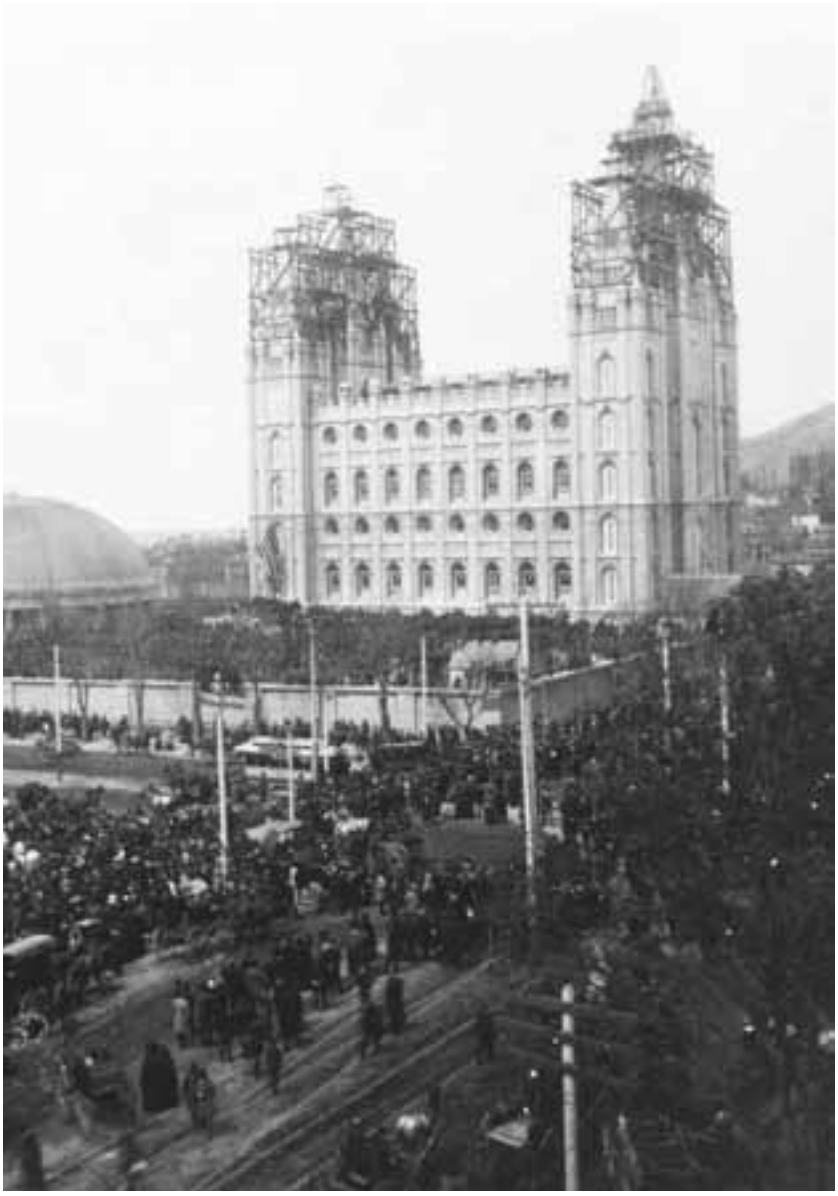
ブリガム・ヤング大管長の死後，末日聖徒を３年間導いたのは，ジョン・テーラーを会長とする十二使徒定員会であった。そして1880年10月10日，ジョン・テーラーが大管長として支持された。テーラー大管長は才能豊かな作家でありジャーナリストであって，贖罪（しょくざい）についての本を著し，『タイムズ・アンド・シーズンズ』（*Times and Seasons*）や『モルモン』（*Mormon*）などの教会の刊行物の編集も行った。また，しばしば勇敢さを示し，回復された福音への深い愛情を示した。自らカーセージの監獄の兄弟たちに加わり，４度銃撃を受けたこともその一例である。彼のモットーは，「神の王国かそれとも無か」であった。これは神と教会への彼の忠誠心を表明するものである。

伝道活動

テーラー大管長は，全力を尽くして福音を地の果てまで宣（の）べ伝えようとしていた。1879年10月の総大会で，大管長は新たに使徒に召されたばかりのモーゼズ・サッチャーを，メキシコのメキシコシティーでの伝道を開始させるために召した。サッチャー長老とほかの二人の宣教師は1879年11月13日，プロチノ・C・ロダカナティー博士を支部長として，メキシコシティーにおける教会の最初の支部を組織した。ロダカナティー博士はスペイン語のモルモン書のパンフレットを読んで，手紙でテーラー大管長に教会についての情報を請求し，その後改宗した人物である。

12人の教会員と３人の宣教師を核に，回復された福音は徐々にメキシコの人々の間に広がっていった。1881年４月６日，サッチャー長老，フェラモルツ・ヤング，そしてパイス兄弟が１万5,500フィート（約4,724メートル）のポパカテペテル山に登り，短い奉献の儀式を行った。サッチャー長老は主の前にひざまずき，メキシコの地を，またその民を，真の羊飼いである主の声を聞くように奉献したのであった。

ソルトレーク・シティーに戻ったサッチャー長老は，メキシコに宣教師を



1892年4月6日，ソルトレーク神殿の定礎式に
何千人もの聖徒たちが集まった。

もっと送るよう提案し，間もなく，後に大管長会の一員となるアンソニー・W・アイビンズを含む数名の若者がメキシコシティーで働くこととなった。そして，メキシコ伝道部での成果の一つとして，1886年にスペイン語版のモルモン書が出版された。モルモン書をはじめとする教会出版物の翻訳で大切な役割を果たしたミルトン・トリーヨの話は，主がいかにその業を導かれたかを示している。

ミルトン・トリーヨはスペインで生まれ，宗教を持たないまま成長した。軍務でフィリピンに赴任したが，そこでロッキー山中のモルモンの話を聞いて非常に興味を持ち，ぜひともユタを訪れたいと思うようになった。後に重い病気を患い，夢の中で，ユタを訪れなければならないという声を聞いた。快復した後，ソルトレーク・シティーに行ってブリガム・ヤングと会い，福音を学んだ。そして真理を見いだしたと確信し，教会の会員となる。その後メキシコで伝道し，伝道を通して一つの偉大な務めのために霊的にも知的にも備えられたのであった。その偉大な務めとは，スペイン語を話す人々がモルモン書を自国語で読めるようにするというものである。

テーラー大管長は，アメリカ西部に住むインディアンに福音を宣べ伝えるためにも宣教師を派遣した。中でも，ワイオミングのワインドリバー保留地に住むショショーニ族に伝道したエーモス・ライトの成果は大きかった。わずか数か月の伝道で，ライトは部族の長ワシャキーを含め300人以上にバプテスマを施した。末日聖徒の宣教師はナバホ族やプエブロ族，それにアリゾナやニューメキシコに住むズーニー族にも福音を携えて行った。ウィルフォード・ウッドラフはホピ族やアパッチ族，ズーニー族などの中で1年間伝道をしている。アンモン・M・テニーはズーニー族の100人以上のバプテスマに貢献した。

またイギリスやヨーロッパでも引き続き福音が教えられた。1883年，ユタ州リーハイに住んでいたドイツ生まれのトーマス・ビージンガーがヨーロッパ伝道部への召しを受けた。彼とポール・ハマーはチェコスロバキアのプラハに派遣され，次いでオーストリア・ハンガリー帝国に送られた。伝道活動が法律で禁じられていたため，伝道の糸口は会う人々との世間話だった。この会話がしばしば宗教の話に発展するのである。このような活動を始めてわずか1か月のところで，ビージンガー長老は逮捕され，2か月間拘留された。拘留が解かれると，アントニン・ジャストにバプテスマを施すという祝福を受けた。アントニン・ジャストは逮捕のきっかけとなった告発をした人物である。こうしてジャスト兄弟は，チェコスロバキアに住む初めての末日聖徒

となった。[1]

福音の伝道はポリネシアでも行われた。1862年，二人のハワイ人の長老，キモ・ペリオとサミュエラ・マノアがサモアに派遣された。二人は50人にバプテスマを施し，マノア長老は以後25年間，改宗者とともにサモアに残った。1887年，ユタ州ソルトレーク・シティーのジョセフ・H・ディーンがサモアでの伝道に召された。マノア長老と彼の忠実な妻は自宅を開放してディーン長老と妻フローレンスを迎えた。サモアの外から来る末日聖徒には20年以上会っていなかった。ディーン長老は間もなく14人にバプテスマを施し，1か月後には初めてサモア語で説教を行った。[2] このようにして，サモアでの新たな伝道の業が始まった。

1866年，ハワイ政府はハンセン病の広がりを阻止するために，患者をモロカイ島のカラウパパ半島に隔離した。1873年，末日聖徒であったジョナサン・ナペラとキティー・ナペラがその地へ追いやられた。ハンセン病にかかっていたのはキティーだけで，ジョナサンは健康だったが，二人はソルトレークのエンダウメントハウスで結び固めを受けており，妻だけをカラウパパに住まわせるのを拒んだのである。後にジョナサンはハンセン病にかかり，9年後に親友が訪れたときには顔が本人と分からないほどになっていたという。ジョナサンはしばらくの間カラウパパ半島の聖徒たちを管理し，1900年には会員数が200人を超えていた。教会の指導者はこの病気に見舞われ肉体をむしばまれていった忠実な教会員のことを忘れることなく，支部を訪問して聖徒の霊的な必要を満たした。[3]

ヨベルの大会

1880年4月6日，教会員は教会設立50周年を祝った。教会員はその年をヨベルの年と呼んだ。古代イスラエルの民が50年の節目をそう呼んだことに倣ったのである。テーラー大管長は貧しい教会員が抱える教会への債務の多くを免除し，さらに教会は300頭の牛と2,000頭の羊を「困窮者と見なされた」[4]人々に分け与えた。また教会の扶助協会の姉妹たちは，貧しい人々のために3万5,000ブッシェルの小麦（約1,200キロリットル）を寄付している。またテーラー大管長は，個人間の債務についても，特に困窮者の分は免除するように強く勧めた。「今はヨベルの時です」と彼は宣言した。[5] こうして，聖徒たちの間に赦（ゆる）しの精神と喜びが満ちあふれたのであった。

1880年4月のヨベルの総大会の最終日は非常に感動的なものであった。最終部会で十二使徒の中の11人が証（あかし）を述べた。十二使徒定員会の創設メンバー

であるオーソン・プラットは，ニューヨーク州フェイエットのピーター・ホイットマー・シニアの農場で教会員が一堂に会したときのことを話した。末日聖徒の試練や集合，迫害，苦難について回想し，自分がまだ「この民の中に数えられる」ことに感謝を述べた。そして「過去50年にわたり主なる神が行われた偉大な業について」証を述べている。[6] 当時プラット長老は余命数か月という状態であったが，忠実な末日聖徒として最後まで堪え忍んだことに喜びを表した。

このヨベルの年の2年前，ジョン・テーラー大管長は子供たちに宗教教育を提供する組織の設立を承認した。この初等協会の最初の集会が行われたのは，ソルトレーク・シティーから15マイル（約24キロ）北のユタ州ファーミントンで，1880年代中ごろまでに末日聖徒のほとんどすべての入植地で初等協会が組織されるようになった。現在，初等協会は全世界の数百万の子供たちを擁するまでに発展し，子供たちは福音の学習や音楽，ほかの子供たちとの交流などを通じて毎週喜びを共にしている。

迫害は続く

1830年代の初期，聖書の翻訳に取り組んでいたジョセフ・スミスは，アブラハムやヤコブ，ダビデなどの旧約聖書の指導者が複数の妻を持っていたことに違和感を覚えていた。そこで預言者ジョセフは理解を求めて祈った末，ある特定の時期には特別の目的のために，神の律法にのっとり，多妻結婚が神により承認され行われていたことを理解した。さらにジョセフ・スミスは，神の承認により程なく末日聖徒の中にも複数の妻を持つようになる人々が神権の権能を持つ者から選ばれることになると知った。ノーブーでは多妻結婚した末日聖徒は多数いたが，この教義を公にして実施したのは，1852年8月になってソルトレーク・シティーで開かれた総大会においてである。その大会でオーソン・プラットは，ブリガム・ヤング大管長の指示により，男性が複数の妻を持つ慣習は主の万物更新の一つであることを発表した（使徒3：19－21参照）。

アメリカの宗教界や政界の指導者の多くは，ユタに住む末日聖徒が不道徳で非キリスト教的と思われる結婚制度を教会員に奨励していることを知り，極度に腹を立てた。こうして，教会と教会員に対する迫害が始まる。また合衆国議会は末日聖徒の自由を制限する議案を通過させた。このことが教会を経済的な苦境に追い込むことになる。この議案の通過により，当局は最終的に複数の妻を持つ男性の逮捕と拘留，選挙権の剥奪（はくだつ），プライバシーの侵害，

公民としての言動や集会などの自由の否定という行動に出ることになるのである。こうして，数百人の忠実な末日聖徒の男性ならびに少数の女性は，ユタ，アイダホ，アリゾナ，ネブラスカ，ミシガン，サウスダコタの刑務所で刑期を送った。

迫害はまた，福音を宣べ伝える召しを受けた大勢の人々に，特に合衆国南部においてその激しさを増していった。例えば，1878年7月，ジョセフ・スタンディング長老はジョージア州ローマで伝道していたところを，なぶり殺しにされた。同僚で後に使徒に召されるラドガー・クローソンは何とか死を免れている。ソルトレーク・シティーの聖徒たちはスタンディング長老の死に深く心を動かされ，ソルトレーク・タバナクルで行われた葬儀には数千もの人々が参列した。

教会のイメージアップのためにテネシーの全域を巡った人々がいた。ジョン・ギブス，ウィリアム・ベリー，ウィリアム・ジョーンズ，ヘンリー・トンプソンの各長老である。1884年8月，4人はテネシーのケインクリーク近くのジェームズ・コンドーの家に滞在していた。安息日の朝のことである。ギブス長老がその日の説教を準備するために聖文を研究していると，暴徒が森からなだれ込んで来て，銃を乱射した。そして，ギブス長老とベリー長老が死んだ。ギブス長老は教員で，妻と3人の子供を残しての死であった。ギブス姉妹はそれから43年間独身を通し，子供たちを育てるために助産婦として働いた。彼女は夫との喜びの再会を待ち望みながら福音に忠実に生活した。この殺人事件のときに伝道部長代理を務めていたブリガム・ヘンリー・ロバーツは，危険を承知で変装をしてギブスとベリーの遺体を掘り起こし，ユタに運んだ。ユタではたくさんのワードで二人をたたえる追悼の集会が開かれた。

また，ほかの地域では宣教師が血を流すまでに鞭（むち）で打たれた。多くの者はその傷跡が死ぬまで消えることがなかった。この時代は教会員にとってつらい時であった。

教会指導者の多くは当局による一夫多妻実行者の逮捕を避けて姿を隠した。家族は真夜中に捜索にやって来る当局の役人に恐怖心を抱く毎日だった。ジョージ・Q・キャノン，ロレンゾ・スノー，ラドガー・クローソン，ブリガム・ヘンリー・ロバーツ，ジョージ・レイノルズ，その他大勢の指導者は投獄され，本を書いたり，ほかの受刑者に読み書きや計算などを教えたり，家族に手紙を書いたりして時を過ごした。ジョン・テーラー大管長はソルトレーク・シティーの北20マイル（約30キロ）のケイズビルでの逃亡生活を余

儀なくされ，1887年7月25日に世を去った。イエス・キリストに対する証と地上における神の王国の確立に尽くした信仰と勇気の人であった。

ウィルフォード・ウッドラフ大管長

ウィルフォード・ウッドラフは教会で最も成功を収めた宣教師の一人であり，その預言的な洞察力と教会への忠誠は有名である。彼は非常に詳細な日記をつけており，それが初期の教会の歴史を知る重要な手がかりになった。ジョン・テーラー大管長の死去の際に十二使徒定員会会長を務めており，それから約2年後，大管長として支持された。

彼の管理の時代，末日聖徒への政治的な排斥運動は激しさを増したものの，教会は発展を続けた。神殿はユタの3つの町，すなわちセントジョージ，ローガン，マンタイで運営され，ソルトレーク神殿も完成間近であった。これら主の宮の存在により，何千人もの聖徒たちがエンダウメントを受け，親族に当たる故人のために儀式を行うことができた。ウッドラフ大管長は，生涯にわたって神殿と家族歴史に関心の深かった人である。機会をとらえては聖徒たちに，先祖のために神殿で儀式を行うように勧告していた。

次に述べる出来事は，聖徒たちが死者のために行っていた儀式の重要性を強調するものである。1884年5月，ローガン第2ワードのヘンリー・バラード監督が自宅で神殿推薦状のサインをしていたときのことである。ヘンリーの9歳になる娘が家の近くの歩道で友達と話していたところに二人連れの老人が現れた。二人は彼女に声をかけ，新聞を渡し，父親に見せるように言った。

娘はそのとおりにした。バラード監督が見ると，それはイギリスで発行された『ニューベリー・ウィークリー・ニューズ』（*Newbury Weekly News*）で，そこにはバラード監督と父親の知人60人以上の名前が，系譜付きで掲載されていた。新聞の発刊日を見ると1884年5月15日で，印刷されてわずか3日後に受け取ったことになる。まだ飛行機はなく，郵便はイギリスからアメリカ西部まで数週間を要する時代であり，これは奇跡であった。

翌日，バラード監督はその新聞を携えて神殿に行き，神殿長のマリナー・W・メリルにいきさつを話した。メリル神殿長はこう答えた。「バラード兄弟，幕のかなたのだれかが早く儀式を施してもらいたくて，あなたにこの新聞を渡せばすべてしてくれると考えたのでしょう。」[7] この新聞は現在，ユタ州ソルトレーク・シティーの教会歴史図書館に保管されている。

迫害にもかかわらず，教会指導者はアメリカ西部の未開の地域への入植を奨励し続けた。1885年初頭には多くの家族がメキシコのソノラとチワワに移

住し，コロニア・フアレス，コロニア・ディアスなどの町を建設している。メキシコ北部のほかの地域でも教会員の入植者を受け入れた。

教会員は北方のカナダへも開拓の努力を傾けた。キャッシュ盆地ステークの会長であったチャールズ・O・カードは，1886年にアルバータ州南部に末日聖徒の町を開いた。1888年の冬までには100人以上の末日聖徒がカナダ西部に住むようになっている。1890年代になるとさらに大勢の入植者を得て，灌漑設備の建設や鉄道の敷設が行われた。こうしてアルバータは，大勢の教会指導者の育つ場となった。

公式の宣言

1880年代も末期になると，合衆国政府は多妻結婚実施者から選挙権や陪審員として奉仕する権利を剥奪する追加法律を通過させるとともに，教会が所有できる財産を厳しく制限するようになった。このためさらに多くの父親たちが隠遁生活を余儀なくされ，末日聖徒の家族は苦境に陥った。そこでウッドラフ大管長は導きを求めて神に祈り，1890年9月23日の夕方，霊感の下に公式の宣言をしたためた。教会員の多妻結婚の実施を中止するという内容の文書である。主は示現を通してウッドラフ大管長に，多妻結婚をやめなければ合衆国政府が神殿を差し押さえ，生者と死者のための業が執行できなくなる様子を示されたのであった。

1890年9月24日，大管長会と十二使徒定員会が公式の宣言に支持を表明し，1890年10月の総大会では聖徒たちの承認を得た。今日この公式の宣言は教義と聖約の中に「公式の宣言一」として収められている。

教会のこの動きに呼応して，当局は重婚禁止法違反の罪に問われていた末日聖徒の男性を赦免し，迫害の多くはやんだ。しかし，ウッドラフ大管長はこう説明している。「もしも天の神がわたしの行ったことを行うようにわたしに命じられなかったならば，わたしはすべての神殿を手放し，わたし自身監獄に入り，またほかのすべての人もそこへ行かせたことでしょう。時が来て，それを行うように命じられたとき，わたしにはそれはすべて明らかでした。そこで，わたしは主の前に行き，主が書くように告げられたことを書き記したのです。……」（「『宣言』に関するウィルフォード・ウッドラフ大管長の三つの説教からの抜粋」公式の宣言一の後に掲載）多妻結婚は，合衆国議会ではなく神により公式に中止されたのである。

系図協会

末日聖徒が系図協会を設立するかなり前から，教会員は亡くなった先祖の生活の情報を載せた記録を集めていた。ウィルフォード・ウッドラフ，オーソン・プラット，ヒーバー・J ・グラントをはじめとする人々は数千人の先祖の名前を入手し，神殿の儀式を行った。1894年，大管長会は系図協会の設立を指示し，初代指導者としてフランクリン・D・リチャーズを任命した。図書館を設け，系図協会の代表者は全世界に赴き，神殿儀式を執行できる名前を探した。系図協会はやがて家族歴史部となった。

1894年4月の総大会で，ウッドラフ大管長は系図事業に関して啓示を受けたことを発表した。神が末日聖徒に次のように望んでおられると宣言したのである。「系図をできるかぎりさかのぼって調べ，先祖と結び固めを行うように。子らが親と結び固められ，この鎖（くさり）をできるかぎり長くつなげるように。……これは主の民への主の御心（みこころ）である。そして，もしも皆さんがそのことについて思いめぐらすならば，それが真実であることに気づくでしょう。[8] 今でも末日聖徒は，亡くなった先祖の記録を調べ，神殿の儀式を行うように奨励されている。

1885年から1900年までの間，多くの教会員が系図伝道を行った。彼らはソルトレーク・シティーに招待されて中央幹部から伝道に向けて祝福を受け，宣教師であることを示す名刺と召しの手紙を受け取った。彼らは親族を訪問し，墓碑銘を書き写し，教区記録や家族伝来の聖書を探究し，神殿儀式を執行できる貴重な記録を収集した。宣教師の多くは，霊的な経験をしたと報告している。主がともにおられ，必要な資料や親族のもとに導いてくださっていることがはっきりと分かったのである。[9]

ソルトレーク神殿の奉献

ウィルフォード・ウッドラフ大管長は生涯の大半を神殿事業にささげた。彼はセントジョージ神殿の初代神殿長であり，マンタイ神殿を奉献している。そして，ソルトレーク神殿は隅石が置かれて40年が経過しており，ウッドラフ大管長はその記念すべき神殿の奉献を大いなる期待をもって待ち望んでいた。そしてついに奉献式が1893年4月6日から5月18日にかけて行われ，約7万5,000人の参列を見た。[10]

4月6日の初回の奉献式の後，ウッドラフ大管長は日記にこう記している。「神の御霊（みたま）と力がわたしたちに宿った。預言と啓示の霊がわたしたちに下り，人々の心は和らいだ。そして，たくさんのことがわたしたちの前に明らかに

された。」[11] 末日聖徒の中には天使を見た者，歴代の大管長や過去の指導者を見た者がいた。[12]

ウッドラフ大管長の90歳の誕生日には，何千人もの日曜学校の子供たちがテンプルスクウェアのタバナクルを埋め，大管長に敬意を表した。大管長はこれに感動して，涙を流しながら子供たちに次の話をした。10歳のときにプロテスタントの日曜学校に出席し，使徒や預言者について読んだときのことである。家に帰ると，使徒や預言者にこの地上で再び会うまで生きていたいと祈った。今や彼は使徒や預言者を前にして立っている。彼の祈りは何十倍にもなってこたえられたのであった。[13]

それから1年後の1898年9月2日，ウッドラフ大管長はサンフランシスコ訪問中に死去した。

ロレンゾ・スノー大管長と什分（じゅうぶん）の一

ウッドラフ大管長の死後，十二使徒定員会会長のロレンゾ・スノーが大管長となった。彼は，その責任のために長い間備えられた，賢明で思いやりの深い指導者である。それまでの末日の歴代の預言者とすべて面識があり，その全員から教えを受けていた。1900年11月，タバナクルに集まった聖徒たちに，かつてはよく預言者ジョセフ・スミスとその家族のもとを訪れ，テーブルを囲んで食事をし，個人的に話をしたと語っている。彼はジョセフが神の預言者であることを知っていた。主がその真理を「最も明確かつ完全な形で」[14] 示されたからである。

スノー大管長の時代に教会は深刻な財政危機に陥った。連邦政府が多妻結婚を禁止する法律を制定したためである。スノー大管長は教会を衰弱させてしまう負債から脱出するための方法について熟慮を重ね，主に導きを求めて祈った。そして1899年4月の総大会の後，ユタ州セントジョージを訪れるように霊感を受けた。現地の集会で話をしていた大管長はしばし絶句し，再び話を始めたときに啓示を受けたことを宣言した。教会員は什分の一の律法を無視してきており，主は大管長に，教会員が前よりも忠実に完全な什分の一を納めるならば，祝福が雨のように注がれると言われたのである。

スノー大管長はユタ中の聖徒たちに什分の一の大切さを説いて回った。聖徒たちはその勧告に従ったので，その年の什分の一は前年の2倍となった。そして1907年までに教会は債務をすべて返済し，借金から完全に解放されたのである。

さて，1898年の青年女子相互発達協会の中央管理会のレセプションで，

ジョージ・Q・キャノン副管長は，大管長会が「賢明で分別のある女性を宣教師として伝道に」召す決定をしたことを発表した。[15] それ以前に，夫に伴って伝道地に赴く姉妹は少数いたが，教会が正式に姉妹を主イエス・キリストの大使である宣教師として召し，任命したのはこれが最初である。姉妹には宣教師としての奉仕の義務はないが，この数十年間に何千人もの姉妹たちがこの特権を行使し，専任宣教師として雄々しく主に仕えてきた。

ロレンゾ・スノー大管長は教会を20世紀に導いた指導者である。新世紀に入ったころの教会はステークが43，伝道部が20，ワードと支部が967であった。教会員数は28万3,765で，その大半がアメリカ合衆国のロッキー山麓（さんろく）地帯に住んでいた。儀式を執行していた神殿が4か所，教会についての記事を載せた『ジュブナイル・インストラクター』（*Juvenile Instructor*），『インプルーブメント・エラ』（*Improvement Era*），『ヤングウィメンズジャーナル』（*Young Women's Journal*）が教会員のもとに届けられていた。当時は，少なくともあと一つの伝道部が開かれるだろうとのうわさが流れていたぐらいで，後の100年に何が起こるかは，当時の末日聖徒には知るよしもなかった。しかしながら彼らには，教会の行く末についての預言が成就するとの確信があったのである。

発展する教会

1901年から1970年まで，4人の預言者が発展する教会を管理した。ジョセフ・F・スミス，ヒーバー・J・グラント，ジョージ・アルバート・スミス，デビッド・O・マッケイである。これらの大管長たちは，荷車の時代からロケットで宇宙に行く時代までを管理することになる。また，2度の世界大戦と世界恐慌が聖徒たちを苦しめた。この間9つの神殿が建設され,1901年には50のステーク，教会員数が30万であったのが，1970年には500のステークと280万の教会員数にまで発展した。

ジョセフ・F・スミス大管長

ジョセフ・F・スミスは1838年，ミズーリでの迫害が最も激しかったころ，ファーウェストの神殿用地の近くの小さな小屋で生まれた。ジョセフの誕生のとき，父親のハイラム・スミスはミズーリ州リッチモンドで拘留されており，母親のメアリー・フィールディング・スミスは独りで子供の世話をしなければならなかった。

幼いジョセフは，家族とともにミズーリからイリノイ州ノーブーへ移った。そこで一生の間記憶に残る出来事が起きる。カーセージの監獄で父と叔父の命が奪われたのである。ジョセフは父との最後の別れの場面を決して忘れることはなかった。父ハイラムはカーセージへ向かって馬で出かけようとするときに，息子ジョセフを抱き上げてキスをし，下ろした。ジョセフは，近所の人が夜，窓をたたいて父ハイラムが殺されたことを知らせたときの，あの恐怖の瞬間を決して忘れることができなかった。また，ノーブーのマンションハウスのひつぎに横たわった父と叔父の姿は，ジョセフの記憶から消えることはなかったのである。

少年ジョセフはほぼ一夜にして大人になった。メアリー・フィールディング・スミスと家族がノーブー脱出の一団に加わったとき，7歳のジョセフは1台の荷車の御者であった。そして13歳のときに母親が亡くなり，孤児となった。また16歳をまだ迎えないうちにサンドウィッチ諸島（後のハワイ諸

島）に伝道に行き，ホノルル到着後3か月で現地語を流暢に話せるようになった。これは，十二使徒のパーリー・P・プラットとオーソン・ハイドが任命のときに授けた御霊の賜物によるものであった。そして21歳で再び伝道に出た。今度はイギリス諸島である。

ブリガム・ヤング大管長がジョセフを使徒に召すよう霊感を受けたとき，ジョセフは28歳であった。その後4人の大管長の副管長として奉仕した。そして1901年のロレンゾ・スノー大管長の死去に伴い，ジョセフ・F・スミスは第6代大管長となった。彼は福音の真理を解説し擁護する能力に優れていたことで有名である。彼の説教と著作は『福音の教義』（*Gospel Doctrine*）として編纂され，教会の重要な教義解説書となっている。

20世紀の幕開けの数十年間に，教会は幾つかの重要な発展を遂げる。引き続き什分の一を強調し，聖徒たちもそれに忠実にこたえたことにより，教会は負債をすべて返済することができた。その後は繁栄が訪れ，教会は神殿や教会堂，訪問者センターを建設し，教会史跡を購入した。また教会はソルトレーク・シティーに教会執務ビルを建設し，現在でも本部として用いている。

スミス大管長は神殿を世界中に建設する必要があると認識し，1906年にスイスのベルンの大会で手を伸べてこう宣言した。「この地のあちらこちらに神殿が建ち，行って死者を贖う時が来ることでしょう。」[1] ヨーロッパ初の神殿であるスイス神殿は，その約半世紀後，スミス大管長が預言をしたベルン市の郊外に建設された。またスミス大管長は1913年にカナダのアルバータ州カードストンの神殿用地を奉献し，1915年にはハワイ神殿を奉献した。

1900年代初頭から，教会の指導者は聖徒たちに，ユタに集合するのではなく自分の国にとどまるように奨励し始めた。1911年，ジョセフ・F・スミスと副管長たちは次のような声明を発表している。「我々の民は母国に残って地元の教会を永続的なものとし，伝道の業を助けるのが望ましい。」[2]

死去する6週間前，ジョセフ・F・スミス大管長は死者の贖いに関して重要な啓示を受けた。彼は示現の中で霊界での救い主の業を見，忠実な聖徒たちが霊界で続けて福音を教える機会にあずかることを知った。この啓示は1976年に高価な真珠に加えられ，1979年には第138章として教義と聖約に移行された。

ヒーバー・J・グラント大管長

1918年11月，ジョセフ・F・スミス大管長は死去の直前に，当時十二使徒会会長であったヒーバー・J・グラントの手を取り，このように言った。「主

の祝福があるように。ヒーバー，主の祝福があるように。あなたには大きな責任があります。この業が人の業ではなく神の御業(みわざ)であることを，いつも覚えておいてください。主はどんな人間よりも偉大です。主はだれに主の教会を導いてほしいか御存じです。間違われることは決してありません。」[3] こうしてヒーバー・J・グラントは，1882年以来使徒として奉仕した後に62歳で第7代大管長となった。

目標を達成することに対してヒーバー・J・グラントが見せた執念は，少年のころから並外れたものだった。この特性は生涯変わらなかった。未亡人の独りっ子として育てられたグラントは，同年代の少年がするような遊びに加わることはほとんどなかった。野球チームの入団テストのとき，運動神経が鈍いから向いていないとばかにされ，チームに入れてもらえなかった。しかしくじけることなく，長い時間をかけて投球練習をし，やがて別のチームに入って何度も地元の大会で優勝した。

少年のころ，グラントは簿記の仕事がしたいと思った。そのころしていた靴磨きの仕事より収入がかなり良かったからである。当時，簿記をするには字が上手でなければならなかった。しかしグラントは字が汚く，鶏の足跡のようだと二人の友達から言われていた。このときもグラントはくじけなかった。時間をかけて練習したのだ。やがてグラントは字がきれいなことで有名になり，大学でペン習字を教え，重要書類の作成をよく依頼されるまでになった。ヒーバー・J・グラントは，主と同胞(はらから)のために怯むことなく最善を尽くすという点で，多くの人の偉大な模範であった。

グラント大管長は賢明な，傑出したビジネスマンであり，その才能のおかげで世界的な経済不況にあった教会と，不況のあおりを受けた人々を導くことができた。人は政府に頼るのではなく，自立して主に頼り，勤勉に働くべきであるという固い信念を持ち，身銭を切って，貧しい人々を大勢助けた。

1930年代に入ると，世界中の多くの人と同様，聖徒たちも大恐慌による失業や貧困を味わうようになった。そして1936年，グラント大管長は主からの啓示により，貧しい人々を援助し全教会員を自立させる福祉プログラムを確立した。そのプログラムの中で，大管長会はこう述べている。「わたしたちの第一の目的は，可能なかぎり，忌まわしい怠惰や施しのもたらす悪弊を除去し，独立心，勤勉，倹約，自尊心を再びわたしたちの中に確立する体制を築くことである。教会の目的は，人々の自立を助けることにある。勤労が再び教会員の生活を貫く原則にならなければならない。」[4]

副管長として28年間働いたJ・ルーベン・クラーク・ジュニアは次のよう

教会は困窮者に食料を供給するために福祉工場を建設した。
教会員は労働を提供した。これは1933年に
甜菜（てんさい）農場で働く聖徒たちを描いたものである。

に力説している。「福祉計画の真の長期目標は，与える側と受ける側双方の教会員の人格を築き，人の心の奥深くに眠っている最も優れたものをすべて解き放ち，内に秘められた豊かな精神を開花させ結実させることである。」[5]

1936年には教会全体の福祉事業を監督する中央福祉委員会が発足，パイオニアステークのハロルド・B・リー会長が委員会の実務運営ディレクターとなった。後にデゼレト産業ストアも開かれて失業者や障害者の救済が行われ，さらに困窮者の援助のため農業ならびに生産のプロジェクトも確立された。福祉事業は今日でも貧しい教会員や世界中の劣悪な環境の下に生活する大勢の人にとって祝福となっている。[6]

伝道活動はその間も発展を遂げていたが，グラント大管長自身が非常に珍しい改宗にかかわることとなった。イタリア人牧師であるビンチェンツォ・ディ・フランチェスカがニューヨークの町を自分の教会に向かって歩いていたときのことである。灰でいっぱいになったたるの中に，表紙の取れた1冊の本が置き去りにされているのが目に留まった。手に取って開いてみると，

そこにはニーファイ，モーサヤ，アルマ，モロナイなどといった，見慣れない名前が書かれていた。本のタイトルも起源も分からないまま，読んでみたいという気持ちに駆られ，書いてあることが真実かどうか，祈って尋ねることにした。祈った後にフランチェスカはこう語っている。「何かただならぬ価値を持つものを見つけたようでうれしくてたまらず，心が安らぐのを感じた。そして，言葉で表現できないような喜びをかみしめた。」フランチェスカはその本の教えを自分の教会の信者に伝え始めた。そのためフランチェスカは教会の指導者から懲戒処分を受け，本の焼却まで命じられたが，従わなかった。

後にフランチェスカはイタリアに戻り，1930年に，その本が末日聖徒イエス・キリスト教会の発行したものであることを知る。ユタの教会にあてて書いた手紙はグラント大管長のもとに届けられた。グラント大管長はイタリア語のモルモン書を送り，フランチェスカの名前をヨーロッパ伝道部の部長に伝えた。当時は戦時中でもあり，なかなかバプテスマを受けることができなかったが，ついに1951年１月18日，フランチェスカは教会員となった。シシリー島初の教会員である。それから５年後，スイス神殿でエンダウメントを受けた。[7]

1922年５月６日，グラント大管長は教会初のラジオ局を奉献した。そして２年後，ラジオ局は総大会の実況放送を行い，さらに多くの人に総大会でのメッセージが届けられるようになった。それから程ない1929年７月，タバナクル合唱団が最初の『ミュージック・アンド・スポークンワード』（*Music and the Spoken Word*）の放送を行った。毎週行われる霊感あふれる音楽とメッセージの番組である。この番組は現在も続けて放送されている。

グラント大管長は1945年５月14日に死去した。大管長として奉仕した期間は27年に及ぶ。ブリガム・ヤングに次いで，長く大管長を務めたことになる。

ジョージ・アルバート・スミス大管長

ヒーバー・J・グラントの跡を継いで大管長となったのはジョージ・アルバート・スミスである。彼の人生は，福音に従って生活するときに幸福が訪れることを地で行くようなもので，こう証（あかし）している。「わたしが幸福や喜びとして挙げる値打ちのあることはすべて，神の戒めを守り，その忠告と勧告に従った結果もたらされたものでした。」[8]

神の戒めを守り教会指導者の勧告に従うことは，何代にもわたってスミス大管長の家族の義の伝統となっていた。スミス大管長は，父方の祖父であるジョージ・A・スミスの名を受け継いでいる。ジョージ・A・スミスは預言者

ジョセフのいとこであり，ブリガム・ヤング大管長の副管長を務めた人であった。ジョージ・アルバートの父ジョン・ヘンリー・スミスは，ジョセフ・F・スミスの副管長であった。ジョージ・アルバートは33歳で十二使徒定員会に召された。1903年から1910年までの間，父ジョン・ヘンリーと息子のジョージ・アルバートは十二使徒定員会で席を共にすることになった。父と息子が十二使徒定員会で同時期にともに奉仕するのは，この神権時代ではほかに例がない。

ジョージ・アルバート・スミスの42年間にわたる十二使徒定員会での奉仕は雄々しいものであったが，健康は優れなかった。ユタ南部で鉄道の調査を行っていたときに太陽光で両目を患い，手術をしたものの視力をほとんど失った。また，ますます厳しさを増す重圧や要求に，衰弱した体はさらに弱まり，1909年，過労で倒れた。医師が絶対安静を命じたためにかえって自信を失い，役立たずという思いにさいなまれ，極度の不安状態に陥った。

このつらい時期，ジョージの夢に，大きな湖のほとりにある美しい森が出てきた。森の中を歩いてしばらくすると，祖父のジョージ・A・スミスがこちらに向かって来る。ジョージは駆け寄った。ところが祖父は近づくと立ち止まってこう言った。「おまえがわたしの名を名乗って何をしたのか知りたい。」ジョージの脳裏にはそれまでの半生の出来事が次々に浮かんだ。彼はへりくだってこう答えた。「あなたに恥をかかせるようなことは何一つしていません。」この夢はジョージに新たな精神力と活力をもたらし，間もなく仕事に戻ることができた。彼はこの夢のことを，自分の人生を変えた出来事であると度々語っている。[9]

ジョージ・アルバート・スミスが教会を導いたのは1945年から1951年であるが，この間に教会員総数が100万に達し，アイダホ州のアイダホフォールズ神殿が奉献された。また第二次世界大戦で中断されていた伝道活動が再開されている。

また，大戦で打撃を受けたヨーロッパの聖徒たちのために，組織的な救済活動が行われ，アメリカ合衆国の教会員は衣服や日用品を提供するよう呼びかけられた。スミス大管長はハリー・S・トルーマン合衆国大統領と会見し，提供された食糧や衣服，寝具をヨーロッパに送付する許可を得た。スミス大管長はその会見の模様を次のように記している。

トルーマン大統領はこう言った。「『それらを送ってどうしようとおっしゃるのですか。ヨーロッパのお金は値打ちがありませんよ。』

わたしは答えた。『お金が目当てではありません。』大統領はわたしの顔をまじまじと見てこう言った。『これだけのものを無料で提供するとおっしゃ

るのですか。』

わたしは言った。『もちろん差し上げます。あの人たちもわたしたちの兄弟ですし，現に今，困っているのですから。神の恵みによりわたしたちには余剰品があります。政府の協力が頂けるのでしたら，喜んでお送りします。』

大統領は言った。『よく分かりました。わたしたちでできることは喜んで何でもしましょう。』」[10]

ユタで寄贈品が仕分けられ，海外へ向けて箱詰めされていた現場に，スミス大管長が視察にやって来た。大管長は，惜しみなくささげられた大量の日用品を見て涙を流した。しばらくして，自分が着ていた新しいオーバーコートを脱ぐと，こう言った。「これも送ってください。」近くにいた人から，これから寒くなるのでコートは必要ですよと言われたが，大管長は送ってくれと言って聞かなかった。[11]

ヨーロッパでの伝道部の再開を担当したのは，十二使徒定員会会員のエズラ・タフト・ベンソン長老である。救済物資の分配と聖徒たちの霊的な必要を満たすことがその使命であった。ベンソン長老はヨーロッパ訪問の初期に，ライン川のほとりの都市，ドイツのカールスルーエで大会を行った。ベンソン長老はそのときの経験についてこう語っている。

「わたしたちはやっとのことで会場にたどり着きました。奥まった所にある，爆撃の跡が残る建物です。聖徒たちはおよそ2時間待っていました。わたしたちが大会に出席するかもしれないと聞いて，期待していてくれたのです。壇に上がりながら見ると，その場に集った全員が泣いていました。それはわたしにとって生まれて初めて見る光景でした。彼らにとっては，6年から7年という長い期間の後に，シオンの代表者がようやく戻って来た瞬間だったのです。……顔を上げた彼らは青白くやせこけて，多くはぼろをまとい，中にははだしの人もいました。でも，この偉大な末日の業が神の御業（みわざ）であることを証し，主の祝福に感謝する目には，信仰の光が輝いていました。」[12]

ベンソン長老の責任の一つは，貨車127両分の食糧，衣服，寝具，薬品をヨーロッパ全土に分配することであった。それから何年もたって，トーマス・S・モンソン副管長がドイツのツビカウの新しい教会堂の奉献式に訪れると，年配の兄弟が目に涙を浮かべながら近寄って来て，エズラ・タフト・ベンソン大管長によろしくと言う。「大管長に伝えてください。大管長はわたしの命を救ってくださいました。祖国のたくさんの兄弟姉妹の命を救ってくださいました。アメリカの教会員の方々から贈られた食糧や衣服を届けてくださったからです。」[13]

1947年，ドイツの聖徒たちに送るじゃがいもを運ぶ
コルネリウス・ザッピー伝道部長と宣教師たち。

オランダの聖徒たちは，飢えに苦しむドイツの聖徒たちのために真のクリスチャンとしての奉仕活動を行う機会を得た。オランダの教会員は戦争中に多大な苦難を味わい，アメリカ合衆国の教会員から福祉援助を受けていた。1947年の春，独自の福祉事業を開始するようにとの指導を受けて，聖徒たちは熱心に取り組んだ。最初の事業としてジャガイモの植え付けを行い，大収穫を待つばかりとなっていた。

ちょうどこのころ，東ドイツ伝道部のウォルター・ストーバー部長がオランダを訪問し，目に涙を浮かべながらドイツの教会員の飢えと苦難の状況を説明した。そこでオランダ伝道部のコルネリウス・ザッピー部長は教会員に，今育てているジャガイモをドイツの教会員に提供してはどうかと提案した。ドイツは戦争中は敵国であったにもかかわらず，オランダの教会員はこれに喜んで同意し，ジャガイモの生長にいっそう関心を寄せるようになった。収穫量は予測を大きく上回り，オランダの聖徒たちは75トンのジャガイモをドイツの兄弟姉妹に届けることができた。そしてまた1年後には，90トンのジャガイモと9トンのニシンを送っている。[14]

聖徒たちの，こうしたキリストの愛を示す行為は，キリストの愛をあふれ

んばかりに放ち続けるジョージ・アルバート・スミス大管長の姿そのものであった。スミス大管長はこう語っている。「兄弟姉妹の皆さん，わたしは皆さんにこう申し上げることができます。この世で最も幸福な人々は隣人を自分のように愛し，毎日の行いに神の祝福への感謝を表す人々です。」[15]

デビッド・O・マッケイ大管長

デビッド・O・マッケイはジョージ・アルバート・スミス大管長の副管長であった。1951年の春，スミス大管長の病状が少し良くなったので，マッケイ副管長は妻のエマ・レイと，ソルトレーク・シティーを離れ，延び延びになっていたカリフォルニアへの休暇旅行に出ることを決めた。セントジョージに1泊したのだが，マッケイ副管長は翌朝早く目が覚め，はっきりと教会本部に戻らなければならないと感じた。そしてソルトレーク・シティーに戻ってから数日して，スミス大管長は脳いっ血を起こし，1951年4月4日に死去した。こうして，デビッド・O・マッケイは第9代大管長となった。

マッケイ大管長は教会を指導するためによく備えられた人物である。イギリスでの伝道に召された父に代わり，8歳のとき，家の男のする仕事を受け持つようになった。二人の姉は亡くなったばかりで，母親は次の子を宿していた。農場の仕事は身重の妻には荷が重すぎると感じたデビッドの父親は，こう言った。「わたしが伝道に出るのは無理だね。」するとマッケイ姉妹は夫の顔を見て言った。「もちろん召しを受けるべきです。わたしのことは心配しないで。デビッド・Oとわたしでうまくやりますから。」[16] 父母の信仰と献身は，生涯にわたって主に仕えようとの望みを幼いデビッドの心に植え付けた。1906年，32歳で十二使徒に召され，それから大管長に召されるまで45年間，十二使徒評議会で，また大管長会で（ヒーバー・J・グラントならびにジョージ・アルバート・スミス大管長の副管長として）奉仕した。

マッケイ大管長は広い地域を旅する日程を立て，当時世界中に広まっていた教会の聖徒たちへの訪問を始めた。訪問したのは，イギリス，ヨーロッパ，南アフリカ，ラテンアメリカ，南太平洋，その他の地域である。ヨーロッパ滞在中はロンドンとスイスにおける神殿建設の下準備を行った。大管長としての召しを終えるまでにほぼ全世界を回り，教会員を祝福し励ました。

マッケイ大管長は伝道活動を改めて強調し，教会員一人一人に毎年少なくとも一人の新会員を教会に導き入れる決意をするよう求めた。「すべての会員は宣教師である」と繰り返し述べた勧告はだれもが知るところとなった。

1952年，専任宣教師がより効果的に働けるように，初の公式の伝道プラン

幼少時代のデビッド・O・マッケイ大管長と家族。大管長は父親のひざの上である。

が全世界の宣教師に配付された。『福音教授の系統的プログラム』（*A Systematic Program for Teaching the Gospel*）と呼ばれるものである。御霊によって教えることを強調した7つのレッスンから成り立っており，神会の属性，救いの計画，背教と回復，モルモン書の重要性について明確に教えるものであった。全世界の改宗者の数は劇的に増大した。1961年，教会指導者は世界中の伝道部長を対象に初めてのセミナーを開催し，家族が友人や隣人と親しくなり，次いで家庭に宣教師を招いて福音を教えるという方法を教えた。また同じ1961年には新任の宣教師のために言語訓練プログラムが作られ，後に宣教師訓練センターが建設された。

マッケイ大管長の時代，アジアでの教会の成長の種が合衆国軍の教会員によってまかれた。韓国で軍務に就いていたユタ州アメリカンフォーク出身のある若い兵卒は，合衆国軍の兵士が道で韓国人を押しのけ肩で風を切って歩いている姿を見た。そこで若い教会員であった彼は逆に，韓国人に道を譲った。また現地の人の名前を覚えるように努め，出会うと元気にあいさつをした。ある日，友人5人と軍の食堂に入って行くと，列があまりにも長かったので，彼はテーブルに戻って待っていた。すると，すぐに韓国人のウェーターがトレーに料理を載せてやって来た。そこで彼は腕の記章の一本線を見せて，「わたしはただの兵卒ですよ。料理を持って来てもらうことはできません」と言った。するとウェーターはこう答えた。「給仕させてください。

あなたは一流のクリスチャンです。」[7]

1967年，それまで宣教師や軍人によって福音が効果的に宣(の)べ伝えられてきた韓国では，モルモン書が韓国語に翻訳された。それから，ステークやワードが国中に組織されるようになった。

日本でも宣教師の働きは著しかった。第二次世界大戦後，日本の教会員は数年の間，教会本部との接触があまりなかった。しかし，教会を強固にするのに貢献したのは，戦後日本に駐留した軍の中にいた末日聖徒である。1945年，佐藤龍猪(たつい)はお茶を丁寧に断った末日聖徒の軍人に感銘し，いろいろ質問をしたことがきっかけとなってバプテスマを受けた。翌年，家族の何人かも改宗した。佐藤兄弟にバプテスマを施したのはエリオット・リチャーズ，そして佐藤姉妹にバプテスマを施したのが，後に十二使徒定員会会員として召されたボイド・K・パッカーである。佐藤家は，多くの日本人にとって回復された福音に初めて接する場となった。こうして，第二次世界大戦では日本と戦ったアメリカからの宣教師が，日本各地を伝道地として開拓していったのである。

フィリピンに教会が今日(こんにち)あるのも，第二次世界大戦後に駐留した合衆国軍の軍人その他の教会員の努力に負うところが大きいが，フィリピンで教会が大きく発展し始めたのは1961年になってからのことである。末日聖徒ではないある若いフィリピン人女性がモルモン書のことを耳にし，何人かの末日聖徒に会った結果，知り合いの政府の役人のところへ行って，末日聖徒の宣教師をフィリピンに入国させる許可を得るべきだと感じるようになった。やがて許可が下り，その1か月後，十二使徒定員会のゴードン・B・ヒンクレー長老が訪問，フィリピンを伝道地として再奉献したのであった。

1950年代の教会の劇的な発展を受けて，マッケイ大管長は教会全般のプログラムを調整する神権コーリレーションプログラムを発表した。教会のすべてのプログラムを十分に祈りをもって研究し，教会の最も重要な目標に合っているかどうかを調べるため，十二使徒定員会のハロルド・B・リー長老を長とする委員会が発足した。1961年，大管長会から承認を受けたリー長老は，すべての教会教科課程資料の企画，制作，実施を統制する方針を策定すると発表した。それまで教科課程の資料の多くは各補助組織が独自で制作していた。この新しい指示は，プログラムや教材の不必要な重複を避け，世界に広がる教会において，あらゆる年代の，あらゆる言語の人に，もっと効果的に福音を教えることを目指したものであった。

また教会は，すべてのプログラムや活動をさらに効果的に調整するために，

ほかにも変更を加えていった。その結果，福祉，伝道，家族歴史活動が教会の使命を果たすうえでもっと重要視されるようになった。ジョセフ・スミスの時代から行われてきたホームティーチングは，教会員の物心両面にわたる必要を満たす手段として，1960年代になって再度強調されるようになった。また，福音教授の強化策としては，教会付属図書館の設立や教師養成プログラムの開始が挙げられる。1971年には中央幹部が監修する3種類の英文機関誌が発行された。子供向けの『フレンド』（*Friend*），若人向けの『ニューエラ』（*New Era*），成人向けの『エンサイン』（*Ensign*）である。また教会は，これとほぼ時期を同じくして，それまで各伝道部がそれぞれ独自に出していた各国語による機関誌を統一した。現在では一つの機関誌が各国語に翻訳され，世界各地の教会員に送られている。

デビッド・O・マッケイ大管長は幸福の源として，また現代社会における試しや誘惑から身を守る最も確かなものとして，家族や家庭生活の大切さを長年にわたって強調してきた。家族を愛していることや，妻エマ・レイから揺るぎない支持を受けてきたことをよく話題にした。マッケイ大管長の時代，両親が子供たちと親しくなり，福音を教える手段として，週に1度家庭の夕べを開くことが改めて強調された。

家族を強め家庭を堅固な場とすることの大切さを強調するうえで預言者の助けとなったのが，扶助協会である。扶助協会は，ノーブーで創設されて以来，世界中の何千何万という女性を擁するまでに成長した。女性たちは個人的にもまた家庭にあっても，扶助協会を通して受けた教えや人々との交わりによって祝福を受けてきた。1945年から1974年まで中央扶助協会会長を務めたベル・S・スパッフォードは有能な指導者で，1968年から1970年に合衆国国家婦人会議の会長の任にあったときに国から表彰を受けている。

マッケイ大管長は1970年1月に96歳で死去した。彼の在任期間はほぼ20年で，その間教会員総数はほぼ3倍となり，福音のメッセージを全世界にもたらす大きな一歩が踏み出された。

福音の祝福を味わう世界中の末日聖徒たち。

世界に広がる教会

ジョセフ・フィールディング・スミス大管長

デビッド・O・マッケイ大管長が亡くなった後，もうすぐ93歳になろうとしていたジョセフ・フィールディング・スミスが大管長に召された。ジョセフ・フィールディング・スミスは，ジョセフ・F・スミス大管長の息子である。

少年のころ，ジョセフ・フィールディング・スミスは神の御心（みこころ）を知りたくてたまらなかったため，10歳までにモルモン書を2度読み，どこへ行くにも聖典を持ち歩いていた。遊び仲間は，ジョセフがいないことが分かると干し草置き場に行った。いつもそこで聖文を読んでいたからである。後にスミス大管長はこう語っている。「幼いころの記憶をたどってみると，字が読めるようになってからというもの，わたしのいちばんの楽しみは聖文を研究することでした。主イエス・キリストや預言者ジョセフ・スミス，それに人の救いのために行われてきた業について読むことが，世界中でいちばん好きだったのです。」[1]

子供のころの聖文学習は，スミス大管長の持つ聖文と教会歴史に関する広範な知識の基となっている。これが，スミス大管長の説教や，20冊を超える著書，数十点に及ぶ教義に関する重要な記事に生かされている。

彼の在任中には，アジア（東京）とアフリカ（南アフリカのヨハネスバーグ）で最初のステークが誕生している。教会員が増加するにつれて，スミス大管長と副管長は世界各地を訪問して地域大会を開き，地元の指導者を指導した。これは，地元の教会員にとっては中央幹部と接する貴重な機会となった。教会で初めて地域大会が開かれたのは，イギリスのマンチェスターである。また，全世界の人々を健康面で援助する健康管理宣教師が召されるようになったのもこの時期である。この宣教師たちの役割は，健康上の基本原則や衛生管理を教えることであり，間もなく200人を超える健康管理宣教師が召された。

1912年以来，教会は合衆国西部各地の高等学校に隣接した建物でセミナリーを行ってきた。1920年代には，末日聖徒の学生が多く出席する大学でインスティテュートが開講されるようになった。1950年代の初めにはロサンゼルスで早朝セミナリーのコースが始まり，やがて1,800人以上の生徒が出席す

最初の地域大会がジョセフ・フィールディング・スミス大管長の
管理の下，イギリスで開かれた。
説教壇に立つのはハワード・W・ハンター長老

るようになった。教会員でない人々の目には，15歳から18歳の末日聖徒の若人が週に5日間，朝5時30分に起きて宗教のクラスに出席することは非常な驚きであった。1970年代前半には家庭学習セミナリーコースが開講し，世界中の末日聖徒の生徒たちが宗教教育を受けられるようになった。スミス大管長の時代，セミナリーとインスティテュートの登録数は劇的な伸びを見せている。

1972年4月，生涯最後となった公式説教の中で，スミス大管長はこう語った。「イエス・キリストの福音以外に，この世に広がる霊的な病気を癒せる薬はありません。平和な生活，物心両面での繁栄，神の王国を受け継ぐという望みは，回復された福音の中にしか見いだせないのです。わたしたちにできることの中で，福音を宣べ伝え，地上に神の王国を建設すること以上に重要なことはありません。」[2]

大管長として2年半奉仕した後，ジョセフ・フィールディング・スミス大管長は娘の家で息を引き取った。95歳であった。彼はその生涯を主の業のために雄々しく働いた。

ハロルド・B・リー大管長

ジョセフ・フィールディング・スミス大管長が亡くなった日，十二使徒定員会の先任会員であるハロルド・B・リー会長の自宅で家庭の夕べが行われた。そのとき，子供の一人が尋ねた。「大管長になったお父さんを助けたいと思っているのですが，わたしたちにいちばんしてほしいことは何ですか。」リー大管長の答えはこうだった。「信仰を誠実に守りなさい。わたしが教えたように福音に従って生活すればそれでいい。」この言葉はすべての教会員に当てはまる。大管長になって初めての記者会見で，ハロルド・B・リーはこう宣言した。「神の戒めを守ってください。これこそ，この困難な時代に個人と国家を救う道です。」[3]

ハロルド・B・リーが大管長に召されたのは1972年7月7日，73歳のときである。ヒーバー・J・グラント大管長以降の預言者の中では最も若い。リー大管長は教会福祉プログラムのディレクターとして召された1935年以来，教会の管理部門で主要な働きをしてきた（97ページ参照）。また教会のプログラムや教科課程資料を検討し，教会プログラムの簡素化とコーリレーションを，その中心となって進めてきた。高い霊性を備えたリー大管長は，天から与えられる霊感にいつもすぐこたえることにしていた。

リー大管長と二人の副管長は，2回目の地域大会をメキシコシティーで開催した。全世界に先駆けて新しい大管長会が支持されたのが，このメキシコシティー地域大会である。リー大管長はこの地で大会が開催された理由を次のように述べている。「教会の驚くべき発展のために働いてこられた……すばらしい方々に敬意を表し，称賛するためです。」

メキシコと中央アメリカの聖徒たちの多くは，メキシコシティーで地域大会が開かれることを知ると，会場に行くための計画を立てた。近所を一軒一軒回って洗濯を請け負い，5か月かけてお金をためた姉妹もいる。この姉妹はメキシコシティーに行って大会の集会すべてに出席することができた。また大会期間中に断食した聖徒も多かった。会場に来るために貯金を使い果たし，食べ物を買う余裕がなかったのだ。犠牲をささげた人々は，報いとして霊的に大きな力を得た。ある教会員は，「生涯のうちで最もすばらしい機会」だったと評している。またある人は記者にこう語った。「この数日間ここで感じた愛は，何年たっても忘れないと思います。」[4]

リー大管長は在任期間中に聖地パレスチナを訪れたが，この神権時代において聖地を訪れた預言者は，リー大管長が初めてである。またリー大管長は，小規模の神殿が世界各地に建設されることを発表した。

1973年のクリスマスの翌日，大管長に召されてわずか18か月のリー大管長は，死去した。霊の巨人が永遠の住まいに戻ったのである。

スペンサー・W・キンボール大管長

痛みと苦しみを十分に経験した人，十二使徒定員会の先任会員であるスペンサー・W・キンボールが，リー大管長死去を受けて大管長に召された。癌のため声帯のほとんどを失ったキンボール大管長の静かでハスキーな声は，末日聖徒の愛するところとなった。彼は謙遜さ，決意，勤勉さ，それに「実行しなさい」（“Do It.”）というスローガンで有名である。キンボール大管長は，全力を尽くして鎌を入れる人であった。

スペンサー・W・キンボール長老の大管長としての最初の説教は，地区代表に対してのものであった。それは出席したすべての人にとって忘れられないものとなった。その会に出席した一人は，キンボール大管長の話が始まった直後のことをこう回想している。「わたしたちは非常に強い御霊を感じました。そして，これまでの集会とは違う特別な力強い言葉に一心に耳を傾けている自分に気づきました。……それはあたかも大管長が，全能者の目的を覆い隠している幕を開けて，福音の行く末と福音の業に関するビジョンを一緒に見るようにと，わたしたちを招いているかのようでした。」

キンボール大管長は指導者たちに，「教会員の信仰生活は，主から期待されているレベルに達していません。またわたしたちはある程度そうした状態に安穏とし，満足さえしています」と指摘した。キンボール大管長が，かの有名な「歩幅を広げなさい」というスローガンを発表したのはこのときである。キンボール大管長は出席した人々に，全世界に福音を宣べ伝える業にさらに固い決意をもって臨むよう勧告した。その説教を聞いたエズラ・タフト・ベンソン十二使徒定員会会長は，「確かに，ここにイスラエルの預言者がいます」と語った。[5]

キンボール大管長の精力的な指導の下で，それまでよりもずっと多くの人々が専任宣教師になり，教会は世界中で発展を遂げた。1977年8月，キンボール大管長はワルシャワを訪れ，ポーランドの地を奉献し，主の業が発展するようにその地の民を祝福した。この時期に，宣教師訓練センターがブラジル，チリ，メキシコ，ニュージーランドで開設される。そして1978年には，世界中の伝道活動に大きな影響を及ぼす神からの啓示が発表された。それまで長年の間，アフリカ系の人々には神権が与えられていなかったが，すべてのふさわしい男性会員に神権と神殿の祝福が授けられるようになったのである。

この啓示は世界中の忠実な教会員が長い間待ち望んだものであった。アフリカで福音を受け入れた最初のグループの一人にウィリアム・ポール・ダニエルズがいる。彼は1913年に福音を知った。そしてユタを訪れ，ジョセフ・F・スミス大管長から特別な祝福を受けている。スミス大管長は彼に，忠実であればこの世でまたは次の世で神権が受けられることを約束した。ダニエルズ兄弟は1936年に忠実な教会員として世を去った。1978年の神権に関する啓示が下ったすぐ後で，ダニエルズ兄弟の娘は，父親のために神殿の儀式を行ってもらっている。[6]

ほかにも大勢のアフリカの人々が，教会の出版物や奇跡的な体験により福音の真実性について証(あかし)をはぐくむようになったものの，福音のすべての祝福を受けるまでには至っていなかった。

1978年6月に啓示が下るまで，何か月もの間キンボール大管長は，アフリカ系の教会員に神権が授けられていない現状について副管長や十二使徒たちと話し合っていた。会員が忠実であったとしても福音の祝福が完全に授けられないのなら，そういった人々の住む地域には伝道部を開設しない方がよいのではないかと感じていたのである。南アフリカでの地域大会でキンボール大管長はこう宣言した。「わたしは大いなる熱意を込めて祈りました。その結果，多くの神の子たちにとって非常に大切なものを主が用意しておられることを知りました。わたしたちがふさわしく，準備ができており，受け入れて実行する備えができたときにはじめて，主から啓示を受けることができるのです。わたしは来る日も来る日も独りで神殿の階上の部屋に厳粛な気持ちで行き，このプログラムを進めるために精神誠意努力することを真剣に主にお伝えしました。主の御心を行いたいと思ったのです。わたしはその気持ちを主にお伝えしました。『主よ，わたしは正しいことだけを行いたいと思います。』」[7]

キンボール大管長は，副管長と十二使徒定員会を神殿に集めて特別な集会を開いた。大管長は，黒人の男性教会員に神権を付与するかどうかについて自由な意見を求めた。それから聖壇の周りに輪を作り，キンボール大管長が代表して祈りをささげた。その場に出席していたブルース・R・マッコンキー長老は後にこう述懐している。「このとき，わたしたちの嘆願と信仰がこたえられました。まさしく，時が到来したのです。主はその深い御心によって，奇跡的な驚嘆すべき方法で，大管長会と十二使徒会に聖霊を注いでくださいました。それは出席しただれもがそれまで経験したことのないものでした。」[8] こうして，すべてのふさわしい男性会員が完全な神権の祝福を受けられるようになったことが，教会の指導者に明らかにされたのであった。

近年になって世界中にたくさんの神殿が建設されるようになった。ドイツのフランクフルト神殿は教会員に祝福を与えている多くの神殿の一つである。

大管長会は1978年6月8日付けで神権指導者に書簡を送り，主が下された啓示についてこう説明した。「教会のすべてのふさわしい男性会員は，人種や肌の色にかかわりなく，神権への聖任を受けることができます。」そして1978年9月30日，聖徒たちは総大会で，指導者たちから提議されたこの決定を全会一致で支持した。この書簡は「公式の宣言二」として教義と聖約に収められている。

この宣言の後，何千人ものアフリカ系の人々が教会に加入してきている。あるアフリカの改宗者の経験は，主の手が彼らをいかに祝福しておられるかを示すものである。大学を卒業して教師をしていたこの男性はある日夢を見た。塔の付いた大きな建物があって，白い衣装に身を包んだ人々がその中に入って行く。後に彼は旅先で末日聖徒イエス・キリスト教会の建物を目にし，この教会があの夢と何か関係があるのではと考えた。そこで日曜日の集会に参加した。集会の後で伝道部長夫人がパンフレットを見せてくれたので開くと，そこにはソルトレーク神殿の写真があった。それはまさにあの夢の中に

出てきた建物であった。後に彼はこう語っている。「知らず知らずのうちに涙がこぼれていました。……その気持ちは説明できません。重荷がすべて下ろされました。……懐かしい場所に戻ったような気持ちでした。わたしは故郷に戻って来たのです。」[9]

キンボール大管長の在任期間中，七十人第一定員会が再組織された。また日曜日の集会の時間を3時間に統合するスケジュールが採用され，神殿が急速に建設された。1982年には設計中もしくは建設中の神殿が22に達し，教会歴史上最多となった。またキンボール大管長は過密な旅行スケジュールで多くの国々を回り，各地で地域大会を開いた。こうした集会では，大管長は自分の必要を顧みず，機会を見つけては地元の聖徒たちと会い，励まし，祝福を与えた。

多くの国の教会員が神殿で神聖な儀式を受けたいと切望していた。その中の一人にスウェーデンのある末日聖徒がいる。何度も伝道の召しを果たし，伝道部長会でも働いた彼は，死去に際して財産の多くをスウェーデンの神殿建設基金に献金した。スウェーデンに神殿が建設されるという発表が出されるかなり前のことである。キンボール大管長が神殿建設の発表を行ったとき，この兄弟の納めたお金は利子が付いて大きな額に上っていた。そして神殿が奉献され，生前エンダウメントを受けていたこの兄弟は，自分自身が資金協力して建てられた神殿で，両親と結び固められたのであった。

シンガポールのある夫婦は子供を連れて神殿に行きたい，結び固めを受けて神殿の祝福を得たいと強く願っていた。この家族は多くのものを犠牲にして必要な資金を作り，ついに神殿に行くことができた。この家族は，自分たちを何年か前に教えてくれた宣教師の家に家族で滞在したのだが，ある日買い物に出かけているときに妻がいなくなってしまった。ようやく見つかった彼女は，手にシャンプーのボトルを持って泣いていた。彼女は神殿に来る資金をためるために，7年もの間シャンプーも使わないような生活をしてきたのであった。彼女にとって大変なことではあったが，家族が主の宮において永遠に一つとなった今，それはささいなこととなった。

キンボール大管長在任中のもう一つの重要な出来事は，1979年の新しい英語版欽定訳聖書の発行である。本文には手を加えず，モルモン書，教義と聖約，高価な真珠と相互参照できるように脚注を新たにしたものである。また大規模な項目別ガイドと聖書辞典が付いたおかげで新たな洞察が得られるようになったのは，現代の聖典ならではである。この版ではすべての章に前書きが加わり，ジョセフ・スミスが霊感を受けて行った欽定訳聖書の改訂から

スペンサー・W・キンボール大管長とアメリカ合衆国南西部のインディアンの人々。

の抜粋も付け加えられた。

1981年には，モルモン書，教義と聖約，高価な真珠の新版も発行された。この新版には新たな脚注や章の前書き，地図，索引が付いた。また時期を同じくして，教会は末日の聖典を多くの言語に翻訳する作業に力を入れ始めた。

キンボール大管長はその模範と教えを通して，何事にも秀でた人物となるように教会員を鼓舞している。ブリガム・ヤング大学創立100周年の記念式典で，キンボール大管長はこう語った。「わたしが希望し期待するのは，この大学ならびに教会の教育制度の中から，演劇や文学，音楽，彫刻，絵画，科学，そのほかあらゆる学術の分野における輝ける星が現れることです。」[10]
また別のときには，末日聖徒の芸術家が回復された福音の物語を力強く，説

得力を込めて描くことを希望していると語った。

キンボール大管長は過密なスケジュールにもかかわらず，人々に愛と奉仕の業を行う人であった。彼は特に北米ならびに南米に住む原住民の人々やポリネシアの島々に住む人々に愛を注いだ。そして時間をかけて彼らの援助のために多くのことを行った。彼は以前にジョージ・アルバート・スミス大管長から祝福を受けた際に，それらの民を見守るようにと勧告されていたのである。そして彼は大管長として十二使徒定員会の中の何人かを指名し，中央アメリカならびに南アメリカの国々を福音を宣べ伝える地として奉献もしくは再奉献した。以来中央ならびに南アメリカでは何万もの人々が福音の祝福を味わうようになった。

どんな人々にも思いやりを示すキンボール大管長の人柄は，混雑した空港でのある出来事から察することができる。その日，空港は天候不良のため足止めを食った人々でごった返していた。2歳の娘を連れて，長い列に並んでいる若い母親がいた。その母親は妊娠2か月で，娘を抱き上げることを医師から禁じられていた。疲れ果てた娘は大声で泣いている。助けてあげようとする人はなく，逆に子供の泣き声がうるさい，と何人かの人から非難の声が上がっていた。この母親はそのときのことをこう語っている。

「ある人がわたしたちの方に近づいて来て，にっこり笑ってこう言うのです。『何かお手伝いしましょうか。』わたしはため息混じりに感謝の言葉を述べて，お世話になることにしました。その男性は泣きじゃくる娘を冷たい床から抱き上げ，しっかりと胸に抱いて背中を優しくなでてくれました。そして，ガムをあげてもいいですか，と尋ねるのです。娘が泣きやむと，娘を抱いたまま列の前に並んでいる人たちの方へ行って何やら穏やかに話していました。わたしに手を貸すよう，頼んでくれたのです。皆引き受けてくれたようでした。次に〔列の前の方にある〕チケット売り場に行って，すぐ出発する便に乗れるようにしてくれました。そしてわたしと娘をベンチまで案内すると，そこで少しの間おしゃべりをしました。その方は，もう大丈夫と分かると行ってしまいました。それから1週間たって，わたしは使徒であるスペンサー・W・キンボールの写真を見て，空港でのあの見知らぬ紳士が彼であったことを知ったのです。」[11]

死去する前の数か月間，キンボール大管長は重い病気に苦しんだ。しかし，そうした試練の中にあっても，忍耐強く長く堪え忍び，勤勉であることの模範を示した。そして1985年11月5日に，大管長としての12年にわたる奉仕に終止符を打った。

イエス・キリストの回復された福音を受け入れる世界中の人々は，
神聖な儀式のもたらす祝福を受けることができる。

今日の教会

エズラ・タフト・ベンソン大管長

スペンサー・W・キンボール大管長の死去により新たに大管長に召されたのは，エズラ・タフト・ベンソンである。ベンソン大管長は当初，モルモン書を読み研究することの重要性を強調した。「モルモン書が人々をキリストのみもとへ導」くことを証し，ジョセフ・スミスのモルモン書に関する次の言葉に改めて賛同した。「〔モルモン書は〕わたしたちの宗教のかなめ石である。そして，人はその教えを守ることにより，ほかのどの書物にも増して神に近づくことができる。」[1]

1986年4月の総大会で，ベンソン大管長はこう宣言した。「主は教会を財政的な危機から救うために，御自身の僕ロレンゾ・スノーに霊感を与え，什分の一の原則を再度強調されました。……そして主は今，モルモン書を再度強調する必要があることを明らかにしておられます。……これからモルモン書を毎日ひもとき，そこに書かれている教えに従って生きるなら，神がシオンの子らと教会のうえに，かつてない祝福を注いでくださると約束します。」[2] 世界中の数百万の人々がこのチャレンジを受け入れ，約束された祝福を手にした。

もう一つの大切なテーマは，高慢を避けることの大切さである。1989年4月の総大会でベンソン大管長は教会員に「高慢を克服して器の内側を清める」よう呼びかけた。高慢こそ，ニーファイの民が滅びた原因であると警告したのである。ベンソン大管長は「高慢の治療薬は謙遜です。柔和と従順です」[3] と述べた。

十二使徒定員会会員として奉仕している間，エズラ・タフト・ベンソンは，福音に従う生活がどのようなものかを示すまたとない機会を得た。1952年，デビッド・O・マッケイ大管長の強い勧めによって，ドワイト・D・アイゼンハワー大統領の下で農務長官の任務を引き受けたのである。十二使徒定員会会員が合衆国大統領の閣僚として働くのは，教会歴史上他に例を見ない。8年間の在職中，ベンソン長老はその高潔さと合衆国政府の農業政策を指揮

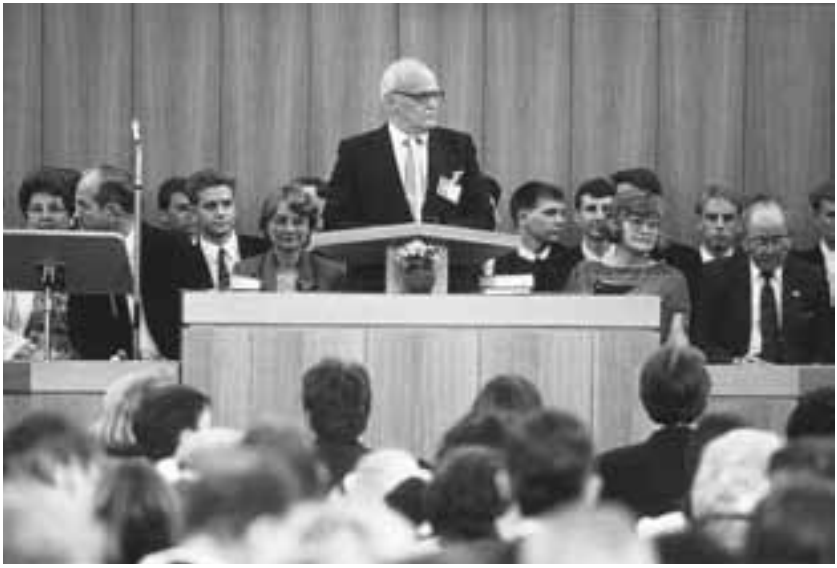
し実施する手腕により，内外から広く尊敬を得た。国々の指導者と友好を深め，世界中に教会の代表者を派遣するための扉を開いたのである。

ベンソン大管長の指導の下，教会は世界に向けて重要な発展を遂げた。1987年8月28日，ドイツ連邦共和国のフランクフルト神殿を奉献した。これはベンソン大管長にとって感慨深い出来事であった。1964年から1965年にかけて，フランクフルトに本部を置くヨーロッパ伝道部の部長として働いていたからである。

また，1985年6月29日，ドイツ民主共和国にフライベルク神殿が奉献された。この奉献に至るまでに，神殿建設を巡る数々の奇跡が起こった。ドイツ民主共和国への1968年の訪問のとき，当時十二使徒定員会会員であったトーマス・S・モンソン長老は聖徒たちにこう語った。「もし皆さんが神の戒めを忠実に守るならば，ほかの国々の会員たちと同様に，あらゆる祝福が皆さんのものとなるでしょう。」1975年，割り当てを受けて再度訪問したモンソン長老は，東ドイツの地を主に奉献するよう御霊（みたま）の促しを受け，次のような祈りをささげた。「愛する天のお父様，この地におけるあなたの教会の会員にとって，この日が新たな出発の日となりますように。神殿の祝福にあずかりたいという聖徒たちの心からの願いがかなえられますように。」モンソン長老のこの霊感あふれる約束と預言的な奉献の祈りは現実のものとなったのである。[4]

1989年3月末日，ドイツ民主共和国は末日聖徒イエス・キリスト教会の宣教師の入国を許可した。そして1989年11月9日，多くの聖徒たちの信仰と祈りがこたえられ，ヨーロッパを東西に分けていた障壁が取り除かれた。改宗者が増え，教会の建物が建設された。ある改宗者が初めて教会のことを知ったのは，1990年5月1日に新築されたドレスデンの教会堂のオープンハウスに出席したときのことであった。それから1週間もしないうちに，彼は宣教師の話を聞き終え，モルモン書を隅から隅まで2度読み，福音の真実性に対する強い証を得てバプテスマを受けた。[5]

1991年6月24日，モスクワでタバナクル合唱団のコンサートが開かれた。その後の晩餐（ばんさん）会で，ロシア・ソビエト連邦社会主義共和国の副大統領が，ロシアで末日聖徒イエス・キリスト教会を公式に認めることを発表した。これは教会がこの広大な国で教会ユニットを設けることができることを意味していた。こうして1990年代にたくさんの旧ソ連の国々や東ヨーロッパ諸国が，福音を宣（の）べ伝える国として奉献された。アルバニア，アルメニア，ベラルーシ，エストニア，ハンガリー，ラトビア，リトアニア，ルーマニア，ロシア，そしてウクライナである。教会は各国に教会の施設を建設したり賃借したり



1991年6月22日，ポーランドのワルシャワで末日聖徒の教会堂が奉献された。
このような教会堂は多くの国々で教会員の安らぎの場となっている。

した。そして，大勢の人が各国で福音が真実であるという証を得ている。第二次世界大戦以来初めてポーランドの地で教会堂が奉献された日，十二使徒定員会のラッセル・M・ネルソン長老はその教会堂が「悩める人々の避け所となり，義に飢え渇く人々に希望を与える安息の場となるように」[6] と祈った。この祝福は，多くの国々で福音に平安と喜びを見いだした聖徒たちにとって，現実のものとなっている。

教会員数の驚異的な増加と，ベンソン大管長が力説した伝道活動の結果，大管長の在任期間の終わりには，伝道部数は295，宣教師総数は4万8,000人に達した。

またベンソン大管長の在任中に，教会福祉プログラムも変化した。世界各地で，末日聖徒以外の人々に対する人道的支援がさらに強化されるようになったのである。災害に遭った人々を救済し，長期にわたる自立を促進する活動である。大量の食糧や衣服，医薬品，毛布，現金などが困窮者に配布され，医療や識字運動などの長期計画が組まれてきた。この慈善奉仕は現在，世界各地の何千もの人々のために行われている。

老齢による衰弱と愛妻フローラとの死別に苦しみながらも，主の預言者としての使命を雄々しく果たしたベンソン大管長は，1994年5月30日，94歳で死去した。その跡を継いだのは，当時十二使徒定員会会長の任にあったハワード・W・ハンターである。

ハワード・W・ハンター大管長

1994年6月6日，大管長に召されてから初めての記者会見でハワード・W・ハンター大管長は，自分の務めの重要なテーマを幾つか紹介して次のように語った。「主イエス・キリストの生涯と模範，特に主が示された愛と希望と慈悲に，これまで以上の注意を払って生活するようすべての教会員にお勧めします。

わたしたちが互いにもっと親切にし，もっと礼儀を尽くし，もっと謙遜で，忍耐強く，赦(ゆる)し合えるように祈っています。」

また，教会員に向かって次のように語った。「主の宮が，教会員であることの崇高な象徴であり，最も神聖な聖約を交わす至高の場所であることをはっきりと認識してください。神殿に参入するふさわしさをすべての教会員が身に付けること，これこそがわたしの心からの願いです。」[7] 多くの教会員がこの要請に従って生活を変え，高い霊性という祝福を得た。

ハンター大管長は研ぎ澄まされた知性の持ち主であり，これは教会にとって大きな資産であった。1970年代後半，ハンター大管長はその才をすべて注ぎ込むことのできる仕事を与えられた。用地を取得して，聖地における教会の主要な建物――ブリガム・ヤング大学近東研究エルサレムセンターの建設を監督するという責任を果たしたのである。このセンターはオリブ山に連なるスコープス山の上に建っている。学生たちはここに寄宿して，このえり抜きの地エルサレムについて，そこに住む民（ユダヤ人やアラブ人）について，そしてイエスや古代の預言者の足跡について研究している。同センターが建設されたことは，研究者や学生たちにとっては祝福である。また，この建物を訪れる人々の多くが，その美しさに感動している。

ハンター大管長はまた，ハワイのライエにあるブリガム・ヤング大学ハワイ校に隣接したポリネシア文化センターの発展にも重要な役割を担った。彼は教会が所有し運営する42エーカー（約17ヘクタール）の観光施設である同センターの設立理事会の理事長を務めた。センターの目的は，ポリネシアの文化を保存するとともに，学生に働く機会を提供することにある。1963年に建てられたこのセンターはハワイの中心的な観光施設で，年間ほぼ100万の

1979年10月24日，エルサレムにあるオーソン・ハイド記念公園が奉献された。オリブ山にあるこの公園は，オーソン・ハイドがパレスチナの地を1841年10月24日に奉献したことを記念して作られた。

観光客が訪れ，ポリネシアの島々の音楽やダンスや絵画，工芸を楽しんでいる。

大管長に召される前にハンター長老は今日の家族歴史部の前身であるユタ系図協会で8年間奉仕した。この間に系図協会は1969年に第1回の世界記録会議を主催，それは彼の言葉を借りれば「教会に対する印象を高め，わたしたちの業を全世界に広めるための門戸を開くもの」[8] であった。彼は生者死者を問わず，あらゆる人に大きな愛を示した。そしてしばしば，わたしたちが大きな一つの家族の一員であることを教えた。ハンター大管長はキリストのような愛の持ち主として知られている。

ハンター大管長は生涯，試練の連続であったが，信仰と不屈の精神で苦難を乗り越えていった。痛みを伴う重い病気，体をむしばむ慢性疾患，伴侶（はんりょ）との死別などの試練にもかかわらず，熱心に主に仕え，教会の様々な仕事を管理するためにしばしば旅行をし，全力を尽くして働いた。大管長は自ら語った次の言葉を模範で示した。「道を踏み外してしまった子供を抱えて悩んでいる方，経済的な問題や感情的な衝突で家庭や幸福が危機に瀕（ひん）している方，また近親者を亡くした方，健康を害している方，そのような方々の心に安らぎがあるよう祈っています。人は自分の力で耐えられないような誘惑を受けることはありません。回り道をしていると感じるときや望みがないと感じるとき，人は主のみもとに続くまっすぐで狭い道を歩んでいるのです。」[9]

ハンター大管長は1994年12月11日，メキシコのメキシコシティーで教会の2,000番目のステーク設立を管理した。これは教会歴史上，記念すべき出来事である。集まった人々に大管長はこう述べた。「主はその僕（しもべ）たちを通して，この奇跡をもたらしてくださいました。この業はこれからも力強く前進することでしょう。主は，リーハイやその子供たちに，子孫について約束されました。その約束は今，メキシコの地で果たされました。そして，これからも果たされていくことでしょう。」[10] ハンター長老が中央幹部として働いている間，ラテンアメリカの教会は劇的に発展した。そして大管長に召されたときは，メキシコとブラジルとチリだけで教会員数が150万を超え，当時のユタの教会員数を上回った。

ハンター大管長の在任期間はわずか9か月であったが，聖徒たちに強い影響を与えた。聖徒たちはハンター大管長を，思いやりと忍耐とキリストのような特質を持つ偉大な模範として記憶にとどめることであろう。

ゴードン・B・ヒンクレー大管長

ハンター大管長の跡を継いで大管長に召されたのは，ゴードン・B・ヒンクレーである。ヒンクレー大管長は，新しい大管長会のテーマは何ですかという質問に，こう答えている。「『続け，励め，進め』です。わたしたち大管長会の目指すところは，前任者たちがこれまで立派に，忠実に，そして見事に築いてきた偉大な業を推し進めることです。そして，家庭を大切にすることです。教育を発展させることです。全世界の人々の心に寛容と忍耐をはぐくむことです。そして，イエス・キリストの福音を宣べ伝えることです。」[11]

ヒンクレー大管長は教会指導者として広範にわたる経験を積むことによって，大管長会で働く召しの備えをしてきた。1961年に十二使徒定員会会員として支持され，1981年からはスペンサー・W・キンボール，エズラ・タフト・ベンソン，ハワード・W・ハンター各大管長の副管長を務めた。その間，高齢のために衰弱した大管長が十分に働けない時期が何度かあったが，その度にヒンクレー長老は副管長として重責を担った。

大変な責任が続く中にあってゴードン・B・ヒンクレーを支えてきたのは，若いころイギリスで伝道していたときに受けた一つの忠告であった。幾分落胆していた彼は，父親にこう書き送った。「わたしは自分の時間や家族が送ってくれたお金を無駄にしています。ここにいても意味がないように思えるのです。」するとしばらくして，父親から短い手紙が届いた。「愛するゴードンへ。手紙を読みました。お父さんにできる忠告はただ一つ。自分を忘れて御業（みわざ）に励みなさい。愛を込めて，父より。」

ヒンクレー大管長はそのときのことをこう語っている。「わたしは父の返事をよくよく考えました。そして次の日の朝，聖文学習会で主の偉大な次の御言葉（みことば）を読みました。『自分の命を救おうと思う者はそれを失い，わたしのため，また福音のために自分の命を失う者は，それを救うであろう。』（マルコ8：35）わたしは感動しました。その簡潔な言葉，約束が父の手紙と重なって心に迫ってきたのです。わたしは2階に行って……ひざまずき，自分自身を忘れて御業に励むことを主に聖約しました。今にして思えばこれが人生の岐路でした。以来わたしが経験したすばらしい出来事は，さかのぼって考えると，すべてこのときに下した決断のおかげなのです。」[12]

ヒンクレー大管長は常に神と未来を心から信じる，根っからの楽観主義者として知られている。「きっとうまくいきます。努力を続けましょう。信じましょう。元気を出してください。くよくよしないでください。万事うまくいきますよ。」[13]

報道関係者から，教会が直面する最も難しい問題は何かと問われた大管長は，こう答えた。「わたしたちが直面している最も重大な問題，しかも最も喜ぶべき問題は，発展に伴って起こる問題です。」そして，教会の発展に伴って神殿を含む教会の建物がたくさん必要になることを説明した。「今，教会歴史の中で神殿建設が最も盛んな時代です。現在のような勢いで神殿の建設が進められたことは，かつてありませんでした。今，47の神殿で儀式が行われています。ほかに13の神殿が設計または建設の段階にあります。わたしたちは引き続き神殿を建てていきます。」[14] また教会の絶え間ない発展に伴い，モルモン書を多数の言語に翻訳することも必要となっている。

ヒンクレー大管長は教会の劇的な発展に直接携わってきた。1967年に大阪の大会に集っていた大管長は，聴衆の中に若人がたくさんいるのを見てこう語った。「皆さんの中に日本の教会の未来が見えます。偉大な未来です。成し遂げるべきことを考えると，わたしたちはまだ表面をなでたにすぎません。でも，わたしは今ここで，これまで長い間感じてきたことを話したいという気持ちに駆られています。時を待たずしてこの偉大な国に，シオンのステークが幾つも設立されるようになることでしょう。」[15] 1世代のうちに，日本の末日聖徒は10万人に達し，たくさんのステークや伝道部，地方部が組織され，神殿も建てられるまでになった。

ヒンクレー大管長はフィリピンの教会の発展にも強い関心を持っている。最初のステークがマニラに組織されたのは1973年のことである。それから20年後，大管長に召されたときにはフィリピンの教会員数は30万を超え，教会員は神殿をはじめとする数々の祝福を受けるようになっていた。ヒンクレー大管長は韓国や中国，東南アジアなど，アジア各地の教会の発展に非常に大きな関心を寄せてきた。

アジアの教会員に霊性の高い人が多いことは，ある中央幹部の体験によく表れている。その幹部は，フィリピンのあるステークでステーク会長を召す割り当てを受けていた。何人もの神権指導者と面接をした後，20代半ばの兄弟をステーク会長に召すよう霊感を受けた。その若い兄弟に召しのことを伝え，隣の部屋で副会長を選ぶよう頼んだ。その若い兄弟は30秒ほどで戻って来てしまったので，幹部の兄弟は自分の意思が伝わらなかったのかと思ったが，そうではなかった。その兄弟はこう答えたのである。「いいえ，わたしは主の御霊を通して，自分がステーク会長に召されることを1か月前から知っていました。副会長はもう選んであります。」

世界各地で教会の確立に力を尽くしてきたヒンクレー大管長は，在任中に

次の発表を行うのに，まさに適任であった。「教会の統計を担当している人々の話によると，現在の勢いでいけば，今からほんの数か月後の来年の2月には，合衆国外の教会員の数が，合衆国内の教会員の数を超えることになります。この教会員数の逆転にはすばらしい意味があります。この業を世界中に広めるための計り知れない努力が実を結んだということなのですから。」[16]

ヒンクレー大管長の在任期間内に強調されているのは，充実した家庭生活の重要性である。家族の価値を認めようとしないことの多い今の世の中にあっては特にそれが重要である。ヒンクレー大管長の管理の下，大管長会と十二使徒評議会は，家族に関する特別な宣言を世界に発表した。こう述べている。

「家族は神によって定められたものです。男女の間の結婚は，神の永遠の計画に不可欠なものです。子供たちは結婚のきずなの中で生を受け，結婚の誓いを完全な誠意をもって尊ぶ父親と母親により育てられる権利を有しています。家庭生活における幸福は，主イエス・キリストの教えに基づいた生活を送るときに達成されるに違いありません。……

わたしたちは警告します。貞節の律法を犯す人々，伴侶や子供を虐待する人々，家族の責任を果たさない人々は，いつの日か，神の御前（みまえ）に立って報告することになります。またわたしたちは警告します。家庭の崩壊は，個人や地域社会，国家に，古今の預言者たちが預言した災いをもたらすことでしょう。」[17]

1995年4月の総大会でヒンクレー大管長は，1995年8月15日をもってこれまですばらしい働きをした地区代表を解任し，新たに地域幹部という責任を設けることを発表した。地域幹部はステーク大会を管理し，ステークの組織や再組織を行い，ステーク会長，伝道部長，地方部長に訓練を行い，大管長会と地域会長会から受けたその他の責任を行う。この新たな責任は，教会指導者が奉仕の対象となる人々の近くで生活し，働くことを可能にするものである。

ある中央幹部は，ヒンクレー大管長を支持するために聖徒たち一人一人にできる最良の方法は何かという問題について，こう語っている。「預言者，聖見者，啓示者，管理大祭司，末日聖徒イエス・キリスト教会の大管長という神聖な職に召され，これを引き受けた大管長を支持するためにできる最善の事柄は，『続け，励め，進め』という呼びかけにこたえることなのです。」[18]

これらの宣教師たちは，「神の真理は大胆かつ気高く，悠然と出で立ち，
あらゆる大陸を貫き……あらゆる者の耳に達し」という
ジョセフ・スミスの預言の成就の一翼を担っている。

結　び

わたしたち一人一人は教会歴史の中で自分の占める場所を持っている。ある人々は何代にもわたって福音を守り，主の道に添って子供を育てる家庭に生を受ける。しかし，福音を初めて耳にしてバプテスマの水をくぐり，神聖な聖約を交わして神の王国の建設の一端を担う人々もいる。中にはその国での教会歴史がまだ幕を開けたばかりで，子孫のために信仰の伝統をこれから築こうとしている人々もいる。置かれている状況はどうあれ，わたしたちはそれぞれ，シオンの建設と救い主の再臨への備えという大義の中で重要な役割を担っているのである。わたしたちは「もはや異国人でも宿り人でもなく，聖徒たちと同じ国籍の者であり，神の家族なのである。」（エペソ２：19）

新会員であるか昔からの会員であるかにかかわらず，わたしたちは先人たちから信仰と犠牲という遺産を受け継いでいる。さらにわたしたちは，自分の子孫にとって，また天の御父の大勢の子供たち，すなわちイエス・キリストの福音をまだ耳にしていない人々や受け入れていない人々にとっては，現代の開拓者としての役割を担っている。主の業を忠実に推し進めることによって，わたしたちは世界中で，それぞれ異なった方法で貢献している。

父親と母親は，子供たちが義の原則を身に付けられるように，祈りを込めて訓練している。ホームティーチャーと訪問教師は，問題を抱えた人々の世話をしている。多くの会員は，宣教師として福音をもたらす業に数年をささげることを選択した家族にしばしの別れを告げている。神権指導者や補助組織指導者は，無私の心で奉仕の召しにこたえている。また，先祖の名前の探究と神殿での神聖な儀式の執行に人知れず膨大な時間をささげる会員を通して，生者と死者の双方に祝福がもたらされている。

わたしたち一人一人は預言者ジョセフ・スミスを通して啓示された末日聖徒イエス・キリスト教会の未来の姿を実現するために努力している。1842年，ジョセフはこう預言した。

「真理の旗が立てられた。いかなる汚（けが）れた者の手も，この御業（みわざ）の発展を止めることはできない。迫害は威を振るい，暴徒は連合し，軍隊が集合し，中

傷の風が吹き荒れるかもしれない。しかし神の真理は大胆かつ気高く，悠然と出(い)で立ち，あらゆる大陸を貫き，あらゆる地方に至り，あらゆる国々に広まり，あらゆる者の耳に達し，神の目的は成し遂げられるであろう。かくして，大いなるエホバは，御業(みわざ)は成ったと告げられることだろう。」[1]

預言者ジョセフ・スミスの時代，教会はまだ非常に小さかった。しかし彼は，この教会がイエス・キリストの福音の真理をもって全地を満たすという行く末を持った，地上における神の王国であることを知っていた。わたしたちは近年の教会の驚くべき発展を目にしている。神の王国，すなわち永遠に存続する神の王国の確立のために，信仰と犠牲をささげることのできる時代に生を受けたわたしたちは，特別に祝福されているのである。

注

序

1. *History of the Church*，第3巻，30
2. “Easter Greetings from the First Presidency,” *Church News*，1995年4月15日付，1

第２章

1. ルーシー・マック・スミス，*History of Joseph Smith*（1958年），128
2. *Reuben Miller Journals : 1848－49, 21 Oct. 1848*；歴史部，記録保管課，末日聖徒イエス・キリスト教会；以降，末日聖徒教会記録保管課と略；表記法は現代風に改訂
3. ディーン・ジェシー編，“Joseph Knight's Recollection of Early Mormon History,” *BYU Studies*, 1976年秋，36；表記法は現代風に改訂
4. *History of the Church*，第5巻，124－125
5. *The Saints' Herald*，1882年3月1日，68
6. *History of the Church*，第1巻， 55
7. “History of Brigham Young,” *Millennial Star*，1863年6月6日，361
8. ブリガム・ヤング，*Journal of Discourses*，第3巻，91
9. “History of Brigham Young,” *Millennial Star*，1863年7月11日，438
10. “Letter from Oliver Cowdery to W. W. Phelps,” *Latter-day Saints' Messenger and Advocate*，1835年10月，199
11. *History of the Church*，第1巻，78
12. *History of the Church*，第1巻，78
13. ルーシー・マック・スミス，*History of Joseph Smith*，168
14. ディーン・ジェシー編，*Joseph Knight's Recollection of Early Mormon History*， 37；表記法は現代風に改訂
15. *History of the Church*，第5巻，126
16. *History of the Church*，第2巻，443
17. “Conference Minutes,” *Times and Seasons*，1844年5月1日付，522－523
18. *Joseph Knight Autobiographical Sketch, 1862*年；末日聖徒教会記録保管課
19. ニューエル・ナイト，ラリー・ポーター，*A Study of the Origins of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints in the States of New York and*

*Pennsylvania, 1816－1831*で引用，296
20. *Broome Republican*，1831年5月5日。ラリー・ポーター“A Study of the Origins of The Jesus Christ of Latter-Day Saints,”298－299で引用，強調付加
21. ルーシー・マック・スミス，*History of Joseph Smith*，204

第３章

1. オーソン・F・ホイットニー“Newel K. Whitney,”*Contributor*，1885年1月，125
2. エリザベス・アン・ホイットニー，エドワード・W・タリッジ，*Women of Mormondom*〔1877年〕，42で引用
3. オーソン・F・ホイットニー，*Conference Report*，1912年4月，50
4. ブリガム・ヤング，*Journal of Discourses*，第11巻，295
5. オーソン・F・ホイットニー，“Newel K. Whitney,”126
6. ジョセフ・ホルブルック，ジェームズ・L・ブラッドリー，*Zion's Camp 1834: Prelude to the Civil War*（1990年），33で引用
7. ジョージ・アルバート・スミス，*History of George Albert Smith, 1834－1871*，17；末日聖徒教会記録保管課
8. *History of the Church*，第2巻，73
9. *History of the Church*，第2巻，68
10. ジョセフ・ヤング・シニア，*History of the Organization of the Seventies*（1878年），14
11. ウィルフォード・ウッドラフ，*Deseret News*，1869年12月22日付，543
12. *Zera Pulsipher Record Book, 1858－1878*，5；末日聖徒教会記録保管課
13. “History of John E. Page,”*Deseret News*，1858年6月16日付，69
14. オーソン・F・ホイットニー，*Life of Heber C. Kimball*，第3版（1945年），104
15. オーソン・F・ホイットニー，*Life of Heber C. Kimball*，105
16. *Eliza R. Snow: An Immortal*（1957年），54
17. “Sketch of an Elder's Life,”*Scraps of Biography*（1883年），12
18. *History of the Church*，第2巻，430
19. ダニエル・テーラー“Incidents of Experience,”*Scraps of Biography*，32
20. エライザ・R・スノー，タリッジ，*Women of Mormondom*，95で引用

第４章

1. エミリー・M・オースチン，*Mormonism; or, Life Among the Mormons*（1882年），63
2. エミリー・M・オースチン，*Mormonism*，64
3. ジョセフ・スミス，*Latter-day Saints' Messenger and Advocate*，1835年9月，179
4. ラリー・C・ポーター，“The Colesville Branch in Kaw Township, Jackson

Country, Missouri, 1831 to 1833,” *Regional Studies in Latter-day Saints Church History: Missouri*，アーノルド・K・カー，クラーク・V・ジョンソン共編（1994年），286－287

5. *History of the Church*，第1巻，199
6. エミリー・M・オースチン，*Mormonism*，67
7. *Autobiography of Parlay P. Pratt*，パーリー・P・プラット・ジュニア編（1938年），72
8. *History of the Church*，第1巻，269
9. *Far West Record*，ドナルド・Q・キャノン，リンドン・W・クック共編（1983年），65
10. “Newel Knight’s Journal,” *Scraps of Biography*（1883年），75
11. メアリー・エリザベス・ロリンズ・ライトナー，*Utah Genealogical and Historical Magazine*，1926年7月号，196
12. *History of the Church*，第1巻，391
13. “Philo Dibble’s Narrative,” *Early Scenes in Church History*（1882年），84－85
14. *Autobiography of Parlay P. Pratt*，102
15. “Newel Knight’s Journal,” *Scraps of Biography*，85
16. アンドリュー・ジェンソン，*The Historical Record*（1888年），第7巻，586
17. 教義と聖約116：1；教義と聖約107：53－57と*History of the Church*，第3巻，34－35も参照
18. オーソン・F・ホイットニー，*Life of Heber C. Kimball*，第3版（1945年），213－214
19. リランド・ホーマー・ジェントリー，*A History of the Latter-day Saints in Northern Missouri from 1836 to 1839*（*ブリガム・ヤング大学博士号論文，1965年*），419
20. アマンダ・バーンズ・スミス，エドワード・W・タリッジ，*Women of Mormondom*〔1877年〕，124，128で引用
21. アマンダ・バーンズ・スミス，タリッジ，*Women of Mormondom*，126で引用
22. E・デール・レバロン，*Benjamin Franklin Johnson: Colonizer, Public Servant and Church Leader*（ブリガム・ヤング大学修士号論文，1966年），42－43
23. リランド・ホーマー・ジェントリー，*A History of the Latter-day Saints in Northern Missouri*，518
24. *Autobiography of Parlay P. Pratt*，211
25. “Copy of a Letter from J. Smith Jr. to Mr. Galland,” *Times and Seasons*，1840年2月，52
26. ライマン・オマー・リトルフィールド，*Reminiscences of Latter-day Saints*（1888年），72－73
27. *History of the Church*，第3巻，423

28. マサイアス・F・カウリー，*Wilford Woodruff*（1909年），102

第５章

1. “Journal of Louisa Barnes Pratt,” *Heart Throbs of the West*，ケート・B・カーター編，全12巻（1939－1951年），第８巻，229
2. “Journal of Louisa Barnes Pratt,” 第８巻，233
3. “Journal of Mary Ann Weston Maughan,” *Our Pioneer Heritage*，ケート・B・カーター編，全９巻（1958－1966年），第２巻，353－354
4. *History of the Church*，第４巻，186
5. ルイザ・デッカー，“Reminiscences of Nauvoo,” *Woman's Exponent*，1909年３月号，41
6. “The Mormons and Indians,” *Heart Throbs of the West*，第７巻，385
7. B・H・ロバーツ，*A Comprehensive History of the Church*，第２巻，472
8. *History of the Church*，第５巻，2
9. *Minutes of the Female Relief Society of Nauvoo, 1842年４月28日*，40
10. *Minutes of the Female Relief Society of Nauvoo, 1842年４月28日*，33
11. “Journal of Louisa Barnes Pratt,” 第８巻，231
12. *History of the Church*，第４巻，587，604；第６巻，558
13. *History of the Church*，第６巻，555
14. ケネス・W・ゴッドフリー，“A Time, a Season, When Murder Was in the Air,” *Mormon Heritage*，1994年7月／8月，35－36
15. *History of the Church*，第６巻，601
16. マサイアス・カウリー，*Reminiscences*（1856年），3；末日聖徒教会記録保管課
17. トーマス・フォード，*A History of Illinois*，ミロ・ミルトン・クエイフ編，全2巻（1946年），第２巻，217
18. トーマス・フォード，*A History of Illinois*，第２巻，221－223
19. *History of the Church*，第７巻，230
20. *History of the Church*，第７巻，236で引用
21. *History of the Church*，第７巻，236で引用
22. *History of the Church*，第７巻，236で引用

第６章

1. ジャニータ・ブルックス編，*On the Mormon Frontier: The Diary of Hosea Stout*，全２巻（1964年），第１巻，114；表記法は現代風に改訂
2. ジャニータ・ブルックス編，*On the Mormon Frontier*，第１巻，117；表記法は現代風に改訂
3. ジェームズ・B・アレン，*Trials of Discipleship:The Story of William Clayton, a Mormon*（1987年），202
4. ラッセル・R・リッチ，*Ensign to the Nations*（1972年），92

5. *Reading in LDS Church History: From Original Transcripts*，ウィリアム・E・ベレット，アルマ・P・バートン共編，全3巻（1965年），第2巻，221
6. ジェームズ・S・ブラウン，*Giants of the Lord: Life of a Pioneer*（1960年），120
7. キャロライン・オーガスタ・パーキンズ，“The Ship Brooklyn Saints,”*Our Pioneer Heritage*（1960年），506で引用
8. Utah Semi-Centennial Commission，*The Book of the Pioneers*（1897年），全2巻，2：54；末日聖徒教会記録保管課
9. *Jean Rio Griffiths Baker Diary*，1851年9月29日；末日聖徒教会記録保管課
10. “Story of Nellie Pucell Unthank,”*Heart Throbs of the West*，ケート・B・カーター編，全12巻（1939－1951年），第9巻，418－420
11. ウィリアム・パーマー，デビッド・O・マッケイ，“Pioneer Women,”*Relief Society magazine*，1948年1月号，8で引用
12. 「国を造りたる」『賛美歌』24番

第７章

1. *Journal of Discourses*，第13巻，85－86参照
2. ジョン・R・ヤング，*Memoirs of John R. Young*（1920年），64
3. カーター・E・グラント，*The Kingdom of God Restored*（1955年），446
4. B・H・ロバーツ，*Life of John Taylor*（1963年），202で引用
5. フランシス・M・ギボンズ，*Lorenzo Snow: Spiritual Giant, Prophet of God*（1982年），64
6. “The Church in Spain and Gibraltar,”*Friend*，1975年5月号， 33
7. R・ラニアー・ブリッシュ，*Unto the Islands of the Sea: A History of the Latter-day Saints in the Pacific*（1986年），21－22
8. チャールズ・W・ニブリー，“Reminiscences of President Joseph F. Smith,”*Improvement Era*，1919年1月号，193－194
9. ラッセル・R・リッチ，*Ensign to the Nations*（1972年），349で引用
10. *Diary of Charles Lowell Walker*， A・カール・ラーソン，キャサリン・マイルズ・ラーソン共編，全2巻（1980年），第1巻，239；表記法は現代風に改訂
11. レナード・J・アリントン，*Charles C. Rich*（1974年），264
12. エリザベス・ウッド・ケイン，*Twelve Mormon Homes Visited in Succession on a Journey through Utah to Arizona*（1974年），65－66
13. ゴードン・B・ヒンクレー，『回復された真理』で引用，126参照
14. ブリガム・ヤング，*Journal of Discourses*，第18巻，233

第８章

1. カーリル・メアー，“Enduring Believers: Czechoslovakia and the LDS Church, 1884－1990,”*Journal of Mormon History*（1992年秋），112－113
2. R・ラニアー・ブリッシュ，*Unto the Islands of the sea: A History of the*

Latter-day Saints in the Pacific（1986年），352－354
3. リー・G・キャントウェル，“The Separating Sickness,” *This People*（1995年夏），58
4. B・H・ロバーツ，*A Comprehensive History of the Church*，第5巻，592
5. B・H・ロバーツ，*A Comprehensive History of the Church*，第5巻，593
6. B・H・ロバーツ，*A Comprehensive History of the Church*，第5巻，590－591
7. メルビン・J・バラード，*Crusader of Righteousness*（1966年），16－17
8. ジェームズ・R・クラーク編，*Messages of the First Presidency of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints*，全6巻（1965－1975年），第3巻，256－257
9. ジェームズ・B・アレン，ジェシー・L・エンブリー，カーリル・B・メアー，*Hearts Turned to the Fathers: A History of the Genealogical Society of Utah, 1894－1994*（1995年），39－41
10. B・H・ロバーツ，*A Comprehensive History of the Church*，第6巻，236
11. *Wilford Woodruff Journals*（1833－1898年），1893年4月6日；末日聖徒教会記録保管課
12. リチャード・ニーチェル・ホルザップフェル，*Every Stone a Sermon*（1992年），71，75，80
13. マサイアス・F・カウリー，*Wilford Woodruff*（1909年），602参照
14. “The Redemption of Zion,” Millennial Star，1900年11月29日付，754
15. “Biographical Sketches: Jennie Brimhall and Inez Knight,” *Young Women's Journal*，1898年6月号，245

第９章

1. サージ・F・バリフ，Conference Report，1920年10月，90で引用
2. ジェーム.ズ・R・クラーク編，*Messages of the First Presidency of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints*，全6巻（1965－1975年），第4巻，222
3. “Editorial,” *Improvement Era*，1936年11月号，692
4. 大管長会，Conference Report，1936年10月，3
5. J・ルーベン・クラーク・ジュニア，ステーク会長特別集会，1936年10月2日
6. 詳細はグレン・L・ラッド，*Pure Religion: The Story of Church Welfare Since 1930*（1995年）を参照
7. ビンチェンツォ・デ・フランチェスカ，「わたしにはその本を焼くことはできません」『聖徒の道』1988年7月号，14参照
8. ジョージ・アルバート・スミス，Conference Report，1948年4月，162
9. ジョージ・アルバート・スミス，*Sharing the Gospel with Others*，プレストン・ニブリー選（1948年），110－112
10. ジョージ・アルバート・スミス，Conference Report，1947年4月，5－6
11. グレン・L・ラッド，*Pure Religion*，248参照

12. エズラ・タフト・ベンソン，Conference Report，1947年4月，154
13. ゲリー・アバント，“War Divides, but the Gospel Unites,” *Church News*，1995年8月19日付，5で引用
14. 詳細はグレン・L・ラッド，*Pure Religion*，254－261を参照
15. ジョージ・アルバート・スミス，Conference Report，1949年4月，10
16. ルウェリン・R・マッケイ，*Home Memories of President David O. McKay*（1956年），5－6
17. ジョージ・デュラント，“No. 1 Christian,” *Improvement Era*，1968年11月号，82－84

第10章

1. ジョセフ・フィールディング・スミス，Conference Report，1930年4月，91
2. ジョセフ・フィールディング・スミス，Conference Report，1972年4月，13または *Ensign*，1972年7月号，27
3. フランシス・M・ギボンズ，*Harold B. Lee*（1993年），459
4. ジェイ・M・トッド，“The Remarkable Mexico City Area Conference,” *Ensign*，1972年11月号，89，93，95
5. W・グラント・バンガーター，「教会史上に残る特別な日」『聖徒の道』1978年2月号，38－39または *Ensign*，1977年11月号，26－27
6. E・デール・レバロン，“Black Africa,” *Mormon Heritage*，1994年3／4月号，20
7. *The Teachings of Spencer W. Kimball*，エドワード・L・キンボール編（1982年），451
8. ブルース・R・マッコンキー，“All Are Alike unto God,” *Charge to Religious Educators*，第2版（1981年），153
9. E・デール・レバロン，“Black Africa,” 24
10. スペンサー・W・キンボール，“The Second Century of Brigham Young University,” *Speeches of the Year, 1975*（1976年），247
11. *Spencer W. Kimball*，エドワード・L・キンボール，アンドリュー・E・キンボール・ジュニア共編（1977年），334

第11章

1. エズラ・タフト・ベンソン，*A Witness and a Warning*（1988年），3，21：*History of the Church*，4：461も参照
2. エズラ・タフト・ベンソン，「神聖な務め」『聖徒の道』1986年7月号，78または *Ensign*，1986年5月号，78
3. エズラ・タフト・ベンソン，「高ぶりを心せよ」『聖徒の道』1989年7月号，7または *Ensign*，1989年5月号，6－7
4. トーマス・S・モンソン，「感謝を神に捧げん」『聖徒の道』1989年7月号，55ま

たは *Ensign*，1989年5月号，51。「イエスを愛する人々」『大会報告』1986年1月号，36または *Ensign*，1985年11月号，34も参照

5. ギャロルド・デービス，ノーマ・デービス，“The Wall Comes Down，”*Ensign*，1991年6月号，33
6. *Church News*，1991年6月29日付，12
7. ハワード・W・ハンター，*Church News*，1994年6月11日付，14
8. エリノア・ノールズ，*Howard W. Hunter*（1994年），193
9. ハワード・W・ハンター，「扉」『聖徒の道』1988年1月，63－71または *Ensign*，1987年11月号，60
10. *Church News*，1994年12月17日付，3
11. *Church News*，1995年3月18日付，10
12. *Gordon B. Hinckley: Man of Integrity, 15th President of the Church*，ビデオカセット（1994年）
13. ジェフリー・R・ホランド，“President Gordon B Hinckley，”*Ensign*，1995年6月号，5
14. *Church News*，1995年3月18日付，10
15. ゴードン・B・ヒンクレー，“Addresses，”AV 1801；末日聖徒教会歴史保管課
16. ゴードン・B・ヒンクレー，「この道を歩み続け，信仰を保つ」『聖徒の道』1996年1月号，76参照または *Ensign*，1995年11月号，70
17. 大管長会ならびに十二使徒評議会，「家族――世界への宣言」『聖徒の道』1996年6月号，10－11または *Ensign*，1995年11月号，102
18. ジェフリー・R・ホランド，“President Gordon B Hinckley，”13

結　び

1. *History of the Church*，第4巻，540